緋弾と世紀の大魔術師

ナンテコッタイ!!!＜(^o^)＞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾と世紀の大魔術師

【Ｎコード】
Ｎ８６１７Ｖ

【作者名】
ナンテコッタイ！！！＜（＾ｏ＾）＞

【あらすじ】
どこにでもいる……とは言い難い武偵、土屋・Ｃ・拓哉。
彼がどこにでもいるとは言い難い理由はあの世紀の大魔術師の子孫だからであった。
アリア、キンジ、そして拓哉。様々な事件をこの三人で解決していく。
ちなみにアレイスター・クロウリーは実在した人物です。
できる限りコメントやアドバイスをいただけると嬉しです。

双剣双銃の拓哉

俺の名は土屋（つちや）・C（シー）・拓哉（たくや）。どこにでもいる武偵……とは言い難いか。

なぜなら俺は、あの世紀の大魔術師、エドワード・アレクサンダー・クロウリーの子孫、クロウリー5世だからな。勿論受け継がれてきた魔術は使えるし、武装もしている。

受け継がれてきたのは魔術だけじゃなく、魔道書も受け継がれてきた。世界中の魔道書の知識が頭の中にある。

魔道書の知識とかを使えば禁書目録に出てくる魔術も実際に使える。例えば魔女狩りの王（イノケンティウス）みたいなものだ。

俺の武器は、ベレッタM92F（魔術で改造）二丁に日本刀二本だ。しかもただの日本刀ではなく、魔術がかかったものだ。双剣双銃（カドラ）の拓哉って言う神崎・H・アリアと同じ異名が付いている。

学科は強襲科（アサルト）でランクはS。双剣双銃（カドラ）のアリアといい勝負と言われてる。

っと、挨拶はここまでとして、次から本編が始まるぜ。

双剣双銃の拓哉（後書き）

次から本編

出会いは突然に

ｓｉｄｅ　キンジ

やばいな、間に合いそうにないな。チャリで行くしかないか。

その時俺は、自転車に仕掛けられている爆発物（プラスチック爆弾）に気づかなかった。いや気づけなかった。

「ソノジテンシャヲゲンソクサセルトバクハツシヤガリマス」

ふと横からそんな機械的な声が聞こえてきた。

キンジ（マジかよ、おい）

何気なく横を見てみると、暴走セグウェイが並走してきている。それにはスピーカーが付いた銃が付いていた。

キンジ（ハハッ。ふざけてるな。兎に角広いところに行かないとな。）

横を見ると、見覚えのある顔があった。

拓哉「ようキンジ。朝の運動は楽しいかい？」

キンジ「これが楽しいように見えるか？」

拓哉「いや。にしても朝っぱらから不幸だね～。お前どこぞの借金執事なんじゃねぇか？」

キンジ「俺の親は借金押し付けて失踪なんてしてねぇし、金髪ツインテのロリお嬢様なんぞに遣えてねぇよ」

拓哉「じゃあ幻想をぶち殺す右手を持ってる人なんじゃねえか？」
キンジ「いや暴食シスターさんなんて飼ってねぇし担任は合法ロリでもない。それよりコイツらどうにかしねーと」

キンジはあごで暴走セグウェイとプラスティック爆弾をさした。

拓哉「俺は自分でどうにかなるから大丈夫だがお前は？」
キンジ「自分じゃどうにもならねえな」
拓哉「キンジ。お前とは1年間という短い付き合いだった。」
キンジ「見捨てるのかよ。」
拓哉「だってお前ＨＳＳじゃないと戦力外じゃん」
キンジ「あまりＨＳＳと言わないでくれ」
拓哉「自分でバレるような状況に陥ったのが悪い」
キンジ「ぐっ……」

そこでふと声が聞こえた。

「あんた達。手を上げなさい。」
キンジ「誰だあいつ？」
拓哉「神崎・Ｈ・アリアじゃねぇか？あいつ何やってんだ？」
キンジ「神崎・Ｈ・アリアって誰？」
拓哉「俺と同じ強襲科のＳランク武偵」
キンジ「マジか」
拓哉「初めて会ったが俺といい勝負って噂されてる奴だ」
キンジ「お前と？それはスゲェんだろうな」
拓哉「そうかもな。――――おーい神崎ー！！俺は自分でなんとかなるからキンジを助けてやれー！！」
アリア「なんであたしの名前知ってんのよ。まぁいいか。わかったわ！」
キンジ「くるな！こいつには爆弾が仕掛けられてる！」

そう叫ぶキンジ。しかし、

アリア「武偵憲章１条、仲間を信じ、仲間を助けよ！行くわよぉー！」

そう言って飛び降りるアリア。パラグライダーを使ってキンジを助けだし、自転車が爆発した。その爆風で二人とも吹っ飛んでいった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　拓哉

拓哉「とりあえず魔術で暴走セグウェイをなんとかするか」

そう言った後、呪文をつぶやき始める。

拓哉「四大元素の一つ、風。その名は剣。その役は切断」

そうつぶやくと、まるで鎌鼬（かまいたち）のように暴走セグウェイを切り裂いた。

やはり攻撃されたとなると爆弾は爆発する。しかし、

拓哉「四大元素の一つ、水。その名は壁。その役は遮断」

そうつぶやいて爆発の殺傷力をゼロにしてしまい、自転車から降りた。

拓哉「ふぅ。ちょろいな。そういやあの二人はどうなった？」

すると7発の銃声が響いて、しばらくすると再び7発の銃声が聞こえた。

拓哉「体育倉庫の方からか？おーい、大丈夫かー？神崎ー。キンジー」

そう言いながら体育倉庫に入っていく拓哉。そこで見た光景とは……

ＨＳＳ状態のキンジと言い争っているアリアだった。

アリア「お、恩になんか着ないわよ。こんなおもちゃ、わたし1人でも何とかできた。これはホントのホントよ。」

拓哉（面白そうだしからかってみるか）

拓哉「負け惜しみか神崎。見苦しいな」

アリア「風穴ァァ！！」

からかうとアリアがブチギレた。腰のガバメントを両手に持ちトリガーを引く、が、それだけ。弾は発射されない。俺がキンジを見ると、手にはガバメントの弾倉（マガジン）があった。そこで俺はキンジに耳打ちした。

拓哉「（キンジ、こいつから逃げるために閃光弾を使わせてもらう。効果は弱めのやつを使うからすぐ切れるが十分だ。合図をしたら目を閉じて耳を塞げ）」

キンジ「（わかったよ）」

そう言いながら後ろで閃光弾のピンを抜く。そして……

拓哉「キンジ、今だ！！」

閃光弾を投げた。迸(ほとばし)る閃光。轟(とどろ)く爆発音。

拓哉「じゃあな、神崎。学校でまた会おう。行くぞキンジ」

アリアは耳が使えないがあえてそう言うとキンジと一緒に学校へ走り出した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

出会いは突然に（後書き）

次回は三人が教室で

奴隷宣言（前書き）

教室で出会ってしまう三人
寮に押しかけてくるアリア
アリアのお願いとは？

※サブタイトル変更しました

奴隷宣言

結局始業式に出られなかった俺達は、教務科（マスターズ）に朝の爆弾事件（ボムケース）の報告を済ませ、新しい教室に向かっていた。

拓哉（それにしてもキンジはヒスってたんだ？まさか本当に強猥を！？キンジって幼女愛好家（ロリコン）だったのか！？）

ヒステリア・サヴァン・シンドローム（Histeria Savant Syndrome）

キンジが『ヒステリアモード』と勝手に呼んでいるため、俺もそう呼んでいるが、簡単に言うと、この特性を持つ人が一定以上に性的に興奮すると、論理的思考力、判断力、さらに反射神経までもが飛躍的に向上してしまう。

これだけならメリットしかないように思えるが、キンジはヒスると女子に対して不思議な心理状態になってしまうというデメリットがある。

一つは、女子をなにがなんでも守りたくなってしまうこと。

困っている女子・ピンチに陥っている女子を助けるためなら、この力を使い、求められるがままに戦ってやりたくなってしまうのだ。

そしてもう一つ、耐え難い欠点がある。それは女子に対して、キザな言動をとってしまうことだ。

どうやら「子孫を残すため」という本能が働き、魅力的な男を演じてしまうということらしい。

キンジの場合は、女子に優しくするわ、誉めるわ、慰めるわ、さりげなく触るわ、後から思い出すと死にたくなるような超ジゴロキャラになってしまうようなのだ。

まあ、キンジは中学時代にヒステリアモードを知ってしまった一部の女子が、ある種の便利屋（パシリ）として利用していたそうだ。ホントに、女子ってこえーな。

そんなふうなことを考えている俺だったが、一言で俺は現実に引き戻された。

アリア「先生、あたしはアイツとアイツの間に座りたい」

そう言って、不幸なことに、同じ2年A組だったピンクのロリツインテが俺とキンジを指してきたのだ。

クラスの生徒(バカ)共は絶句した後、一斉に俺たちを見てわぁーっ！と歓声を上げやがった。

キンジは驚きすぎて椅子から転げ落ちてるし。

先生が「うふふ。じゃあまず去年の三学期に転入してきた可愛い子から自己紹介してもらっちゃいますよー！」なんていう前置きをしていたようだが、俺はＨＳＳについて考えていたため聞いていなかったのだ。

キン，拓「「な、なんでだよ……？」」

お、ようやくキンジが復活したようだ。てか、ハモったし。

すると俺たちの間に座っている身長１９０近いツンツン頭の大男が満面の笑みで席を立った。

「よ、よかったなキンジ、拓哉！なんか知らんがお前らにも春が来たみたいだぞ！先生！オレ、転入生さんと席変わりますよ！」

そういったこの男は武藤剛気(むとうごうき)。キンジが強襲(アサルト)科にいた頃はよく現場まで運んでくれていた車輌(ロジ)科の優等生だ。まあ俺も普通に運転できるため、俺が運ぶこともあったのだが。

先生「あらあら。最近の女子高生は積極的ねぇー。じゃあ武藤くん、席を代わってあげて」

先生が嬉しそうに恐ろしいことを言いやがった。

教室はとうとう拍手喝采を始めやがるし。

アリア「キンジ、これ。さっきのベルト」

いきなりキンジを呼び捨てにしつつ、何故か近時に向けてベルトを放り投げた。

「理子(りこ)分かった！分かっちゃった！――――これ、フラグばっきばきに立ってるよ！」

キンジの隣に座っていた峰(みね)理子が急に立ち上がった。

理子「キーくん、ベルトしてない！そしてそのベルトをそのツインテールさんが持ってた！これ謎でしょ！？でも理子には推理できちゃった！」

身長が神崎と同じくらい低い理子は、探偵科(インケスタ)ナンバーワンのバカ女とキンジは言っていた。俺は探偵科じゃないから知らんが。

理子は武偵高の制服をヒラヒラなフリルだらけに魔改造している。

ちなみにキーくんとは、理子が付けたあだ名であり、この女は他にもいろんな人にあだ名をつけたがるのだ。俺の場合はたっくんだし。

理子「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！その現場をたっくん

が目撃した！つまり――――」
拓哉「おっと、みなまで言うな、理子。それは違うぞ。この二人がベルトを取るような行為をしたのは神崎の部屋じゃない。体育倉庫だ！そしてそこを俺が目撃したんだ。今どきは彼女の部屋でそういう行為をするなんて古い。体育倉庫でするのが正解だ。つまりこの二人は、変態なんだ！目撃した俺が言うんだから間違いねーだろ。」
理子「たっくんすごい！理子はそこまで推理できなかったよ。そうか、二人は変態なんだね。恋愛の真っ最中だと思ってたよ。」

ここは馬鹿の吹き溜まり、武偵高。そんなことを言ったら盛り上がってしまうのだ。

「キンジがこんなかわいい子といつのまに！？」
「影の薄いやつだと思ってたのに、実は変態だったの！？」
「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏ではそんな趣味が！？」
「フケツ！」
キンジ「おい拓哉！何恐ろしいこと言いやがるんだ！」
拓哉「だってそうしたほうが面白いし、ほぼ事実じゃん、強猥魔さん？」
キンジ「あ、あれは不可抗力だ！」

ヒステリアモードになってたって事はそういう状況に陥ったってことだと思ったら、まさか本当だったとはな……

ずぎゅぎゅん！

いきなり二発の銃声が響いた。どうせ神崎だろ……

アリア「あ、あたしは変態にゃんかじゃない！」

あ、噛んだ。

アリア「全員覚えておきなさい！そういう馬鹿なこと言う奴には――――風穴あけるわよ！」

拓哉「（あんまり調子乗らねーほうがいいぞ？なあ神崎・Ｈ・アリア？やりすぎてＨの名を汚すなよ？）」

アリア「（あ、あんた気づいてたのね！？）」

拓哉「（気づくも何も、俺の祖先もイギリスのとある偉人だし。ちなみに俺は五代目）」

アリア「（あんたもイギリスの偉人の子孫？だれよ？）」

拓哉「（自分で考えるんだな？なぁ、ホームズ四世さん？）」

アリア「（あたし、あんたのフルネーム知らないし。せめてミドルネームくらい教えなさいよ！）」

拓哉「（俺のフルネームは、土屋・Ｃ・拓哉だ！覚えておきな！）」

昼休みになると質問攻めの憂き目にあった俺たちだが、俺は軽くあしらって理科棟の屋上へ避難した。

俺は初代が極悪人として逃げ回っていたため逃げる手段も突出している一族である。そのため、逃げるのも得意なのだ。

少しすると、キンジもようやく撒いたようだ。

キンジ「おまっ、なんでそんなに逃げるのが上手いんだよ」

拓哉「俺の一族は、魔術、戦闘能力、そして逃亡術。この三つが突出してるからな」

キンジ「お前の一族チートすぎるだろ」

拓哉「お前にだけは言われたくねーよ」

話していると、強襲科の女子共が喋りながらやってきた。

俺たちはこっそりと物陰に隠れた。

「さっき教務科から出てた周知メールさ、二年生の男子二人が自転車を爆破されたってやつ。あれ、キンジと拓哉じゃない？」

「あ。あたしもそれ思った。二人とも始業式にいなかったし。」

「うわっ。今日の二人ってば不幸。チャリ爆破されて、しかもアリア？」

金網の脇に座った女子三人は、俺たちのことを話題にしているようだ。

「さっきのキンジ、ちょっとカワイソーだったねー」

「だったねー。親友の拓哉にまでからかわれてたし。しかもアリア、二人のこと探ってたみたいだよ。」

「あー。あたしも聞かれたよ。キンジと拓哉ってどんな武偵なのとか、実績とか。キンジのことは『昔は強襲科ですごかったんだけどねー』って答えたし、拓哉のことは『アリアといい勝負らしいよー』って両方とも適当に答えといたけど」

「アリア、さっき教務科の前にいたよ。きっと二人の資料あさってるんだろうねー」

「うわー、二人ともすごい不幸だねー。幻想をぶち殺す右腕でも付いてるんじゃない？」

もちろんそんなものはついていない。そんなものついていたら、魔術が使えないだろう。

「キンジがカワイソー。女嫌いなのに、よりによってアリアだもん

ねー。アリアってさー、ヨーロッパ育ちかなんだか知らないけどさー、空気読めてないよねー」
「でもでも、アリアって男子の間じゃ人気あるみたいだよ？」
「あーそうそう。三学期に転校してきてすぐファンクラブとかできたんだって。写真部が盗撮した体育の写真とか、高値で取引されてるんだって」
「それ知ってる。フィギュアスケートとかチアリーディングの授業とかのポラ写真なんて万単位なんだってさ。あと新体操とか」

なんだそのふざけた授業。ホントに大丈夫かこの高校。
まあ面白そうだし気配消して近づいて話に混ざるか。

「ってうかアリアってさ、トモダチ居ないよね。しょっちゅう休んでるし」
拓哉「へぇーそれで？」
「お昼も一人で食べてたよ。教室の隅っこでぽつーんって」
拓哉「なんかキモッ！」
「「「うわっ！拓哉、なんでここにいるの！？」」」
拓哉「いや、気配消して近づいてみた」
「すごい、気配消せるんだ」
拓哉「それよりアリアの詳しい情報ってさっきので全部？」
「う、うん。そうだけど……」
拓哉「そうか。ありがとう。それじゃあ」ニコッ
（（（か、カッコイイ……））））

どうやら三人は、拓哉に惚れたようだ。

キンジ「（お前いきなりあいつらに近づいて、なんなんだよ。一時あいつら気づいてなかったぞ？）」
拓哉「（いや、気配消して近づいて、情報を聞き出しただけだがな

んか問題あるか？）」
キンジ「（問題はないが……）」
拓哉「（それならいいじゃねえか）」

そうして俺らは屋上を後にした。

武偵高から一般校への生徒の転出には、時期的な制約がある。
これは生徒が持つ武装を一括して公安委員に登録するように武偵法で定められているからで、更新器の４月にでないと、学校を辞められない規則になっているのだ。
さらに転出希望の生徒は申請を転出の一年前から六ヶ月前までの間に教務科に提出しておかねばならない。――――キンジは既にこの書類を作っていて、近いうちに提出し、来年には武偵をやめるそうだ。

――――夕方、俺はキンジの部屋に来ていた。なぜなら、俺の部屋にゴキブリが出て、キレた俺が魔術で部屋を爆破したためである。今日はここに泊めてもらうつもりだ。しかし部屋の鍵を共有する戦妹（ミカ）がいれば勝手に入って驚くかもしれない。幸い、俺にはまだ戦妹（ア）がいないため、部屋に入ってわービックリなんてことにはならない。

しばらくすると、ピンポーンとチャイムがなった。
キンジは考えごとをしているようで気付かない。家主ではない俺が勝手に出ることもできない。

ピンポンピンポーン。

うるせぇな。出ないからさっさと帰れよ。

ピポピポピポピポピピピピピピピピピピピピンポーン！ピポピポピンポーン！

ようやく気付いたようで、キンジがうるさそうに顔をしかめながらのそのそと玄関へ向かう。どうせなら居留守使えばいいのに。朝のことを考えると多分神崎だろ。

キンジ「誰だよ……？」

渋々ドアを開けるキンジ。すると――――

アリア「おそい！あたしがチャイムを押したら5秒以内に来ること。」

予想通り、神崎だった。

キンジ「か、神崎！？」

キンジは予想できてなかったのかよ。

拓哉「よー。どうせ来ると思ってたぜー、神崎さんよぉー」
アリア「二人ともアリアでいいわよ。ていうか拓哉は予想できてたのね？」
拓哉「朝の流れ的に来ると思ってたんだよ」
キンジ「お前アリアが来るってわかってたのかよ。なら教えろよ」
拓哉「黙ってたほうが面白そうだった」
キンジ「面白そうだったからって……待て！勝手に入るなっ！」
アリア「トランクを中に運んどきなさい！ねぇ、トイレはどこ？」

無視かよ……
俺は一応尾行を気にしてたが、キンジは尾けられてたのかよ。
キンジ「てかトランクって……」
どうせ泊まる気なんだろ？
アリア「あんたたち、ここって二人部屋？」
キンジ「いや、こいつが自分の部屋をまじゅ――――ムグッ！」
拓哉「（おいまて、その話はまずい）」
慌ててキンジの口を塞ぐ俺。
キンジ「（そうだった。悪い）」
アリア「まじゅってなによ？」
拓哉「いや、なんでもない。ただ俺がちょっとしたことで部屋が使えないだけ。まあ一人部屋だったからよかったが」
アリア「なによ、あやしいわね。まあいいわ」
なにがいいのかしらんが。どうせパートナー申請だろう。代々H家には優秀なパートナーがついてるからな。
すると……
アリア「キンジ、拓哉。あんたたち、あたしのドレイになりなさい！」
アリアの言動は俺の予想を遥かに超えていた。コイツ、ありえんだろ。
アリア「ほら！さっさと飲み物くらい出しなさい！無礼なヤツらね

！」

どっちが無礼だ。本当にこいつはＨ家の人間か？

アリア「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！一分以内！」

エスプレッソ以降は聞き慣れない。

拓哉「テメェそれでもＨ家の人間か？Ｈ家が聞いて呆れるぜ。朝言ったとおり、せいぜいＨ家の名を汚さねーように言動をもっと選ぶようにしな」

アリア「グッ……うるさいうるさい！なによあんた！あたしのこと何も知らないくせに！」

キンジ「なぁ、Ｈ家ってなんのことを言ってるんだ？」

拓哉「そのうち知ることになるさ」

アリア「ところであんたのミドルネームのＣって結局なんなのよ！？全然わかんないわよ！」

拓哉「そのうち教えるさ。キンジはもう知ってるぞ」

キンジ「ああ。最初は俺も驚いたがな」

そう言ってキンジはインスタントコーヒーを差し出した。するとアリアは……

アリア「？」

カップを鼻に近づけてふんふんやった。

アリア「これホントにコーヒー？」

まあ普通そう思うだろうな。イギリスにはインスタントないし、しかもリアル貴族だし。最初は俺も知らなかったしな。

キンジ「それしかないんだから有難く飲めよ」
アリア「ずず……変な味。ギリシャコーヒーにちょっと似てる……んーでも違う」
キンジ「そんなことはどうでもいい。それよりだ」

俺は帰りに買った缶コーヒー（ブラック）をすすりながら聞く。キンジも俺がおごったブラックコーヒーを飲みながら話す。

キンジ「今朝助けてくれたことは感謝する。それに……お前を怒らせるようなことを行ったのも謝る。でもだからって、なんで押しかけてくるんだよ」

もう気づいている俺はニヤリと笑みを浮かべながら聴く。アリアは赤紫色（カメリア）の瞳をこっちに向けながら……

アリア「わかんないの？」
キンジ「分かるかよ」
拓哉「俺はもう気づいてるぞ」
キンジ「はぁ？」
アリア「まあいいわ、そのうちわかるでしょ」

うんうん。確かにそのうちわかるだろ。

アリア「お腹すいた。なんかないの？」
キンジ「ねーよ」
アリア「ないわけないでしょ。普段何食べてんのよ」
キンジ「普段は下のコンビニで買ってる」

拓哉「不健康だぞ、キンジ」
アリア「こんびに？ああ、あの小さいスーパーのことね。じゃあ行きましょう？」
キンジ「じゃあって何でじゃあなんだよ」
アリア「あんた馬鹿？食べ物を買いに行くのよ。もう夕食の時間でしょ」

だめだ。会話が成り立ってねぇ。

アリア「ねえ、そこって松本屋の『ももまん』売ってる？あたし、食べたいな」

武偵が気を付けなければならないものが三つある。闇。毒。そして女だ。
その三つ目ことアリアはコンビニでももまんをなんと七つも買った。馬鹿かコイツ？
ももまんとは桃の形をしたただのあんまんである。しかもほぼ買い占め状態。まさか全部食うつもりかと思ったら、すでに五つ目まで平らげている。お前は暴食シスターさんか？
キンジはいつも買っているらしいハンバーグ弁当。俺は惣菜パンを三つほど食べながらこの馬鹿貴族に「はよ帰れや」と目で伝える。だがアリアは、オレらの視線に全く気付かず、六つ目の桃まんを食べてうっとりしていた。そんなにうまかったか、それ？

拓哉「そういやなんでドレイなんだよ。」
キンジ「そう、それだ。どういう意味だ」
アリア「強襲科であたしと組みなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

拓哉「馬鹿かお前？キンジは強襲科がいやで、一番まともな探偵科に転科したんだぞ」
キンジ「そうだ！俺はもう武偵なんてやめるんだよ。それをよりにもよってあんなトチ狂ったところに戻るなんて――――ムリだ」
アリア「あたしは嫌いな言葉が三つあるわ」
キン，拓「「人の話を聞けよ」」
アリア「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。この三つは人間のもつ無限の可能性を自ら押し留める良くない言葉。あたしの前では二度と使わないこと。いいわね？」
キン，拓「「だから人の話を聞けよ」」
アリア「あんたたちのポジションは――――そうね、あたしと一緒にフロントがいいわ。」

フロントとは俗に言う前衛のことだ。負傷率ダントツの危険なポジションである。

キンジ「よくない。なんでおれなんだ。拓哉ならわかるけど」
アリア「太陽は――――　拓哉「太陽はなぜ登る？月はなぜ輝く？とか言い出すんだろ？小娘」　なっ、なによ！」
拓哉「お前の考えることくらいお見通しだ。武偵なら自分で情報を集めて推理しろとか言うんだろ？ク・ソ・ガ・キ？」
アリア「あたしは小娘でもクソガキでもなーーーーーい！！！」
キンジ「とにかく帰ってくれ」
アリア「まあ、そのうちね」
キンジ「そのうちっていつだよ」
アリア「あんたたちが強襲科でパーティに入るって言うまで」
拓哉「もう夜だが？」
アリア「なにがなんでも入ってもらうわ。私には時間がないの。うんと言わないなら――――」
キンジ「言わねーよ。ならどうするつもりだ？やってみろよ」

アリア「言わないなら、泊まってくから」
キンジ「ちょっ……何言ってんだ！絶対ダメだ！帰れ」
アリア「うるさい！泊まってくったら泊まってくから！長期戦になるのも想定済みよ！」
キンジ「――――出――――　アリア「――――出てけ！」　はぁ！？なんで俺たちが出てかなきゃなんねーんだよ！ここはお前の部屋か！」
アリア「わからず屋たちにはオシオキ！外で頭冷やしてきなさい！しばらく戻ってくるな」

　なんか知らんが追い出されてしまった俺たちだった。

To Be Continued

クロウリーとホームズ（前書き）

寮から追い出されてしまったキンジと拓哉
拓哉は気配を消して寮に戻って行くが……

クロウリーとホームズ

さっき追い出された俺とキンジだったが、俺は気配を消し、部屋の中に入った。

アリア「全く、なんでキンジは分かってくれないの？あたしには時間がないってのに」

そこで俺は声をかけた。

拓哉「時間がないってのは、イ・ウーのことか？」

アリア「うん、そう。――――って拓哉！？いつからそこに居たのよ！？」

拓哉「いや、俺たちが出てってすぐ気配消して入ってきた」

アリア「気配消せるんだ……じゃなくて！出てけって言ったじゃない！」

拓哉「それは今はどうでもいい。イ・ウーにお前の母さんが濡れ衣を着せられているんだろう？」

アリア「そうよ。あたしはママをスケープゴートにしたイ・ウーを全員捕まえるのよ。わるい？」

拓哉「わるいことは言わない。パートナーを見つけてからにしておけ。じゃないとイ・ウーの下っ端のリュパン四世にも勝てないだろう」

アリア「リュパン四世！？イ・ウーにいるの？しかも勝てないって……」

拓哉「ああ、勝てない。お前はホームズの欠陥品と言われているだろう？」

アリア「そ、そうよ」

拓哉「お前はホームズ家にあるべき推理力が受け継がれていなかっ

た。そうだろう？」
アリア「そうよ。そのせいで実家には居場所がなかった」
拓哉「なら近いうちにパートナーを探しておけ。パートナーがいればお前の高い戦闘力を最大限に引き出せるはずだ」
アリア「わかったわ。だいたいそこまで知ってるって、あんた何者？」
拓哉「いいだろう。俺の本名を教えてやる。俺の名は土屋・拓哉・クロウリー五世。世紀の大魔術師アレイスター・クロウリー五世だ」
アリア「あんた、アレイスターは大罪人。一族は全員殺されたはずじゃないの……？」
拓哉「俺の曾々祖父さん、初代クロウリーは大魔術師。殺された人間は全員魔術による幻影だ。それに一族は逃亡術も特化している。それで逃げられない訳がないだろう」
アリア「あんたの一族はホントにすごいわね。あんたも魔術を？」
拓哉「ああ、使える。しかも全世界に散らばる魔道書を全て記憶してる」
アリア「なんでもアリね」
拓哉「兎に角、そういうことだ。あとお前はここに泊まって、戦妹（アミカ）の間宮あかりは大丈夫なのか？あいつ、お前にべったりだろう？」
アリア「なんでも知ってるのね。だいじょうぶよ。外泊するとは言っておいたし」
拓哉「そうか。そろそろキンジが俺がいないことに気づく頃だろう。キンジのところに行ってくるわ」
アリア「わかった」

そう言って、俺はキンジのいるコンビニへ向かった。

拓哉「おーい、キンジー」
キンジ「お前どこにいたんだよ？」
拓哉「気配消してお前がどんな反応するか見てた」

キンジ「おいおい。ま、そろそろ戻ろうぜ」
拓哉「おう」

自宅なのにそーっと扉を開けるキンジ。
アリアの気配がしない。おそらく風呂だろう。

ちゃぽん。

予想通り、風呂からそんな音がした。キンジはそうとう慌てている。
パニクるキンジ。ニヤニヤする俺。そこでキンジに追い打ちをかけてきたのは――――

……ピン、ポーン……

そんなチャイムの音。この気配は白雪だ。バカキンジは慌てて飛び出し壁にぶつかってしまった。
星伽(ほとぎ)白雪。キンジの幼馴染のとある神社の巫女さんだ。詳しいことは俺は知らんが、キンジはいろいろと知っているようだ。武装巫女だそうだ。

白雪「キ……キンちゃんどうしたの？大丈夫？」

キンちゃんというのはキンジのあだ名。キンジはこのあだ名を嫌っているようだが。

キンジ「あ、ああ。大丈夫」

そう言って、玄関のドアを開けた。

拓哉「なんだよ白雪。そんなカッコで」
白雪「あれ？拓哉くんもいたんだ。私、授業で遅くなっちゃって。キンちゃんにお夕飯をすぐ作って届けたかったから、着替えないできちゃったんだけど……い、イヤだったらすぐ着替えてくるよ」
キンジ「いや、別にいいから」

こんな通い妻がいるキンジが羨ましいぜ……

白雪「ねえ、二人とも。今朝出てた周知メールの自転車爆破事件って……あれ、もしかしてキンちゃんたちのこと……？」
キンジ「ああ、俺たちだ」
白雪「だ、大丈夫！？ケガは！？手当させて！」
キンジ「俺たち両方無事だから。大丈夫だ！！」
白雪「でもよかったぁ、無事で。それにしても許せない、キンちゃんを狙うなんて！絶対犯人を八つ裂きにしてコンクリ……じゃなくて、逮捕するよ！」

あれ？空耳？何かお淑やかなはずの白雪の口から八つ裂きとかコンクリとか聞こえてきたんだが？それにしても愛されてるなー、キンジ。

キンジ「い、いいから。武偵高ではドンパチなんていつものことだ。この話は終了！」
白雪「えっと……はい。」

どこぞのロリツインテと違ってこの従順さ。キンジが羨ましいぜ。ちょっとヤンデレっぽいがこの際気にしない。

白雪「……でも……今日のキンちゃん、ちょっと変だよ？」

キンジ「ど、どのへんが？」
白雪「ちょっと、いつもより冷たいような……」
さすがいつもキンジを見ている白雪。些細な変化も見逃さないねぇ。
キンジ「き、気のせいだ！それより用事！用事はなんだよ！」
そこまで動揺したらバレるぞ、キンジ……
白雪「あ、あのね、これ。タケノコご飯、お夕飯に作ったの。今、旬だし、二人で食べて？それに私、明日から今度は恐山（おそれざん）に合宿で、キンちゃんのご飯、しばらく作ってあげられないから……」
キンジ「あ、ああ。ありがとありがと。用事は住んだ。さあ、帰ろう。な？」
あんま同様すんなよ。ホントにバレるぞ？まあ白雪のことだし、キンジのこと考えてるんだろうけど。
白雪とキンジの夫婦漫才的なやりとりを見て、そう思う俺だったが……
ちゃぽあ――――
風呂場から音が鳴る。
これはもうチェックメイトだろう……ｏｒｚ
白雪「？　拓哉くん以外に中に誰かいるの？」
キンジ「だ、誰もいませんよ！」
拓哉（ああ、なんでそこで敬語になるんだよ！もう終わりだな、キンジ……さようなら。君のことは十秒くらいの間は忘れないよ……）

白雪「……キンちゃん。私に、何か隠していることない？」
拓哉（終わったな……）
白雪は目から光を失っている。白雪の無表情こえーよ。
キンジ「ない！ないない！隠し事なんてありあ、じゃない、ありえねーから！」
白雪「……そう。よかった」
やっと白雪が帰ってくれた。とにかく俺はリビングに行っとくか。
キンジは何か洗面所に向かっている。洗面所は死亡フラグだろ……ま、知らね……
アリア「死ね！！」
洗面所からそんな叫び声が。
アリア「ホントに死ね！！このド変態！！」
キンジは本当に馬鹿だ。

深夜、アリアが寝静まってしまったが、キンジは眠れないようだ。
なんかアリア、縄張り作ってやがる。対人地雷まで見えるがそれは幻想だろう。上条さん、俺の目の前の幻想をぶち殺してください。
拓哉「（っと、そろそろ禁書目録（インデックス）の黄金錬成（アルスーマグナ）実現をしてみるか。こいつは戦闘の切り札として使えるし。白兵戦なら魔女狩り（イノケンティウス）の王も使えるんだがな……黄金錬成は、今日合わせて二日はかかるか？早め

に実現させるか）」
キンジ「（なんだ、拓哉？何かするのか？）」
拓哉「（新しく魔術を作ってみようと思ってね。幻想をぶち殺す右手を持つ少年が主人公のアニメに出てくる魔術の中で実現可能な魔術がありそうなんだよ）」
キンジ「（おいおい、アニメの魔術を実現って、なんでもありだな。しかも禁書目録だろ？何にするんだ？イノケンティウス？）」
拓哉「（イノケンティウスはもう使える。ルーンさえ刻めば、だがね。俺が実現させるのは黄金錬成だ）」
キンジ「（イノケンティウスはもう使えるのかよ！しかも思ったことを現実にする力って、チートすぎるだろ！）」
拓哉「（完成には今日あわせて二日はかかる。明後日には使えそうだ）」
キンジ「（完成したら俺にも見せろよ）」
拓哉「（おう）」

そう言うと俺は、魔道書の知識、魔術の知識を総動員して、黄金錬成の作成に取り掛かった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

神崎・H・アリア

アリア「バカキンジ！ほら起きる！」

がすっ！　と近時の腹にハンマーパンチを入れるアリア。続いて……

ぐしゃっ！キンジの顔を踏み付ける。おいおいなんだこれは？何かのプレイか？

キンジ「はにふんだこの（なにすんだこの）！」

アリア「朝ごはん！出しなさいよ！」

キンジ「し……る……か！」

拓哉「お前ら、なんだそれは？何かのプレイか？やっぱりお前らは変態――――」

アリ，キン「「変態じゃない！！」」

拓哉「うっせーんだよ。なら朝からハードなＳＭプレイしてんじゃねーよ！」

アリア「と、とにかく！お腹すくじゃない！」

キンジ「すかせこのバカ！」

アリア「バカ――――ですって！？キンジの分際で！」

拓哉「いい加減にしねーと、教室にある教卓んとこでお前らが朝からハードなＳＭプレイをするほどの仲であるうえにキンジはドＭのド変態だって公言するぞゴラ！」

キンジ「それだけはやめてくれ。　っと、アリアっ」

アリア「なによ」

キンジ「登校時間をずらすぞ。お前、先に出ろ」

アリア「なんで？」

拓哉「お前、この部屋からキンジと並んで登校してみろ。昨日の変態って話がリアルに出回ることになるぞ。ここは男子寮なんだから」

アリア「上手いこと言って逃げるつもりね！」
キンジ「俺たちは同じクラスで隣の席だ！逃げることなんてできないだろうが！」
アリアがむぅううとむくれる。俺は幼女愛好家（ロリコン）じゃないのでなんとも思わない。
キンジ「むくれてもダメだ。別々に部屋を出るぞっ」
アリア「やだっ！キンジと拓哉はあたしのドレイだ！」
そういってキンジの腕と俺の腕にしがみつくアリア。
キン，拓「「は……な……せ！この！」」
アリア「がう！」
キンジの手に噛み付き、両手で俺の腕をつかむ。
キンジ「いだだだだだだだ！」
こいつは仔ライオンか！
腕時計を見ると7時54分。
おいおい、58分のバスに遅れる。
俺らはしょうがなくズルズルとアリアを引きずりながら登校する。
キンジ「この……疫病神……め！」
そんなキンジのつぶやきだけが、朝の澄み渡る空に響きわたった。

５時間目の専門教科、キンジは猫探しの任務（クエスト）をしているそうだ。
俺は適当に強襲科（アサルト）の授業を受けている。
どうやらアリアはキンジを尾けているようだ。
すると、とある女子の後輩が話しかけてくる。

「あの、土屋先輩」
拓哉「ん？なに？」
「朝、遠山先輩と、アリア先輩と一緒に登校してきましたよね？」

げっ、そのことか……

拓哉「ああ。そうだが、それがどうした？」
「アリア先輩って、どっちと付き合ってるんですか？」
拓哉「あれは、キンジとアリアがイケナイ遊びをしているだけで、俺はただの目撃者だ。今日もドギツイＳＭプレイをしてたし」
「えっ？それは本当ですか！？」
拓哉「冗談だ。どちらとも付き合ってねーよ。ただ俺らにパーティに入って欲しいって頼まれただけだ」
「そ、そうですか。びっくりしたじゃないですか！」
拓哉「はっはっは、スマンスマン。それよりトレーニングは大丈夫か？」
「あ、そうですね。そろそろ戻ります。ありがとうございました」

そういって、アリアとは違って礼儀正しくペコリとお辞儀をして、大事だからもっかい言うが、『アリアとは違って』礼儀正しくペコリとお辞儀をして、トレーニングに戻っていった。

拓哉（それよりもキンジは大丈夫か？アリアに尾けられるとか、不幸すぎんだろ）

そんなことを考えていると、アリアの戦妹(アミカ)、間宮あかりが近づいてきた。

あかり「土屋先輩！」
拓哉「なんだ？あれ？お前はアリアの戦妹の間宮あかりじゃねーか？」
あかり「そうです！あなたはアリア先輩とどういう関係ですか！？」
拓哉「アリア？あいつは俺に、パーティに入って欲しいと頼んでくるだけだが？」
あかり「そうですか。それならいいんです」
拓哉「そろそろトレーニングに戻れよ」
あかり「い、言われなくても戻りますよ！」

といって戻っていった。

そして夜――――

拓哉「（よっしゃ、黄金錬成(アルス＝マグナ)完成したぜ！キンジキンジ）」
キンジ「（ん、なんだ？黄金錬成が完成したか？）」
拓哉「（多分、な。試してみるぞ。『銃をこの手に』）」

そうつぶやくと、本当にその手に銃が出現した。

キンジ「（おお、すごいな。でも想像したことを現実にするんじゃないのか？いちいちつぶやかなくてもいいんじゃ？）」
拓哉「（どうやら完璧じゃないみたいなんだ。完璧なものは出来ないみたい。言葉のままに現実を歪める力になっちまったよ。まぁポンポン発現したらだめだし、設定はしておいた）」
キンジ「（そうか。でもこれで任務も楽になるんじゃねーか？）」
拓哉「（いや、これは切り札としてとっておくようにする。普段は

できるだけ普通の魔術とか武装とかを使うようにするさ）」
キンジ「（そうか。それじゃ、寝るか）」

こうしてまた、夜が明けていく……

次の日――――

どうやらキンジは、理子にアリアの情報収集を頼んでいたようだ。
さっき理子が温室へ向かうのが見えたのだ。

理子は馬鹿らしいのだが、俺は理子の逸話を知っている。ネット中毒の上、ノゾキ・盗聴盗撮・ハッキングなど、武偵向きの趣味を持っている理子は、情報収集が並外れて上手いのだ。俺も何度か情報収集を依頼したことがある。言うなれば、現代情報社会の怪盗である。武偵ランクはAだそうだ。

今は放課後、キンジの部屋に戻ってきた。部屋に入るとアリアがいた。

アリア「あら？拓哉。あんた先に戻ってたのね。キンジは？」
拓哉「知らん。そのうち戻ってくるだろ」

アリアがどうやって部屋に入ったかは知らんが、どうせ聞いたら武偵だからとか言うと予想できるためあえて聞かない。

俺は、寝室に閉じこもり、魔術の開発を始めた。今度はオリジナルの雷撃魔術にしようかな。
そんなことを考え、三割ほど完成したところで、キンジが戻って

きたためリビングへ戻る。

アリア「遅い」
キンジ「どうやって入ったんだよ」
アリア「あたしは武偵よ」

予想通りだった。

アリア「それともあんたはレディーを玄関先で待ちぼうけさせるつもりだったの？許せないわ」
キン，拓「「逆ギレするような奴はレディーとは呼ばないぞ、でぼちん」」
アリア「でぼちん？」
キンジ「額のでかい女のことだ」
アリア「――――あたしのおでこの魅力がわからないなんて！あんたたち本格的に人類失格ね」
拓哉「そう言われても俺はキンジと違ってロリコンじゃないからな」
キンジ「ちょっ、俺だってロリコンじゃねーよ」
アリア「あたしはロリじゃなーい！！！だいたいこの額はあたしのチャームポイントなのよ。イタリアでは女の子向けのヘアカタログ誌に載ったことだってあるんだから」

知るか。それにしてもイタリアか。バチカンの聖（セント）ピエトロ大聖堂に行ったことはあるんだがな。

そんなことは知る由（よし）もなく、ふんふん♪と鼻歌交じりに鏡をのぞき込んで額を見るアリア。そこでキンジは不機嫌そうにこう言った。

キンジ「さすが貴族様。身だしなみにもお気を遣われていらっしゃるわけだ」

そのまま続けるキンジ。

キンジ「今までひとりも犯罪者を逃がしたことがないんだってな」
アリア「あたしのこと調べたのね。武偵らしくなってきたじゃない。でもこの間一人逃がしたわ生まれて初めてね」
キンジ「へぇ。凄いヤツもいたもんだ。誰だ？」

そこで俺は言ってやる。

拓哉「おまえだろ、キンジ」
アリア「そうよ」

キンジはぶっ！とうがいの水を盛大に吹き出した。きたねぇな。

キンジ「お、俺は犯罪者じゃないぞ！なんでカウントされてんだよ！」
拓哉「おっと、どの口が言っているんだい？強猥魔さん？」
アリア「そうよ！あんなケダモノみたいな真似しといて、しらばっくれるつもり！？このウジ虫！」

アリアの中でキンジの評価下落はとどまるところを知らないようだ。ドレイ→ケダモノ→ウジ虫だしね。

キンジ「だからあれは不可抗力だ！それにそこまでのことはしてねぇ！」

それまでのことはしてねぇってことは何かはしたってことじゃねーか。バカかあいつは？

アリア「うるさいうるさい！――――――兎に角！」

俺らをびしっと指さした。

アリア「あんたらなら、あたしのドレイにできるかもしれないの！キンジは強襲科（アサルト）に戻って、あの時の実力をもう一度見せてみなさい！」

キンジ「あれは偶然上手く逃げられただけだ。俺はEランクの大したことない男なんだよ。Sランクの拓哉とは違うんだ。はい残念でした。出ていってくれ」

アリア「嘘よ！あんた入学試験の成績Sランクだった！」

やっぱそうくるよな。

アリア「つまり偶然なんかじゃなかったってことよ！あたしの直感に狂いはないわ！」

キンジ「と、とにかく……今は無理だ！出てけ！」

今はって、墓穴掘ったなキンジ。

アリア「今はってことは何か条件でもあるの？言ってみなさいよ。協力してあげるから」

と、アリアは超ド級の爆弾発言を落としやがった。

そう、ヒステリアモードの発言に協力する＝キンジを性的に興奮させることに協力するということなのだから。

アリア「何でもしてあげるから！教えなさいよ、キンジ！」

キンジ「一回だけだぞ」

アリア「一回だけ？」

ああ、そういうことか。

キンジ「戻ってやるよ――――強襲科(アサルト)に。ただし、組むのは一回だけだ。戻って最初の事件を、一件だけ、お前と拓哉と一緒に解決してやる。それが条件だ。つまり転科じゃない。自由履修で強襲科の授業を取る。それでもいいだろう」

おそらくＨＳＳを使わずに解決して、アリアを幻滅させようという魂胆だろう。

アリア「いいわ。じゃあ、この部屋から出てってあげる。あたしにも時間がないし。その一件であんたらを見極める」
キンジ「どんな小さな事件でも、一件だぞ」
アリア「ＯＫよ。その代わりどんな大きな事件でも一件よ」
キンジ「わかった」
拓哉「ああ」
アリア「手を抜いたら風穴よ」
拓哉「俺が手を抜くわけないだろう」
キンジ「ああ、約束する。全力でやってやる」

通常モードで、だろ？

その夜――――

拓哉「ようやくアリアもいなくなったし普通に話せるぜ。キンジ、今度は普通にオリジナルの雷撃魔術が完成したぞ」
キンジ「オリジナルか？見てみたいな」
拓哉「いいぞ『偉大なる戦いの神、オーディーンよ。その武器、グングニルの力を借りて、今ここに、雷撃を放たん！！』」

そう言うと手から雷撃の槍が射出される。辺りに眩(まばゆ)い閃光と雷撃音が轟く。日本海側へ向けて撃ったため、しばらくすると拡散してしまった。

拓哉「ふん、射程距離は１００メートルってとこか？」
キンジ「すごいな！あれなら実践で使えるだろ」
拓哉「あれは結構本気で撃ったな。本気でかなりの威力が出てたし、威力を抑える練習をすれば実戦投入も可能だな」
キンジ「そうか。また練習すればいいな。じゃ、寝るか」

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

神崎・H・アリア（後書き）

キンジ、強襲科（アサルト）への帰還

強襲科

やっとこの日が来た。キンジが強襲科（アサルト）に戻ってくる日が。
久しぶりに会うキンジを見て……

「キンジ！？」「キンジだ！」「やっと戻ってきやがった！」

口々にみんながそう言っている。そして……

「おーうキンジぃ！お前は絶対帰ってくると信じてたぞ！さあここで一秒でも早く死んでくれ！」
キンジ「お前まだ死んでなかったか。お前こそ俺よりコンマ一秒でも早く死ね」
「キンジぃー！やっと死にに帰ってきたか！お前みたいなマヌケならすぐ死ねるぞ！武偵ってのはマヌケから死んでくもんだからな」
キンジ「じゃあなんでお前が生き残ってるんだよ」

郷に入りては郷に従え。死ね死ね言うのがここの挨拶だ。とにかく……

拓哉「おかえり、キンジ。さっさと死ね！」
キンジ「お前こそな」

俺たちは馬鹿どもを適当にいなして強襲科から出ると、やはりアリアが待っていた。

アリア「あんたって人気者なんだね。ビックリしたよ」

キンジに言うアリア。まぁ俺から見てもそう思うが。

キンジ「あんな奴らに好かれたくない」

まぁ普通そうだよな、あんな死ね死ね集団。

アリア「拓哉は普通なんだけどさ、キンジは人付き合い悪いし、ネクラ？って感じがするけど、ここのみんなは、一目置いてる感じがするんだよね」

実際に一目置かれているのだが……どうせ入試のことだろう。

アリア「あのさキンジ、拓哉」
キンジ「なんだ？」
アリア「ありがとね」
キンジ「何を今さら」

嬉しそうなアリアと、対照的に苛立ったようなキンジ。

キンジ「勘違いするなよ。俺は『仕方なく』強襲科（ここ）に戻ってきただけだ。事件を一件解決したらすぐにでも探偵科（インケスタ）に戻るぞ」
アリア「わかってるわよ。でもさ」
キンジ「なんだ？」
アリア「強襲科の中を歩いてるキンジと拓哉。みんなに囲まれててカッコよかったよ」

いきなり何を言い出しやがるんだ。まあこいつは協調性がないから人に囲まれてるのがすごいと思っているんだろう。

拓哉「とにかく、俺はゲーセンによってく。キンジはどうする？」
キンジ「あ、俺も行く。てことでお前は一人で帰れ」

アリア「ねえ、『げーせん』ってなに？」
拓哉（こいつが帰国子女のリアル貴族だってこと忘れてた……こいつ常識ないんだった……）
キンジ「ゲームセンターの略だ。そんなことも知らんのか？」
貴族がゲーセンなんて行くはずないだろう。おまけに帰国子女だぞ。
アリア「帰国子女なんだからしょうがないじゃない。んー、あたしも行く。今日は特別に遊んであげる。ご褒美よ」
拓哉「罰ゲームの間違いだろ」
とにかく撤くために、全速力で走る俺たち。
キンジ「ついてくんな！今お前の顔なんて見たくもない」
拓哉「そうだ、ついてくんな！」
アリア「あたしだってキンジのバカ面なんてみたくもないわ。」
なぜにキンジ限定なのだろうか。
キンジ「尚更付いてくるな！てかなんで俺限定？」
アリア「キンジだからよ！」
逃げる俺たち。追うアリア。結局三人ともゲーセンについてしまった。
アリア「はぁ。はぁ。はぁ。ねぇ、これ何？」
ＵＦＯキャッチャーを指さしてアリアが言う。

拓哉「これはＵＦＯキャッチャー。お金を入れてこのアームを動かして中の景品を取るゲームだ」
アリア「……」
拓哉「ん？どうした？」
アリア「か」
拓哉「か？」
アリア「カワイイ」
キンジ「取ってみるか？やり方はさっき言っただろ？」

ブンブンと超高速で首を縦に降るアリア。

うぃーん……
ポト。
何回やっても取れないアリア。

アリア「もう一回。次ならできるわ」

やはり何度やってもダメなアリア。
本気本気とわめき出したので、「どけ」と言って俺が始める。
この穴に近い奴が狙い目か？
うぃーん……
ぎゅっ。
クレーンは一体の頭を見事につかんでいる。

拓哉「ん？」

見るとぬいぐるみにぬいぐるみが絡まって、三匹釣れていた。

アリア「三匹釣れてる！あ……あ、入る、行け！」

ポト。
三匹同時に穴の中へ落ちていく。

キンジ「っしゃ！」
アリア「やった！」
拓哉「よしっ！」

パチィ。
三人で無意識のうちにハイタッチしていた。

キ，ア，拓「「「あ」」」
アリア「ふ、ふん！さすが拓哉！キンジとは大違いね」
キンジ「うるせえよ」
アリア「キンジ、拓哉」
キンジ「ん？」
拓哉「なんだ？」
アリア「はい、一匹ずつ」
拓哉「さんきゅ」
キンジ「お、おう」

このあと『最初につけた人が勝ち』的なやりとりがあったがそれはまぁどうでもいい。

今日の帰り道、キンジと一緒へ向かっていた俺だが、どうやら尾けられていたようだ。

拓哉「で、こんなとこで何してんだよ、間宮。キンジをつけてたか？」
あかり「つ、土屋先輩と、遠山キンジ……先輩」
キンジ「なぁ拓哉。こいつ誰だ？」

拓哉「間宮あかり。アリアの戦妹(アミカ)だ」
キンジ「ふーん、アリアの戦妹か。おい、風魔」
風魔「遠山師匠。なんでござるか？」
拓哉「うぉっ。風魔陽菜ねぇ。キンジの戦妹か？」
風魔「いかにも、某(それがし)は、遠山師匠の戦妹にござる」
拓哉「風魔小太郎の子孫だろ。なかなかのやつ戦妹にしたじゃねーか」
キンジ「とにかく、そんなこと今はどうでもいい。風魔、コイツの相手はお前に任せる。後で寮に来い。いくぞ、拓哉！」
拓哉「お、おう……」
風魔「御意」
あかり「ちょっ、まてー」
風魔「遠山師匠は女子がお嫌いにござる。よって某が護衛致す」

その夜――――

キンジ「風魔、すまなかったな。あそこであのめんどくさそうな奴の相手任せて」
風魔「構いませぬ。某は遠山師匠の戦妹。護衛するのは当然のことでござる」
拓哉「ところであの後どうなったんだ？」
風魔「煙玉による攪乱の後、そのまま屋根の上へと登ったでござる」
拓哉「さすがリアル忍者。チートすぎんだろ」
キンジ「リアル魔術師のお前が言えることじゃねーよ。ところで拓哉。戦妹取らないのか？」
拓哉「申請が三十件ほど来てたが全部没だ。面白そうな奴がいねえ」
キンジ「そうか。俺はそろそろ寝るよ。風魔、もう下がっていいぞ」
風魔「御意」

と言って、一瞬で消えてしまった。

拓哉「俺も寝るか……」

To Be Continued

バスジャック

なぜだ。
早めに出たはずだが？
武藤「乗れた！やった！おうキンジと拓哉！おはよう」
なぜにバスが来ている？
拓哉「武藤か。乗せろ。じゃないと殺す」
武藤「殺すとか言うなよ。大人しくチャリで来い」
キンジ「無理だ。俺らのチャリはぶっ壊れた」
武藤「なら遅刻してこい。てことでまた二時間目に会おう！」
本当にあとで殺す。

雨の中を歩いている俺とキンジ。
そこで、ケータイが鳴った。
拓哉「この着メロはキンジのだろ？」
キンジ「あ、ああ」
電話に出るキンジ。
キンジ「もしもし」
アリア『キンジ、今どこ？』

アリア？今授業中のはずだが？

キンジ「強襲科のそばだ」
アリア『拓哉も一緒？』
拓哉「おう。代わったぜ」
アリア『ちょうどいいわ。そこでC装備に武装して女子寮屋上に来なさい』

なんかヤバイ気がする。

拓哉「まさか事件か！？」
アリア『そうよ！さっさと来て！』
拓哉「おう。五秒で行く」
アリア『何言ってんの！ふざけてる暇は・・・』
拓哉「悪いが本当のことだ。じゃあな」

一方的に切ってやった。

拓哉「キンジ、今から黄金錬成でC装備に武装して女子寮屋上に行くぞ！事件だ！」
キンジ「お、おう。でも黄金錬成使っていいのか？」
拓哉「ここにはオマエしかいないから大丈夫だ。いくぞ『俺とキンジの服装を武偵装備、C装備に変更、及び女子寮屋上入り口へ移動する』」

アリア「ほ、本当に五秒で来た！アンタ何者なのよ」
拓哉「べつに、単なる魔術師だが？」

俺が辺りを見回すと、レキがいた。アリアのやつ、良い駒わかってやがる。
コイツはよく俺と組む。狙撃科（スナイプ）の麒麟児だ。
拓哉「レキ。オマエも来ていたか」
コイツはいつも無愛想の無表情である。
レキ「はい、そうです」
コイツは普段、ヘッドホンで風の音を聴いているとか。うーん、理解不能だ。
アリア「時間切れね」
アリアが俺らの方を向く。
アリア「もう一人くらいSランクがほしかったけど、出払ってるみたい」
キンジ「事件ってなんなんだよ」
アリア「バスジャックよ」
予感的中乙ｗｗｗ
おっと、キャラが崩れるところだった。
拓哉「どうせ通学バスだろ？」
アリア「そうよ。なんでわかったのよ」
拓哉「嫌な予感がしてた。恐らく武偵殺しの真犯人の仕業だ」
キンジ「真犯人？武偵殺しって捕まったんじゃ・・・」
拓哉「生憎そいつぁスケープゴートだ」

アリア「武偵殺しと同じやり方みたい。とにかく行くわよ！」

俺たちは説明を受けた。

レキはヘリ追跡、俺とキンジは車内、アリアは車体の調査だ。

あとはインカムで話すそうだ。

拓哉「とにかく行くか。俺はパラシュートいらねーから。」

アリア「ちょっと、いらないってどういうことよ！？」

拓哉「ヒャッホー！」

アリア「ちょっ、待ちなさい！」

キンジ「やめとけ。ああなったら誰も止められない」

自由落下である程度落ちたら魔術で風をコントロールして速度と位置を調節した。

アリアとキンジはパラシュートでバスの屋根に乗ったが、キンジは滑り落ちそうになる。

アリアが「本気でやりなさいよ」、とキレるが、キンジは今の状態ではコレが本気らしい。

武藤「キンジ！拓哉！」

おお、さっき俺たちを見捨てた俺のターゲットさんじゃありませんか。

拓哉「よう、武藤（ターゲット）さんよぉ」

武藤「お前武藤って書いてなんと読んだ！ターゲットって！？」

拓哉「もちろん俺たちを見捨てた最低のクズ野郎は俺の殺す対象（ターゲット）ってことだが何か問題でも？」ニコォ

武藤「スマンかった。なんで俺はこんなバスに乗っちまったんだ？」
キンジ「見捨てたバチがあたったんだろ」
武藤「た、拓哉、キンジ、あれだ。あの子」

話変えやがったな武藤（ターゲット）。

「つ、土屋先輩、遠山先輩！助けてっ！」

問題ない。武藤（ターゲット）以外は全員助けるつもりだ。

拓哉「どうした？」
キンジ「何があった？」
「け、ケータイがすり替わってて、いきなり喋り出したんです」
「ソクドヲオトスト、バクハツシヤガリマス」

やっぱこのボーカロイド、武偵殺しか。

アリア『拓哉、キンジ。状況は？』
拓哉「予想通り武偵殺しの仕業だ」
キンジ「そういうことだ。そっちはどうなんだよ」
アリア『爆弾を見つけたわ』
拓哉「武偵殺しのことだ。カジンスキーのβ型―プラスチック爆弾《Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ４》だろ？それも過剰なほどに」
アリア『よくわかったわね。その通りよ。炸薬量は３５００立法センチはあるわ』
キンジ「アリア、解体はできるか？」
アリア『やってみ――――あっ！』
拓哉「どうした！？ってあれは！？」

ＵＺＩ（ウージー）を載せたオープンカーがバスを追っている。

キンジ「みんな伏せ――――　拓哉「いやその必要はない」えっ？」
拓哉「俺がなんとかする」

ババババッ！！！無数の銃弾が放たれ、バリバリッ！！！と窓のガラスを――――割ることはなかった。
すべての銃弾は放たれた直後に下に落ちていた。

拓哉「ふん。つまらない」
キンジ「お前、何をした？」
拓哉「（魔術だから小声で話すが運動量をゼロにする魔術だ）」
キンジ「（チートすぎる）」
拓哉「おい武藤（ターゲット）」
武藤「結局ターゲットかよ。なんだ？」
拓哉「運転手が精神的にもう無理っぽい。お前が運転しろ。」
キンジ「武藤、ヘルメットだ」

キンジのヘルメットを渡す。

拓哉「兎に角アリアの様子を見に行けキンジ。こっちはなんとかする（『銃弾はその動きを止める』）」

小声で詠唱してまたもやＵＺＩの銃弾を落とす。

キンジ「わかった。アリアの方に行ってくる」
拓哉「とりあえずあのオモチャをなんとかするか」

窓を開けてベレッタでＵＺＩをすべて破壊した。

「すごい、一瞬で終わった」

「さすが拓哉」
「土屋先輩ありがとうございます」
だが俺は気づいていなかった。反対方向からもう一台オープンカーが近づいていることに。
バンッ！！
拓哉「ッ！まだ残って――――」
キンジ「アリア！アリアー！」
拓哉「キンジ！アリアがどうした！？」
またオープンカーが発砲しようとしているがキンジは気づかない。
拓哉「（やばい、魔術の有効範囲に入ってない）」
バンッ！発砲音が響く。だがそれはオープンカーからではなかった。インカムからレキの声が響く。
レキ『私は一発の銃弾』
ヘリからレキがバスを狙っているようだ。正確にはバスの後方を。
レキ『銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない。ただ、目的に向かって飛ぶだけ』
バンバンッ！オープンカーを打ち抜き、大破させた。
レキ『私は一発の銃弾』

ギンッ！爆弾がはじかれた。そして、川に落ちて――――

ドウウウウッ！！！！

爆弾が爆発し激しい水柱を上げた。

武偵病院に入院したアリア。俺は今から見舞いだから知らないが、容態はキンジが知ってるだろう。

拓哉（あのロボットレキがこんなもの持ってくるとは）

レキよりと書いたカードと、白百合（カサブランカ）が置いてあった。

アリアの病室の前、こんな言い合いが聞こえてきた。

アリア「あたしはあんたに期待してたのに。現場に連れてけば、またあの時みたいに実力を見せてくれると思ったのに」

キンジ「お前が勝手に期待したんだろ！俺にそんな実力はない！それに俺はもう、武偵なんか辞めるって決めたんだ！なんでそんなに勝手なんだよ！」

アリア「勝手にもなるわよ！あたしにはもう時間がない！」

キンジ「なんだよそれ！意味わかんねーよ！」

アリア「武偵なら自分で調べれば！？あたしに比べれば、あんたが武偵をやめる事情なんて――――」

あー、そっから先言っちゃう？言えばキンジがキレるぞ？なんたってキンジの兄貴が――――

アリア「あんたが武偵をやめる事情なんて、大したことじゃないに決まってるじゃない！」

あーあー、言っちゃったよ。キンジがキレるなこりゃ。

見ると、キンジはアリアが女であることも忘れて殴りかかろうとしていた。が、思いとどまって拳を下ろした。

アリア「なによ、なんなのよ」
キンジ「とにかく俺は武偵をやめるんだ」
アリア「……」
キンジ「聞いているのか！？」
アリア「聞いてるわよ。あたしが探してたのはあんたじゃなかったんだわ」

そのつぶやきの後、キンジは病室を後にした。

拓哉「アリア、あのセリフ、キンジの前では禁句だぞ。あいつの抱えている事情、お前と同等に重い事情を背負ってる」
アリア「なによ、聞いてたの！？あたしを責めにでも来たの！？」
拓哉「いや違う。ただアリアにそれを知っておいて欲しかっただけだ。あいつに謝っとけ。俺の話はこれだけだ」

そう言って俺もキンジの部屋へ戻っていった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

神崎かなえ

俺は今、警察署に来ている。
何故かって？それは――――

拓哉「神崎かなえさん、ですね？俺はアリアのクラスメイトの拓哉です」
かなえ「まぁ……アリアの彼氏さん？」

アリアの母さん――――神崎かなえさんに面会に来たからである（別に知り合いではない）。

拓哉「違いますよ。ただの友人です」
かなえ「まぁまぁ、あのアリアに友達ができるなんて。ところでご用権は……？」
拓哉「おっと、時間がないんでしたね。なので手短に話します。おそらくアリアはイ・ウーを潰すつもりだと思います」
かなえ「アリアが？イ・ウーに挑むのはまだ早いと思いますが？パートナーの方は？」
拓哉「一人、いい奴がいたんですが、そいつと喧嘩別れしちまってるみたいです。そして、今日、アリアはロンドンに帰りますね？」
かなえ「はい、そうですけど？」
拓哉「おそらく今日のロンドン行きの便でアリアと武偵殺し『リュパン四世』とぶつかるでしょう。ハイジャックによって」
かなえ「リュパン四世！？それが武偵殺しの正体！？それに今日って！？」
拓哉「はい、おそらくは。多分武偵殺しの狙いは最初からアリアだったのでしょう。今までの事件は全て作られたシナリオ。今日、アリアという本命を倒すためのストーリーだったのでしょう」

かなえ「それよりも、ここまで知っているって、あなたは何者なんですか？Ｈ家の人間ではないはずですが」
拓哉「俺の名前は土屋・拓哉・クロウリー五世。世紀の大魔術師、クロウリー五世です」
かなえ「クロウリー一族は死んでいなかったという噂は本当だったようですね。アリアになにかあったら守ってあげてね」
拓哉「問題ありません。俺は既に、初代クロウリーを超えた、一族最強の魔術師ですから。いざというときは、俺が一人でイ・ウーを潰します。不可能ではないですよ。おっと、もうすぐアリアがここに来るだろう。俺はここで失礼します」
かなえ「アリアには見つからないようにしたほうがいいでしょう。気を付けてください」
拓哉「はい。気配を消していきますよ」

俺は気配を消し、警察署近くに隠れている。お、キンジ発見。相変わらず下手な尾行だな。ＨＳＳにならないと戦力外通告だもんな。
俺は気配を消したまま、キンジの背後に近寄り――――
拓哉「おいキンジ。下手な尾行だな」
いきなり話しかけてやった。
キンジ「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ！？」
拓哉「大声出すとアリアにバレるぜい。まぁおそらくもうバレてるが」
キンジ「は？」
アリア「……下っ手な尾行。シッポがにょろにょろ見えてるわよ」
キンジ「おまえ気付いてたなら声かけろよ……ってあれ？拓哉？」

俺はまた気配を消して、警察署の前で隠れている。

数分後、警察署からアリアとキンジが出てきたので合流する。

キンジ「拓哉、お前どこ行ってたんだよ」
拓哉「気配消して隠れてた」
アリア「訴えてやる。あんな扱い、していいワケがない」
拓哉「アリア」
キンジ「アリア……」
アリア「泣いてないんか……ない」
拓哉「おい、アリア」
アリア「な……泣いてなんか……ない……うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

急にアリアが泣き出す。おそらくかなえさんが警察にひどい扱いを受けたのだろう。

拓哉（チィッ、あのゲス共が！）
アリア「ママぁ……ママぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

どのくらい経っただろうか。キンジはメールが来てから、ケータイを見ると、誰かに呼ばれているようで、走り去っていった。俺はアリアと二人で居る。

拓哉「おい、アリア。お前、ロンドンに帰るのか？」

アリア「なんであんたがそれを！」
拓哉「いや別に、あんなことがあれば帰るとか言い出しかねないんでな」
アリア「まぁいいわ。そう、帰るわよ。パートナーを探しにね」
拓哉「そうか、じゃあな」
アリア「うん」

そう言って分かれると、今日、武偵殺しがハイジャックするために向かうであろう空港に向かい、気配を消して隠れた。そう。武偵殺しを止めるために。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

神崎かなえ（後書き）

次はいよいよハイジャック

武偵殺し（前書き）

オルメスＶＳリュパン　それにクロウリーはどう関わっていくのか

……

※タイトル変更しました

武偵殺し

そろそろ離陸であろう時間、ハイジャックを止めるために、『魔術師』は動き出す。

拓哉「（ん？あれはキンジか？あいつも気づいたか）よーキンジ。お前も気付いちまったか？」
キンジ「ああ。お前もか？」
拓哉「おう。さっさと行くぜ」

機内に駆け込んだ俺達。

キンジ「――――武偵だ！離陸を中止しろ！」

キンジ。お前アホだろ。

拓哉「馬鹿かキンジ！こんな状況で止められるわけねーだろ。とにかくアリアのところに」
キンジ「クソッ！わかった！」

ふん、アリアめ。『空飛ぶリゾート』なんざ、贅沢しやがって。

アリア「き、キンジ！？拓哉！？」

よし、合流できたな。

拓哉「手短に話す。おそらくもうすぐこの便は、ハイジャックされる。武偵殺しによってな。そして狙いはアリア、テメェだ！」
アリア「だからなんだっていうのよ！あたし一人でなんとか――――」
拓哉「なんとかならねーから言ってるんだよ！馬鹿か！武偵殺しはイ・ウーの下っ端だが、お前よりはるかに強い！」
アリア「あたし一人で勝てないって！？」
拓哉「ああ、そうだ！パートナーもいないオルメスなんざ戦力外通告だっつーの！俺一人ならともかくお前一人じゃ無理だ」
アリア「うるさい！帰りなさい！」

「お客様に、お詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が三十分ほど遅れることが予測されます」

ふむ、乱気流か。

ガガガーン！ガガーン！と雷鳴が轟く。
アリアは目を丸くし、きゅっと縮まる。

キンジ「怖いのか、アリア」
拓哉「まさか、双剣双銃（カドラ）のアリア様が、怖いとか言うんじゃねぇだろうな？」ニヤニヤ
アリア「こ、ここ、怖いわけ――――」
拓哉「あるよなぁ。な、雷と水泳が苦手なア・リ・ア・ちゃん」ニタニタ
アリア「風穴――――キャーーーーーーーーーーーーーー！！！」

またもガガーン！！と雷鳴が轟く。

拓哉「あぁるぇぇぇ？怖くないんじゃないのかなぁ？」ニヤァ
キンジ「まぁまぁ、テレビでも見て落ち着けよ」

時代劇かよ。って、これは――――

『この桜吹雪、見覚えがねぇとは言わせねえぜ』

――――これはキンジの先祖じゃねーか。
遠山の金さん。露出癖で、肌を露出することによってヒスっていたそうだ。

パン！パァン！

ついに来たか。

？？「Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ　Ｐｌｅａｓｅ．でやがります」
拓哉「ふん、お出ましか、『武偵殺し』。いや――――」

胸のところから拳銃二丁を取り出し、ニヤァと嫌な笑みを浮かべながら、

拓哉「――――峰・理子・リュパン四世さんよぉ！」
キン，アリ「「はぁ？理子？」」
理子「ふーん、やっぱりたっくんは気づいてたんだねぇ。すごいよたっくん」バリバリ

アテンダントはマスクを取り、正体を表す。

キンジ「理子！？」
理子「Ｂｏｎ　ｓｏｉｒ（こんばんは）」

拓哉「ふん、俺に小細工が聞くとでも？」
理子「あれぇ？少しくらい引っかかってくれるかと思ったのに」
拓哉「お遊びはここまでだ、理子」
理子「いいよ、たっくん。なんでこんなことしたか、教えてあげる。私の家の人間は、みんな理子を『理子』とは呼んでくれない。お母様が付けてくれたこのかっわいい名前を。みんな呼び方がおかしいんだよ」
アリア「おかしい？」
理子「四世。四世。四世さまぁ。どいつもこいつも、使用人共まで……理子をそう呼んでたんだよ。ひっどいよねぇ」
アリア「それがどうしたってのよ……四世の何が悪いってのよ」

はぁ、この馬鹿。火に油を注ぎやがって。

理子「悪いに決まってんだろ！！あたしは数字か！？あたしはただのＤＮＡかよ！？あたしは理子だ！数字でも、五世を生むための機械でもない！どいつもこいつもよォ！」

俺たちではない誰かに語りかけるように叫ぶ理子。

理子「曾お爺さまを超えなければ、あたしは一生あたしじゃない、『リュパンの曾孫』として扱われる。だからイ・ウーに入って、この力を得た。この力で、あたしはもぎ取るんだ――――あたしを！」
拓哉「さて、そう上手くいくかねぇ。どうせテメェが計画していたと通りにことが進ん出たことくらい知ってたんだよ。だからテメェの行動パターンはだいたい読める。まぁ、アリアとキンジがくっつききらなかったのは予想外だったみてぇだがな」
理子「そうだねぇ、理子がやったお兄さんの話を出すまで動かなかったのは、意外だったね」
キンジ「……兄さんを、お前が……お前が……！？」

アリア「もういい、二人とも下がっときなさい！」
理子「アリア。自分だけが二丁拳銃なんて、思っちゃダメだよ」

至近距離での打ち合い、理子は狂ったように笑っている。
アリアの銃弾切れを起こしたと同時、バリツで理子と抱き合うような姿勢になり、銃撃が止む。

キンジ「そこまでだ、理子」
理子「奇遇よね、アリア。理子とアリアはいろんなところが似てる。家計、キュートな姿、そして『双剣双銃（カドラ）』という二つ名。でもね、アリアの『双剣双銃』は本物じゃない。お前はこの力をまだ知らない」

髪がウネウネと動き出す。ナイフに絡みつき、そのままアリアの側頭部を切りつける。

キンジ「アリア、アリア！」

キンジがアリアを抱きかかえ、俺が理子と向かい合うようになる。

拓哉「ふん、テメェはアリアたちの獲物。俺が手出しをする相手じゃねぇからな。時間稼ぎでもしてるか。まぁいざとなったらイ・ウーを潰す」

さぁて、キンジが何をしてくるか、楽しみだ。

理子「イ・ウーを潰す？たっくんが？ただのSランク武偵がなんとかできるような相手じゃないよ？」
拓哉「舐めてもらっちゃ困る。やろうと思えばテメェを口しか動かさずに殺せるぞ」

理子「ハッタリが理子に聞くと思う？」
拓哉「まあいい。そろそろキンジたちが何かしてる頃だろ。最終決戦はアリアの部屋だ。俺は見物しとくさ」

キンジ＆ａｍｐ；アリアｖｓ理子の再戦。キンジならできるさ。俺は美味しいとこだけ持っていきますよ。

数十分後……

キンジ「峰・理子・リュパン四世――――」アリア「――――殺人未遂の現行犯で逮捕するわ！」

ふぅ、やっと終わった。俺の出番だ。

理子「ぶわぁーか」

機体が揺れる。それは予想できていたため、理子を追いかける。

拓哉「俺が追うから、お前らは後で来い」

拓哉「理子、もうやめておけ。」
理子「たっくん？近付かない方がいいよ」
拓哉「うるせぇよ。理子、テメェがアリアを殺そうとした本当理由も、俺は知ってんだよ」
理子「ッ！？」
拓哉「お前がただ、自由になりたいがためにこんなことをしている

ことも知ってる。それに、理子。お前は理子だ。四世でもリュパンの曾孫でも、五世を生むための機械でもない。それは誰しもが認めているることじゃねぇか」
理子「たっ……く……ん……？」
拓哉「テメェのことは全部知っている。勿論過去のことも、ブラドのことも」
理子「たっくん……なんでそれを……？」
拓哉「あまり俺を舐めないほうがいい。俺がただのSランク武偵と思ったら大間違いだ。俺のミドルネームのC。それが何を意味するかわかるか？」
理子「たっくんのことは情報がなさすぎるから、調べられなかった」
拓哉「Cはクロウリーを意味する。俺はクロウリー五世だ」
理子「クロウリーって魔術師の？」
拓哉「そうだ。俺は一族最強の魔術師だ。いいか、理子。お前のことを四世とか読んでる奴は、一人も残さず俺がぶっ潰してやるし、ブラドも俺がぶちのめす。お前のことは、俺が守ってやるから、こんなこともうやめろ」

そう言って俺は、理子を抱きしめてやった。

理子「たっくん……うわぁぁぁぁぁあああぁぁぁああああぁぁあぁぁあぁぁ！！！」

理子も泣きながら俺にすがり寄る。俺は頭にぽんと手を置いて、キンジたちを待った。

アリア「拓哉。なんで理子が拓哉に抱きついてすがりながら泣いてるの？」

キンジ「拓哉、お前何をした？」
拓哉「俺は理子がなぜこんなことをしているのか全部知ってるし、その問題もなんとかしてやるって言った。理子は俺が守るべき対象に入ってしまったからな」
アリア「理子も守るの？」
拓哉「ああ。こいつを堕とした張本人をズタズタに引き裂いて八つ裂きにしてやらないとな」

　気付いたら、理子は泣きつかれて拓哉の腕の中で眠っていた。

キンジ「そういやアリア、さっさとコックピットに行くぞ。操縦士も副操縦士も被弾していたから俺らがなんとかしねぇと」
拓哉「はぁ、俺が黄金錬成（アルス＝マグナ）でなんとかするよ」
キンジ「お前、理子は眠っているが、アリアの前で大丈夫か？」
拓哉「確かに、敵を騙すならまず味方からというからアリアにもバレずにいたいが、これはしょうがないだろ」
アリア「ねえ、あるすまぐなってなに？」
拓哉「俺の言葉一つで現実を歪めてしまう魔術」
アリア「じゃあそれでこの便を空港に移動させるの？」
拓哉「おそらく空港はダメだ。空き地島を使う。いくぜ！『この飛行機は中身ごと空き地島に移動』」

アリア「すごい、ほんとに空き地島にいる」
拓哉「そうだな、ハイジャックはおそらく知れ渡ってるだろ。みんなのところに行くか」
キンジ「そうだな」
理子「んん……？」
拓哉「お？起きたか？理子。」

理子「た、たたた、たっくん！？なんでお姫様抱っこを！？」
拓哉「お前があのあと泣きつかれて眠ったんだろうが。ま、寝顔は可愛かったぜ、お姫様」ニカッ
理子「ッッッ！！」／／／ボンッ

一瞬で顔が真っ赤になる理子。

拓哉「兎に角、みんなのところに行かねーと心配してんぞ」
キンジ「そうだな。行くか」
理子，アリア「「おー！」」

このあとみんなのところに行って、キンジは質問攻めのもみくちゃにされていた。ん？なんでキンジだけかって？勿論俺は逃げたぜ。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

武偵殺し（後書き）

拓哉が理子を説得→理子は拓哉に惚れるというまさかの超展開ｗｗｗ

独唱曲（前書き）

ハイジャックを解決し、無事戻ってきた三人
しかしアリアはロンドンに帰るという

独唱曲

ハイジャックの後、怪我したキンジとアリアの見舞いに、キンジの部屋に来た拓哉。へ？なんで俺だけ無事なのかって？ハハッ♪もちろん俺は美味しいとこを持ってっただけで、理子と戦ってないからだ。まぁ、戦ったところで、理子如きが俺に触れることも無理だと思うがな。

拓哉「よぉ、アリア。キンジ。って、あれ？いねぇじゃねぇか」

そう思って病室を見回すと、ベランダにいた。フフフフ……気配消して脅かしてやる。

アリア「東京で――――こんなキレイな星空、見えるとは思わなかったわ」

拓哉「台風一過ってやつだな」

キンジ「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ！？拓哉！気配消して近づくなよ！」

アリア「あら？拓哉。いたの？」

俺たちは星空の下、ベランダで語り合った。

二人は警察の事情聴取がウザかったそうだが、俺は例により撒いたのでしらんが。

そこでアリアが――――

アリア「ママの……公判が、延びたわ」

拓哉「かなえさんの公判が延期ねぇ。よかったな」

アリア「うん。って拓哉？ママと知り合い？」

拓哉「（ヤベッ！？口滑った！？）い、いや、資料で読んだだけだ」

アリア「そう。今回の件で『武偵殺し』が冤罪だって証明できたから……弁護士の話では、最高裁、年単位で延期になるんだって」
キンジ「そうか」
アリア「ねぇ。あんたたち、なんで……あの飛行機に、あたしを助けに来たの？」
キンジ「……まあ、バカのお前じゃ、『武偵殺し』には勝てないと思ったからだよ」
拓哉「別に。俺には俺の戦う理由ってのがあっただけだ」
アリア「キンジ、あ、あのくらい……あたし一人でなんとかできた。バカはそっちよ」
キンジ「そうだな。お前みたいなバカを助けた俺は、バカなのかもなぁ。拓哉、お前はどう思う？」
拓哉「どっちもバカで、ＳＭ好きの変態だ」
アリ，キン「「今それは関係ない！！！」」
拓哉「心配するな。一厘冗談だ」
キンジ「九割九分九厘本気かよオイ！」

日本の単位がわからないのか、アリアは？をうかべる。

アリア「ゴメン、一人でなんとかできた、ってのはウソ」

アリアはしょぼーんとなりながら呟く。

アリア「あのさ。空で……あたし、分かったんだ。なんであたしに『パートナー』が必要なのか。自分一人じゃ解決できないこともある。あんたたちがいなかったら、きっと、あたし……」
キンジ「……」
アリア「――――だから今日はね、お別れを言いにきたの」
キンジ「……お別れ？」

ロンドンに帰ることか。

アリア「やっぱりパートナーを探しに行く。ホントは……あんたたちがよかったんだけど。でも、約束だから」
キンジ「約束？」
拓哉「事件、一回だけって言ったしな」
キンジ「あ、ああ……」
拓哉「で、もう俺らを追わず、ロンドンに帰る……と」
アリア「……キンジ。あんたは立派な武偵よ。拓哉は、本気を出したらあたしなんて足元にも及ばないと思うからもともと立派みたいだけど。だからあたし、今のあんたたちの意見を尊重するし、もう……ドレイなんて呼ばない。だから……気が変わったら、今度こそ――――あたしのパートナーに……」
キンジ「……悪い」
アリア「い、いいのよ。あんたにその気がないのなら。そ、そう、拓哉。拓哉はどうなのよ？」
拓哉「……悪ぃ。俺もいい」
アリア「いいっていいって。どうせあたしは独唱（アリア）曲だから」

俺たちはそれから、アリアの東京での生活について話した。UFOキャッチャーがどうの、風穴がどうの。

アリア「あっ、もうこんな時間？……急がなきゃ」
キンジ「誰かと約束か？」
アリア「うん。お迎えが来るのよ」
拓哉「ロンドン武偵局からか？」
アリア「うん。あんなこともあったしね」

ロンドン武偵局。
そこは、アリアが武偵として活躍していた場所。

アリア「ママが捕まる前、あたし、あそこで派手に働いちゃってるからさ」
拓哉「早く帰ってこい、と」
アリア「そ。自分の無能を棚に上げて、ね。これを機に、帰って態勢を立て直すことにしたの」
キンジ「帰る……ロンドンに、か」
アリア「うん。ヘリでイギリス海軍の空母に行って、そこからジェット機でね」
拓哉「軍の空母とかスケールでかいな。さすがは貴族」
アリア「あんたも貴族でしょ」
拓哉「元貴族だ。初代が大罪人として、貴族の名を失った」
アリア「そうなの？」
キンジ「まぁ、見つかるといいな。お前の、パートナー」
アリア「きっと見つかるわ。あんたたちのおかげで、『世界のどこにもいない』ってワケじゃないってことが分かったし」
キンジ「そっか……がんばれよ」
アリア「うん。バイバイ」

アリアは普通に出ていった。間宮あかりのほうはどうすんのかねぇ。

キンジ「……？」
拓哉「どした？キンジ」

ドアの向こうから、足音がしなかった。
不審に思ったのだろう。キンジが覗き穴を覗く。俺も透視魔術で見てみると……

アリア「……ひっく……ひっく……えぐっ……うぅ……」

案の定、アリアが泣いていた。

アリア「やだよ……イヤだよキンジ……拓哉……いないよ……あんたたちみたいなヤツら……絶対……いない。もう、見つかりっこない……よ……」

思ったとおり、俺らに、パートナーになって欲しかったんだな。

でもまぁ、これでいいんだ。俺らは普通の生活に戻る。

でも、あいつがいなくなって、なぜ俺は沈むのか、わからない。

拓，キン「「ちくしょう。拓哉（キンジ）……お前、今何を考えている」」

お互いハモっていることも気づかず自分に問いただす。

キンジ「アリア……」

キンジがつぶやく。魔術師は感情に支配されてはいけないと、初代（スター）は言っていた。感情に支配され、魔術の制御ができなくなってはいけないと。普段はちゃんとできる。なんたって俺は、完璧な人間。一族最強の魔術師だったんだ。こんなことができなくて、どうすんだよ。

俺は、初代を超えるために、努力した。努力して努力して努力して努力して、ようやく手に入れたこの力。初代も褒めてくれた。自分を超えるとは思っていなかったそうだ。

だが、あいつは努力しても力を手に入れられなかった。

拓哉（俺は力を努力して手に入れた。だが、アリアは違う。努力しても力が手に入らなかった）

キンジ（あいつは一族の欠陥品。俺も、遠山家の欠陥品。いつも戦って傷つき続ける独唱（アリア）曲）
拓哉（努力しても、結局力を手に入れられず、パートナーもできない。ホームズ家の人間に馬鹿にされ続ける独唱（アリア）曲）
キンジ（あんなゴミみたいな世界で、戦い続けて、傷ついて、最後まで自分を独唱（アリア）曲と言っていた）
拓哉（力を、パートナーを手に入れるために、努力し続けるお前が――――）
キンジ（半人前の、オルメス家の欠陥品のお前が――――）
拓，キン（（『独唱（それ）曲』でいいのかよ！））
拓，キン「「いいわけねえんだ。わかってるだろ、拓哉（キンジ）」」

俺は、かなえさんと約束したんだ。アリアにもしものことがあったら、イ・ウーを潰すと。アリアを守ると。

拓，キン「「甘ぇ（甘いな）……甘ぇんだよ（甘いよ）。拓哉（キンジ）、テメェ（お前）は本当に……大甘ヤロウだ！ちくしょう！」」

ふとキンジを見ると、転出申請の書類を引き裂いていた。

拓哉「ふん、テメェも迷いは消えたか」
キンジ「そうだな。俺はもう、迷わない！」
拓哉「ふん。感情に流されるたぁ、俺もまだまだだ。でも――――こういうのも悪くない」

集中力の乱れた俺は、魔術を使えない。バスも、自転車もない。

だから、大甘ヤロウな俺たちは、走る、走る。女子寮の屋上のヘリポートに、もうヘリは来ていた。いそいで階段を駆け上がり、屋上のドアを蹴り開ける。

遅かった。もう、ヘリは十メートルほど飛び上がっていた。だが、俺たちは――――

拓，キン「「アリア！！」」

――――叫ぶ。

もう、何も考えねぇ！

拓，キン「「アリア！アリアーーーーっ！！」」

はぁ。魔術が使えれば楽だが、こんな体力と集中力じゃ無理だな。

だから、人生最大かと思うくらいの声で、叫ぶ！

拓，キン「「アリアーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」」

がらん！

ヘリの扉が開く。

アリア「バカキンジ！拓哉！遅い！」

なんとアリアは、強風の中をそのまま飛び降りた。ふん、おもしれえ。やってやろうじゃん。

拓哉「キンジ、入口を塞げ」

キンジ「あ、ああ」

アリア「ちょっ、なんで塞ぐのよ！？」
拓哉「ほんとはこの状況で魔術を使うと、疲れるんだがな」
　嘆息する拓哉。
拓哉「アリア！お前は独唱曲（アリア）だ！そうだろ！でもな――――」
　走りながら、キンジとアリアの腕を掴み――――
拓哉「俺が、ＢＧＭくらいにはなってやる！！」
　金網を蹴破って飛び降りた。
アリア「なに飛び降りてんのよ！」
拓哉「心配すんな。『風は人を包み、その速度を落とす』」
　風が集まり、アリアを包む。またたく間にアリアの落下速度が落ちてゆく。
拓哉「な？大丈夫だろ？あー、一人分の魔力しか残ってなかった。悪いキンジ。お前はお前でなんとかしろ。俺は落下訓練もしたから大丈夫だがな」
キンジ「お前、なんてことしやがんだ」
　下を見ると、温室のビニールハウスがあった。
　キンジはそこに突っ込む。
キンジ「……っ……ってぇ……」
拓哉「ほいっと」
アリア「あんたバカ？あぁそうか。あんた今バカキンジモードなの

ね？」

ギクッ！擬音が聞こえてきそうなくらいキンジが動揺する。

アリア「キンジ、あんたには何かをスイッチに、急激に高まる力がある」

キンジ「……」

アリア「それがなんだかわからないけど、キンジは制御できてない」

拓哉「……（ああ、ここまで気づいたか、ＨＳＳのこと）」

アリア「でも、普段から出せるように調教すればいいって気づいたのよ」

拓，キン「「ちょっ……！それは倫理的に無理だ！」」

アリア「うるさい！あたしはあんたらをパートナーにして、曾お爺さまみたいに立派な『Ｈ』になるの！」

キンジ「だからなんなんだよその『Ｈ』ってのは」

拓哉「あれ？まだ気づいてねぇのかよ」

リュパンの宿敵。イギリスの貴族。Ｈ。そこで気づくだろ普通。

アリア「まだ分かってなかったの！？信じらんない！バカバカ！どバカ！ギネス級のバカ！バカの金メダル！」

拓哉「グランド級のバカ。ノーベルどバカ賞」ボソッ

キンジ「お前まで言うな拓哉！」

アリア「いいわよ。あんたも決定したんだから教えてあげるわよ！あたしの名前は――――」

腰に手をあてナイチチを張る。

アリア「神崎・ホームズ・アリア！」

キンジ「ほー、むず……？」

拓哉「そういうこった。こいつぁシャーロック・ホームズ四世。俺らは、ワトソンくんってとこか？」
アリア「もう逃がさないわよ。逃げようとしたら」
ふん、これからは武偵生活が――――
アリア「風穴開けるわよ！！」
――――面白くなりそうだ。
Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

キャラ設定？

〜名前〜
土屋・拓哉・クロウリー五世。
普段は土屋・C・拓哉と名乗る。クロウリー五世と知っているのは、キンジ、アリア、かなえさん、理子だけ。

〜体格・見た目〜
１７５程度の平均的身長、筋肉質。顔はそこそこ。髪は上条当麻のようなツンツン銀髪ウニ頭。目は普通に黒。

〜出身・生い立ち〜
生まれは日本だが育ちはイギリス及びバチカン。生まれて一年ほどでイギリスに行き、５才ほどで魔術の才覚を発揮しバチカンの『聖（セント）ピエトロ大聖堂』へ行く。そこで１２まで初代クロウリーに修行をつけてもらい、初代を超える。そこからイギリスに戻り、剣術と銃を習う。そこでも才覚を発揮。その腕を生かすために東京武偵高に入学した。ちなみに１５のときに遠山金一と会い、手合わせをしたが互角。金一がすごい武偵であることを聞き、武偵高に入ることを決心した。金一を尊敬している。

〜武器〜
魔術で改造したベレッタＭ９２Ｆが二丁と魔術のかかった日本刀が二本。また、今後変化する予定。

〜性格・戦い方〜
上条さん並みの超お人好し及び鈍感。守ると決めた人は必ず守る。
今の守る対象は、アリア、かなえさん、キンジ、理子。今後増える予定。

戦い方は、極力傷つけない。武器はあまり使わない。魔術は滅多に使わない（キレたとき、本気を出したとき、やむを得ないときには容赦なく武器や魔術を使う）。なお、本気を出すときは、初代から受け継いだ魔法名を名乗る。

～その他～

武偵ランクS。強襲（アサルト）科の主席。二つ名は双剣双銃（カドラ）。初代クロウリーを尊敬している。魔術結社、『黄金の夜明け』のリーダー。二年の強襲（アサルト）科の女子のほとんどに好かれているが気づいていない。初代クロウリーのPerdurabo（われ耐え忍ばん）という魔法名を受け継いでいる。

武装巫女

拓哉「なぁ、キンジ。メールきてるぞ」
キンジ「ん？何件？」
拓哉「４９件。あとボイスメッセージが１８件」
キンジ「ここ電波悪いからたまりやすいんだよなー」

おそらく全部白雪だろう。

キンジ「げっ。全部白雪から。って『ねえキンちゃん。女の子と同棲しているって本当？』って……」
拓哉「そ、それやばくねぇか？」
キンジ「ああ。『なんで返事くれないの』とかいっぱい来てる。げっ。い、『今からそっち行くね』だと……？」
拓哉「そ、それは……」
キンジ「あ、アリア」
アリア「な、なによ。がたがた震えて、気持ち悪い」
拓哉「アリア、に、逃げろ。今すぐに」
アリア「はぁ？あんたたち何言って……？」
キンジ「早く逃げろって。く、来るぞ、『あいつ』が」

ガシャン！

拓哉「き、来たぞ」
キンジ「武装巫女が」

そう。来たというのは――――

拓哉「白雪！」

――――白雪である。この状態の白雪は、俺でも無理だ。

白雪「神崎・H・アリア――――――――！！！！！」

アリア「な、なによ！いきなり！」

白雪「この泥棒ネコ！キンちゃんを返せ――――――――！！！！」

星伽白雪は、大和撫子である。

お淑やかで慎ましい、アリアとは正反対の、古き良き日本の乙女。

家事全般が得意で、誰にでも優しく、良妻賢母のタマゴである。

……本来は。

鬼の形相で日本刀を振り上げて、

白雪「あ、あ、アリアを殺して私も死にますぅー！！！」

なんて叫ぶことはない子である。

……普段は。

アリア「だからなんであたしなの。人違いよ！」

アリアもキンジも、この状況に陥った理由がわかってないみたいだ。

キンジ「白雪！お前何勘違いしてんだうおっ！」

勘違いもクソもねーよ。今度は白雪とＳＭプレイかよ。変態。

アリア「キンジ！なんとかしなさいよ！あんたのせいで変なのが湧いたじゃない！」

キンジ「お、俺のせいじゃねーよ！」

いや、正直どっちも悪い。

白雪「そう！キンちゃんは悪くない！悪いのは――――――アリア！アリアが悪いに決まってる！アリアなんか、いなくなれぇーーっ！」

うわー、これ前にキンジに聞いた、怒りで我を忘れるってやつじゃない？

おもに、キンジに手を出す女子に対する嫉妬から来るね。

白雪「天誅ぅーーーーーッ！」

下駄を鳴らし、突進して、アリアの脳天めがけて刀を振り下ろす。

本気で殺る気？

アリア「み〝ゃっ！」

拓哉（おーおー、真剣白羽取り（エッジキャッチング）！）

アリア「このバカ女！」

体術で白雪を抑えようとするが、

白雪「バリツねーーーーー！？」

さすが白雪。見抜きやがった。

白雪「う～～～いなくなれ！居なくなれ泥棒ネコ！キンちゃんの前から消えろ！」

アリア「きゃうっ！？」

キンジ「や、やめろ！やめるんだ二人ともうぉっ！？」

キンジ助けに入るが、アリアはキレたようだ。

アリア「キレた！も～～～～～キレた！――――風穴開けてやる」

小太刀で白雪の剣に応戦するアリア

白雪「キンちゃん、拓哉くん。この女を後ろから刺して！そうすれば全部見なかったことにするから！」

アリア「キンジ！拓哉！あたしに援護しなさい！パートナーでしょ！」

拓，キン「「勝手にしろ。心ゆくまで戦えよ」」

二人の戦いを収める気力もない二人だった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

アドシアード

昨日、アリアと白雪が近時の部屋で壮絶な戦いを繰り広げていたが、今日は何もないご様子だ。
そして今は昼飯である。俺はコンビニで買った弁当を食っている。
すると……

「遠山君。土屋君。ここいいかな？」

ニコッっと笑うこの優男は、不知火亮。同じ強襲科の良く俺とパーティを組むクラスメートだ。キンジが強襲科にいた頃はキンジも一緒だった。
ランクはA。しかも拳銃・ナイフ・格闘、どれをとっても信頼がおける。拳銃はLAM（レーザーサイト）つきのSOCOM（ソーコム）と、こちらもなかなかだ。
不知火はクラブサンドを乗せたトレイを机に置いた際に少しズレたキンジのトレイを、ちゃんと元の位置に整えた。ゴメンよ、と会釈も忘れない。こんなマメな積み重ねのおかげで、こいつはモテるんだろうな。まぁイケメンでもあるしな。
アリアに付きまとわれる前の俺とキンジは、不知火、武藤とよくつるんでいたが、不思議なことに、不知火にカノジョはいないそうだ。

武藤「聞いたぜ、キンジ。ちょっと事情聴取させろ。逃げたら轢いてやる」

無理やり入り込んできたこのツンツン頭の男は、武藤剛気。車輌科の優等生（笑）で、乗り物と名のつくものはなんでも乗りこなせるという、乗り物オタクだ。
ちなみにこいつの銃は、メンテが楽だからという理由で、リボル

バーのコルトパイソン。装弾数は少ないし減音器（サプレッサー）はつけられないし、武偵の銃としては論外だ。

キンジ「なんだよ事情聴取って」

武藤「キンジお前、星伽さんと喧嘩したんだって？」

噂広まるの早いなオイ。

ていうか武藤お前、なんでそんなにムッツリしてんだよ。

武藤「星伽さん、沈んでたみたいだぞ？どうしたんだ」

キンジ「白雪とはどうしたもｎ　拓哉「それについては俺から説明しよう！！」うえっ？」

武藤「そうか。拓哉、頼んだ」

拓哉「昨日の夜、キンジの部屋で、アリアと白雪がドンパチしました！」

キンジ「お、おい。それ言っていいのかよ？」

武藤「黙れキンジ。拓哉、続けてくれ」

拓哉「その喧嘩の理由は、アリアにつきっきりで毎日ＳＭプレイをｓ　キンジ「っておーい。誤解を招くようなこと言うな！」黙れキンジ。ＳＭプレイをしていたために、構ってもらえなかった白雪が、アリアに嫉妬したためであり、その喧嘩のあと、アリアが問題発言をしたんだ。そのセリフが、こちら」

俺は懐から、キンジの部屋に仕掛けておいた盗聴器を取り出してパソコンにつなぎ、ファイルを再生した。ちなみにキンジの部屋は、俺の仕掛けた盗聴器でいっぱいである。

――――ザザ、ザザザ――――

『……じゃあ、じゃあ、キンちゃんとアリアは、そういうことはし

てないのね？』

キンジ「ちょっ！？拓哉！それはダメだ！止めろ」
アリア「そ、それはっ」
拓哉「うるせえよ。おい武藤。不知火」
武藤「はいよ」
不知火「はい」
キンジ「やめｒ　ムガムゴ」
不知火「ちょっと静かにしようか、神崎さん」

武藤にキンジの口を塞がせ、不知火はアリアに桃まんを次々と渡す。

『そういうことってなんだよ』
『キ、キス、とか……』
『……』
『……』
『……し……の……』
『ん？なんだ？』
『……し……た……の……ね……』
『そ、そ――――そういうことは、したけど！』

武藤「オイ、キンジ。アリアとキスだァ？」
拓哉「武藤。静かにしておけ。こっからだ」

『で、でも、だ、だ、だ、大丈夫だったのよ！』

拓哉「もうすぐだ。静かにしろよ」

『昨日分かったんだけど！こ、ここ、こ』

……ゴクリ……
みんながつばを飲み込む。
『子供はできていなかったから！！』
武藤「……こ、これは俺の予想の斜め上を行っているな。これで確信犯だな、キンジ」
キンジ「ブハァッ。おいまて！俺がしたのはキスまでだ」
武藤「おい、キスは認めたな」
キンジ「ヤベッ」
アリア「と、と、とにかく！あたしが白雪と喧嘩したのは嫉妬じゃない！これはそういう、好きとかじゃない！これは紛れもない本心よ！」
拓哉「本当か？」
アリア「そうよ」
拓哉「強襲科ではキンジと俺の話ばっかり人にしているのにか？」
アリア「そうよ！」
キンジ「そういえば不知火。お前アドシアードどうする？代表とかは？」
拓，武，不（（（話そらした……））））
不知火「補欠だから競技には多分でないよ」
キンジ「じゃあイベント手伝(ヘルプ)いか。何かしなきゃいけないんだろ？」
不知火「まだ決めてなくてね。どうしようか」
キンジ「アリアはどうするんだ？」
アリア「あたしも競技には出ないわよ。拳銃射撃(ガンシューティング)競技代表には選ばれたけど辞退した」
キンジ「おまえもイベント手伝いか」
アリア「あたしは閉会式のチアだけやる」
キンジ「チア……？　ああ、アル＝カタのことか」

アル＝カタとは、ナイフや拳銃による演武をチア風のダンスと組み合わせたものである。そんな物騒なダンスを、武偵高の女子は億面もなく『チア』と呼ぶのだ。

アリア「キンジと拓哉もやりなさいよ、パートナーなんだし。どうせなんでもいいんでしょ」

男子はバックでバンドという、地味な役割である。

キンジ「音楽か。別に不得意というわけでもないし……それでいいか」

拓哉「俺はもとよりそれをするつもりだったぞ。まぁ競技は狙撃以外すべてから出てくれって言われたが全部却下した」

全員「え？狙撃以外全部？」

拓哉「ん？ああ。ほとんどの競技代表のオファーが来てた」

不知火「二人がそれなら、僕もそれにしようかな。武藤君も一緒にやろうよ」

武藤「バンドか。カッコイイかもな。やるか」

ほんと安直な決定だな。

不知火「……でも神崎さんも土屋君も、代表を辞退するなんてもったいない。メダルを持っていれば、進路がバラ色になるんだ。武偵大も推薦で行けるし、就職にも有利。武偵局にはキャリア入局できるし、民間の武偵企業だって一流どころの内定が選り取りみどりって話だよ？」

アリア「そんな先のことはどうでもいい。あたしは今すぐやらなきゃいけないことがあるの。練習に出てる暇なんてないわ」

拓哉「わりぃ。俺もう進路のオファー来てるんだ。世界各国の武偵

大、武偵局から。それに俺もやることがあるし」

アリアのやることとは、かなえさんを助けること。そして俺はかなえさん・アリア・キンジ・理子の四人を守ること。

アリア「アドシアードなんかよりね」

アリアはキンジに向かっていう。

アリア「キンジ、あんたの調教のほうが先よ」
拓哉「ほらみんな、分かっただろ？この二人がＳＭプレイをしているって」
キンジ「アリア、人前ではせめて訓練といってくれよ」
アリア「うるさい。奴隷なんだから調教」
キンジ「じゃあなんで俺だけなんだよ。拓哉は」
アリア「拓哉は正直あたしよりはるかに強いんだもん。立場が逆になるわ」
拓哉「悪いが調教するなんていう変態的思考は俺にはない」
キンジ「で、調教って何をするんだ。具体的に」
アリア「そうね……明日から毎日あたしと一緒に朝練しましょう」

キンジ、墓穴掘ったな。アドシアードの話をするからこんなことになるんだ。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

ボディーガード

『生徒呼出　2年B組　超能力操作研究科（SSR）　星伽白雪』

掲示板の前で、そんな張り紙が目に入る。

拓哉（白雪が呼び出し？珍しいな）

そんなことを考える拓哉。

拓哉（なんか裏がありそうだな。忍び込んでみるか。正直、危険だがどうせこれを見ればバカ二人も来るだろ）

東京武偵高。どこも危険極まりないところであるが、その中でも『3大危険地域』と呼ばれるところが存在している。

強襲科（アサルト）。
地下倉庫（ジャンクション）。
教務科（マスターズ）。

教務科がなぜ危険なのか。それは教師の前職によるものだ。傭兵、マフィア、殺し屋までいると言われている。正直どうでもいいが蘭豹辺りは気を付けねぇと、気を抜いたら殺られる。まぁ本気でやれば互角以上だが。

拓哉（とりあえず気配を消して行くか）

しばらく探していると、白雪を見つけた。

拓哉（見つけた……って、綴かよ。まためんどくせぇヤツがいたもんだ）

２年Ｂ組担任、尋問科（ダギュラ）の綴。使用する銃はグロック１８。
教師の中でもアブないヤツの筆頭として扱われる綴。目がいつも据わっていて、年中ラリっているような女。

綴「星伽ぃ～……」

煙草の煙を吹き、白雪に言う。

綴「おまえ最近、急ぅに成績下がってるよなー……」

拓哉（またキンジ絡みかよ）

てかあのタバコ、国内産じゃねぇよな。大丈夫なのか日本で吸って。

綴「あふぁ……まぁ、勉強はどぉーでもいぃーんだけどさぁ」

よくねーよ。教師がそんなこと言っていいのかよ。

綴「なんだっけぇー……えーと……あれだ……あれ……あ、変化。変化は気になるんだよねぇー」

そんな単語を忘れるのか。大丈夫か、コイツ。そんな無気力な綴は、ある一点においては、俺以上の実力を持つ武偵だ。

尋問。

こいつを相手にすると、どんな凶悪な犯罪者でも、ヤバい位の戦

闘狂でも、洗いざらい吐いちまうそうだ。まぁそのあと綴を女王様とか女神とか呼ぶようになるそうだ。

綴「ねぇー、単刀直入に聞くけどさァ。星伽、ひょっとして――――アイツにコンタクトされた？」

白雪「魔剣（デュランダル）、ですか」

拓哉「ほう、デュランダルねぇ」

魔剣（デュランダル）。超能力を使う武偵、『超偵』ばかりを狙う誘拐魔。

白雪「拓哉くん！？」

綴「土屋ぁー、なんでお前がそこにいるのかなぁー」

拓哉「あれで驚かないとは、さすがですねぇ。綴先生。気配消して侵入して、話を聞いていただけですよ」

白雪「と、とにかく私じゃなくて、もっと大物の超偵を狙うんじゃないですか？」

綴「っと、土屋はおいといてぇー、星伽ぃー。もっと自分に自信を持ちなよォ」

白雪「そ、そんな」

拓哉「俺も、白雪はデュランダルに狙われてると思うぞ」

綴「ほらぁー、狙撃科（スナイプ）とSSR以外なら各学科主席になれるほどの実力を持った土屋が言ってるんだぞぉー。ボディーガードをつけておけよォ。」

白雪「でも……ボディーガードは……その……」

綴「にゃにょぅ」

白雪「私は、幼馴染の子の、身の回りのお世話をしたくて……誰かがいつもそばにいると、その……」

綴「星伽、教務科（うちら）はアンタが心配なんだよぉ。もうすぐアドシアードだから、外部の人間もわんさか校内に入ってくる。その期間だけでも、誰か有能な武偵をボディーガードにつけな。これは命令だぞ

ー」
白雪「……でも、魔剣（デュランダル）なんて、もともと存在しない犯罪者で……」
拓哉「そうとも言い切れねぇだろ？誰も見てねぇからいるかいないかもわからねぇからな」
綴「ほらぁー、土屋もそう言ってるんだしぃー、つけときなってぇー。これは命令だぞー。大事なことだから、先生2度言いました。3度目はコワイぞぉー」

煙草の煙を白雪に向けて吹く。
綴、そんなことしていいのかよ。

白雪「けほっ。は……はい、わかりました」

ガシャン！

通風口のカバーが落ちてきた。いよいよお出ましか。

アリア「――――そのボディーガード、あたしがやるわ！」

ズルッ、ズルルルッ、べちゃ。

キンジ「う……うおっ！？」

アリアめがけてキンジが落ちてくる。

キンジ「うおっ！？」
アリア「むきゅっ！？」

アリアが潰れる。キンジ、偶然とはいえウザいアリアにそんなことしてくれるとは、ＧＪだ。

アリア「き、きき、キンジ！変なところに馬鹿面つけるんじゃなうにゅえ！？」

あーあ、綴がアリアを猫掴みして持ち上げてやがる。キンジも襟首つかまれて持ち上がってるし、なんて馬鹿力だ。

綴「んー？――――なにこれぇ？」

キンジとアリアの顔をのぞき込む綴。

綴「なんだぁ。こないだのハイジャックのカップルじゃん」

ヤバい。綴、何かアブない雰囲気出てる。

綴「これは神崎・H（ホームズ）・アリア――――ガバ（ガバメント）の二丁拳銃に小太刀の二刀流。二つ名は『双剣双銃（カドラ）』。欧州で活躍したSランク武偵。でも――――アンタの手柄、書類上ではみんなロンドン武偵局が自分らの業績にしちゃったみたいだね。協調性がないせいだ。マヌケぇ」

アリアのツインテールの片方を根元からつかんで語りだす。おいおい、どんだけ情報持ってんだよ！

アリア「い、イタイわよっ。それにあたしはマヌケじゃない。貴族は自分の手柄を自慢しない。たとえ人が自分の手柄だと言っても、何も言わないものなの！」

綴「へぇー。損なご身分だなぇ。アタシは平民でよかったぁー。そういえば欠点、アンタ、およ……」

アリア「わぁー！」

泳げないことだろ。それを口止めするとは、よっぽど知られたくないようだ。

アリア「それは欠点じゃない！浮き輪があれば大丈夫だもん！」

綴「まぁーどうでもいいが、んで――――」

今度はキンジか。

綴「こちらは遠山キンジくん」

キンジ「あー……俺は来たくなかったんですが、コイツが勝手に……」

綴「性格は非社交的。他人から距離を置く傾向あり」

まさか全生徒のデータが入ってんのかよ。

綴「――――しかし、強襲科の生徒には遠山に一目置いているものも多く、潜在的には、ある種のカリスマ性を備えているものと思われる。解決事件（コンプリート）は……たしか青海の猫探し、ＡＮＡ６００便のハイジャック……ねぇ。何でアンタ、やることの大きい小さいが極端なのさ」

キンジ「俺に聞かないでください」

綴「武装（えもの）は、違法改造のベレッタ（ベレ）・Ｍ９２Ｆ」

ばれてるしｗｗｗ

綴「３点バーストどころかフルオートも可能な、通称・キンジモデルってやつだよなぁ？んー？」

キンジ「あー、いや……それはこないだのハイジャックで壊されまして、今は米軍払い下げの安物で間に合わせてます。当然、合法の」

綴「へへぇー。装備科(アムド)の平賀に改造(イジリ)の予約入れてるだろ？」

じゅっ！

キンジ「うわちっ！」

タバコの火をキンジの手の甲へ押し付ける。ホント、何でもありだな、この人

綴「でぇー」

なぜか俺の方へ来て

拓哉「ぐぇっ」

持ち上げてキンジのところへ投げ捨てる。

綴「最後に土屋・C(クロウリー)・拓哉くん」

拓哉「なんで俺の本名知ってんすか！？」

綴「幼い頃からバチカンの聖(セント)ピエトロ大聖堂で育ち、去年日本へ来た」

拓哉「……」

綴「アンタの武装(えもの)は、ベレッタ(ベレ)・M92Fの二丁拳銃と日本刀の二刀流。改造したカンジはないのに、妙に銃の威力や装弾数、刀の切れ味が上がっている。これはどういうことかなー。んー？」

拓哉「さ、さぁ？」

綴「なーんか隠してない？まぁーいいけど。二つ名は神崎と同じ『双剣双銃(カドラ)』。でぇー？どういう意味？『ボディーガードをやる』ってのは」

アリア「言ったとおりよ。白雪のボディーガード、24時間体制、

あたしが無償で引き受けるわ！」
キンジ「お、おいアリア……！」
綴「……星伽。なんか知らないけど、Ｓランクの武偵が無料（ロハ）で護衛してくれるらしいよ？」
白雪「……嫌です！アリアがいつも一緒だなんて、汚らわしい！」

言うと思った。

アリア「あたしにボディーガードをさせないと、コイツを撃つわよ！」

近時の額に銃を構えるアリア。

白雪「き……キンちゃん！」

まんまと乗せられてやがる。

綴「ふぅーん……そういう人間関係かぁー」
拓哉「先生、コイツらの関係は、予想の斜め上を行ってますよ。毎晩毎晩アリアとキンジはＳＭプレイをしていて、白雪はそれに嫉妬しているんですよ」
綴「それは面白い人間関係だな。で、どーすんの？」
白雪「じ、じょ、条件があります！」
綴「条件？」
白雪「キンちゃんも私の護衛をして！２４時間体制で！」
拓哉「やっぱそうきたか」
白雪「私も、私も、キンちゃんと一緒に暮らすぅー！」

キンジは崩れ落ち、生気がなくなっていた。

To Be Continued!

白雪とアリア（前書き）

白雪のボディーガードをすることになったキンジとアリアとそれを手伝う拓哉
だがやはり、白雪とアリアが一緒にいると、カオスな状況が出来上がってしまう

※タイトル変更しました

白雪とアリア

昨日、教務科（マスターズ）に忍び込んだ俺らだったが、キンジ、アリアは成り行きで白雪のボディーガードをすることになった。俺はパスしたが、一応キンジの部屋にいるから手伝いはするつもりだ。

しっかし白雪。以来の翌日に即引越しとは、そんなにキンジと一緒がいいのか……

白雪「武藤くん、本当にタダでいいの……？せめてガソリン代だけでも……」

武藤「いやーいいんスよ！混んぐらいマジ朝飯前っスから！」

武藤、敬語になってるぞ。

武藤「あの……でも、ココ第三男子寮じゃないスかね」

白雪「あ、うん」

武藤、チミは余計なことを聞かないで欲しいよ。

拓哉「ほいっと」

拓哉は武藤を蹴る。

武藤「ぶげらっ！……何すんだよ拓哉」

拓哉「テメェは余計なことを聞くな」

白雪「あっキンちゃん！」

武藤「キン……キンジか？」

白雪「あ、あのね武藤くん。私、今日からキンちゃ……遠山くんのお部屋に住むの」

武藤「き、キンジのっ！？」
拓哉「ボディーガードだよバカが」ゲシッ！
武藤「ふごっ！……蹴るなよ」
キンジ「アリアのせいで俺まで一緒にやることになっちまったんだ。言いふらすなよ」
拓哉「言いふらしたら……コロス……」
武藤「お、おい。物騒なことが聞こえたんだが」
拓哉「きにょせいだ」
武藤「今のはなんだ……」
拓哉「かみまみた」
武藤「さっきのは意図的に噛んだだろ」
拓哉「かいまみた」
武藤「なにを！？」
拓哉「さ、冗談はここまでにして」
武藤「冗談かよ！」

とりあえず俺とキンジは、部屋に入っていった。

キンジ「何やってんだ？」
アリア「見ればわかるでしょ。この部屋を要塞化してるのよ」
キンジ「すんなよ！」
アリア「何驚いてんのよ、武偵のくせに。こんなのボディーガードの基礎中の基礎でしょ？アラームをいっぱい置いて、依頼人（クライアント）に近づく敵を見つけられるようにしておくの。ちょうどいろいろぶっ壊れたし、やりやすいわ」
拓哉「壊したのはお前だろう。すぐ癇癪起こす精神不安定なおこちゃまが」
アリア「あとは天窓ね……ってあたしはおこちゃまじゃない！」

白雪「おじゃ、ま、しまーす」

噛みまくりで白雪登場。

拓哉「じゃあ、俺はちょっと外に行ってくる」

外に言っとかないと、またあの二人がカオスな状況を作り出すからな。

３０分後……

キンジ「あ」
拓哉「キンジ、またカオスな状況か？」
キンジ「そうじゃない。ヒスりそうになった」
拓哉「あらら。白雪の下着とか？」
キンジ「ゴフッ！……そうだよ……」
アリア「コォーラァー、何サボってんのよあんたたち」
キンジ「いてっ」ごちっ
拓哉「ほいっと」ヒラリ
アリア「拓哉、避けるな。サボるなあんたたち」
拓哉「俺はボディーガードじゃねぇよ」
キンジ「事情があったんだよ。お前こそ出てきてんじゃねーか」
アリア「あたしは買い物ついでに脱走兵を狩りに来たのよ」
拓哉「ボディーガードは？」
アリア「レキに任せてきた」
キンジ「レキ？」
アリア「そ。遠隔から見張らせてる。あたしが頼んだの」
アリア「ただのパートタイムだけどね。あの子、狙撃競技（スナイピング）の代表な

のよ。忙しいから使えるのは限られた時間だけ。それに狙撃手(スナイパー)はボディーガード向けじゃない。だから基本、あたしとキンジと拓哉、三人でしなきゃいけないの。ってはろはろー！？きーいーてるのー！？」

キンジ「イテテッ。耳を引っ張るな！レキのこと考えてただけだ」

拓哉「だから俺はボディーガードじゃねーって」

アリアはしきりに周りを気にして、パチパチと目をウィンクさせた。

マバタキ(ウィンキング)信号。

モールス信号に似た、マバタキで意思疎通をするものだ。解読すると……

デュランダル　ノ　トウチョウ　キケン

魔剣(デュランダル)の、盗聴、危険？

俺はアリアとキンジの耳元でこう言った。

拓哉「（またかなえさん絡みだろ？）」

アリア「（そうよ。そいつを捕まえれば、差戻審も確実になるわ）」

ブーッ　ブーッ　と、キンジの携帯が鳴る。白雪だろう。

キンジ「もしもし」

白雪『あっ、キンちゃん。ゴハンもうすぐできるよ。今日は中華にしてみたの』

キンジ「ああ、わかった。すぐ帰る」

白雪『うん。でも、友達と一緒なら遅くてもいいよ』

ここでアリアと一緒っていったらヤバイことになるだろう。

キンジ「ああ、どうせ拓哉と二人だから大丈夫だ。拓哉もその家に住んでるんだし」

アリア「あたしもいるじゃない」

白雪『き、キンちゃん？今、アリアの声が聞こえたんだけど』

空気読めアリア。

キンジ「い、今そこを通り過ぎただけだ」

アリア「何言ってんの？さっきからあんたたちと話してたでしょうが。ばかなの？」

白雪『――――キンちゃん――――』

あーこりゃヤバイな。

ザクン！何かを切る音がして……

白雪『――――どうしてウソつくの？』

ホラーだ……

キンジ「あーはいはい！今すぐ帰りますよ！」

パンッ！キンジはケータイを閉じ、ＫＹツインテの片方を引っ張る。キンジはそのあとドロップキックされたが。

部屋に戻ると豪華な料理があった。
カニ炒飯にエビチリ、酢豚に餃子にミニラーメン、しかもアワビのオイスターソース和えまで揃っている。キンジのためにここまでするのかよ。

白雪「食べて食べて。キンちゃんとキンちゃんの友達である拓哉君のために作ったんだよ」

さすがに本命であるキンジの先に食うのはマズイと思い、キンジが手を付けてから食うことにした。

白雪「お……美味しい？ですか？」
キンジ「うまいよ」
白雪「よかった！ほら、拓哉君も食べて」
拓哉「何か悪いな」

俺は白雪に近づき、耳打ちする。

拓哉「（本当はキンジのために作ったんだろ？）」

そう言うと白雪は顔を真っ赤にし、「うん」と小声で言い、「でも、拓哉君はキンちゃんの大切な友達だから」と言ってくれた。

白雪「拓哉君もどう？」
拓哉「うめぇな。白雪はいい嫁さんになるぜ？」

白雪は再度顔を真っ赤にした。

キンジ「ほら、白雪も食べろよ。いつもなんで俺の世話ばかり焼く

んだ」

こいつ気づいてないのかよ……

白雪「そ、それは……キンちゃんだから、です」
キンジ「答えになってないだろ」
白雪「……そ、そうかも」

苦笑いする白雪。
その横で、アリアが腕組みしながら、ヒクヒクとこめかみを震わせる。

アリア「で？なんであたしのところには食器がないのかしら？」
白雪「アリアはこれ」

どん。
白雪の声がホラーな声に突然変わり、アリアの前に丼を置く。
丼には盛ったご飯の真ん中に割っていない割り箸が付き立っていた。死ねってか？

アリア「なんでよ！」
白雪「文句があるなら解任します」

そっぽを向く白雪。苦笑いする拓哉。呆れているキンジ。ぎりぎりぎりと、ご立腹のアリア。これだけでも大変なカオスである。
犬歯を食いしばってから、がしゅがしゅとご飯をかっ込むアリアであった。

――――男子寮屋上――――

???「ここがアレイスターんとこのクソガキのいるところね」

ひとりの女性が薄気味悪い笑みを浮かべて立っている。

???「そのうち潰してやるよ、クロウリー五世。あはは、あはははは」

拓哉に怪しい影が忍び寄る。

To Be Continued!

白雪とアリア（後書き）

拓哉に忍び寄る怪しい影
果たして、その女性の正体は……

食後の休息（前書き）

久しぶりの更新です

食後の休息

夕食後、風にあたってくると外に出てきた俺。
部屋の中ではキンジとアリアがチャンネル争いを繰り広げている。
拓哉「まったく、これ以上カオスな状況を創らんで欲しいわ」
そんな言葉を呟いていると……
ｐｒｒｒ♪ｐｒｒｒ♪
拓哉「ん？電話か……」
拓哉は電話に出る。
『あーあー、繋がった。もしもし拓哉？』
拓哉「ん？その声、フェイリスか？久しぶりじゃないか」
フェ『はいはーい、フェイリス・ミダースですよー』
フェイリス・ミダース。ギリシャ神話で有名な”ミダス王”の末裔で、俺の結社（黄金の夜明け）を一時的に任せている、俺の最も信頼の置ける腕の立つ女魔術師だ。ちなみに使う魔術は錬金術メインである。
拓哉「結社（そっち）の方は大丈夫か？」
フェ『もちろん。拓哉の結社をそう簡単に潰すわけにはいかないからねー』
拓哉「それならいいさ。で、用件は？用があったからかけてきたんだろう？」
フェ『あー、そうそう。拓哉、今”ヤツ”から狙われてるみたいよ』

拓哉「”魔女”、か……」
フェ『そう。クロウリーを潰そうと目論んでるみたい。気を付けといて』
拓哉「おう、分かった。それと今ある問題を片付けたらそっちに戻るから」
フェ『えっ！拓哉戻ってくるの？』
拓哉「おう。結社の方も確認しとかないといけないし、副リーダーにずっと任せっぱなしもいけないからな」
キンジ「おーい、拓哉ー」
拓哉「悪い、そろそろ切るわ。（あ、それと結社の人間を2人くらいこっちに向かわせてくれ。さすがに俺一人じゃ”ヤツ”に対抗できるかわからないから）」
フェ『う、うん、わかったわ。気を付けてね。じゃあまた』
拓哉「おう」

電話を切り、キンジの方を向く。

キンジ「誰かと電話か？」
拓哉「ああ、俺の魔術結社を一時的に任せているやつ」
キンジ「そうか。ああ、白雪が占いするからお前も連れてこいって」
拓哉「ああ分かった」

部屋に戻った俺たちは、白雪の占いを受けるべくテーブルに向かう。

白雪「えっと、これは巫女占札っていうんだけど……」
拓哉「巫女占札……日本術式の魔術か」
白雪「えっ？拓哉君、魔術がわかるの？」

拓哉「ああ、俺もカバラ術式の魔術師だから。お前から結構な魔力も感じるし」
キンジ「おい、あっさりばらしてよかったのか？」
拓哉「ああ、同じ魔術師なら隠す必要がねーから」
白雪「じゃあ、まずキンちゃんから。何占いがいい？恋占いとか、金運占いとか、恋愛運を見るとか、健康運を占うとか、恋愛占いとかがあるんだけど」

ちょくちょく恋愛関係入れるなよ、オイ。

キンジ「じゃあ……数年後の将来、俺の進路がどうなっているのか占ってくれ」

空気読めキンジ。

白雪「チッ」

そしてお前も舌打ちするな。

アリア「どうなのよ」

アリアが尋ねたので、白雪の顔を見ると……険しい表情を浮かべていた。

キンジ「どうした？」
白雪「え、あ……うん。総運、幸運です。よかったね、キンちゃん」
キンジ「おい、それだけかよ。何か具体的なこととかわからないのか？」
白雪「え、えっと、黒髪の女の子と結婚します。なんちゃって」

ニッコリと笑って答えた白雪の表情は、どこか作り笑いっぽかった。

拓哉「次、俺頼む」
白雪「うん。じゃあ何占いにする？」
拓哉「ちょっと気になることがあってな。近い未来、どうなっているのか教えてくれ」

そういったあと「あと、やばそうなら、適当にごまかして後でこっそり教えてくれ。正直にな」と耳打ちした。

白雪「うん、じゃあ占うよ」

そう言って占いをする白雪。占い終わると、かなり険しい表情をしていた。

白雪「えーと、近い未来は、特に危ないことはないみたい」
拓哉「そうか」
アリア「はいじゃあ次はあたし！」

早くして欲しくてうずうずしていたアリアが机に乗り出してきた。

アリア「生年月日とか教えなくていいの？あたし乙女座よ」
白，拓「「へー、似合わないねー」」
アリア「二人揃って言うな！！！」

白雪は渋々札を並べ、ぺら、と一枚開き、

白雪「総運、ろくでもないの一言につきます」

あ、占ってないなこいつ。白雪ＧＪ

アリア「ちょっと！ちゃんと占いなさいよ！あんた巫女でしょ！」
白雪「私の占いに文句言うなんて……！許さないよ、そういうの」
アリア「――――闘ろうっての？」

ったく、また始まった。ここ数日こればっかだ。

白雪「アリアが戦いたいなら、私は受けて立つよ。星伽に禁じられているから使わなかったけど、この前はまだ、切り札を隠してたし」
アリア「あたしだって、切り札……えっと、二枚隠してたもんね！」
白雪「私は三枚」
アリア「じゃあ四枚！」
白雪「五枚」
アリア「いっぱい！」
拓哉「『静かにしろ』馬鹿どもが！」

黄金錬成（アルス＝マグナ）で『静かにしろ』と言ったため、二人はしゃべれなくなる。

拓哉「占いくらい平和にできんのかこの馬鹿どもは！」

アリアはしゃべれないから、べー、と舌をだして、部屋に閉じこもっていった。

白雪「アリアは可愛い子だけど、うるさいよね。それにキンちゃんのことも何もわかってない。男子はみんな可愛いって言うけど、私は……キライ」

ちょっと空気読んで、二人きりにさせてやるか……

――――ベランダ――――
拓哉「あ、そういやあいつに電話しないといけねーや」

そうして電話を取り出し、ひとりの番号を呼び出した。
3コールほどで電話がつながる。

拓哉「アーロンか？」
アー『あっ、拓哉さん！お久しぶりです』

この敬語で話しているのは、アーロン・モーガン。俺の一つ下ながらも黄金の夜明けの幹部を任せることができるほどに腕の立つやつだ。

拓哉「いつも敬語じゃなくていいと言ってるだろ」
アー『いいんです。拓哉さんのことを尊敬してますから』
拓哉「まあいいか。フェイリスから聞いてるだろ？俺が”魔女”に狙われていること」
アー『はい、聞いていますよ』
拓哉「さすがに俺一人じゃ太刀打ちできそうにないから2人ほどこっちに呼ぼうと思ってるんだが、お前、来ないか？」
アー『えっ？僕なんかでいいんですか？』
拓哉「ああ、お前はなかなか腕が立つからな。できれば武偵としてこっちに残って欲しいとも思ってるんだが」
アー『わかりました。じゃあ、そっちに行った際に武偵高に転入生として行かせてもらいます』
拓哉「おお、いいのか？」
アー『はい。拓哉さんの頼みとあらば』

拓哉「そうか、ありがとう。あと、その場にフェイリスはいるか？」
アー『はい、今アジトですのでフェイリスさんはすぐそこに』
拓哉「代わってくれないか？」
アー『わかりました』

数十秒ほど保留音が流れ、止まった。

フェ『今代わったわよ』
拓哉「ああ、フェイリスか。３０分ほど前の電話で、こっちに２人向かわせろと言っただろ？」
フェ『うん』
拓哉「それなんだが、そのうちの１人をアーロンにしといてくれ。あとアーロンは武偵としてこっちに残すつもりだ」
フェ『わかったわ。手続きはこっちで済ませておく』
拓哉「そしてもう１人なんだが、それは誰でもいい。そっちに任せる。じゃあ、こっちの用件は終わりだ。切るぞ」
フェ『うん。じゃあね』

電話を切り、部屋に戻る。すると白雪が手招きをしてきた。

白雪「さっきの占いの結果なんだけど」
拓哉「ああ」
白雪「誰かに狙われている。って出てるの」
拓哉「……やっぱり”魔女”か……」
白雪「心当たりがあるの？」
拓哉「ああ、結社の方から連絡があってな」
白雪「気を付けといたほうがいいよ」
拓哉「わかってる。こっちに結社の人間を向かわせるように頼んでおいた。それともう時間も時間だから、寝るぞ」

そう言って俺は、寝室で眠りについた。

To Be Continued!

食後の休息（後書き）

新キャラ登場しましたね

デュランダルが終わったら設定をうpしようと思います

珍しく一人な拓哉君（前書き）

今回は短いです

珍しく一人な拓哉君

今頃はキンジも白雪のところにいる。アリアも遠くから白雪の周りを見張っているだろう。つまり……

拓哉「キャッホォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！珍しく一人で楽だぜぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

と、いうわけで、うるさいアリアも、アリアと喧嘩する白雪も、白雪と一緒にいると面倒なことになるキンジもいない。完全に一人というわけである。

拓哉「何しようかな……」

prrr♪prrr♪

拓哉「？ったく、誰だよこんな時に……」

電話が掛かってくる。くつろいでいたのに邪魔をされて不機嫌だ。

拓哉「はいもしもしめんどくさいので切ります」

プチッ♪ケータイを切ってしまう。

prrr♪prrr♪

拓哉「はいもしもしもうかけてk―――――」

『なんで切るんですか！！！』

拓哉「その声……誰だっけ？」

『なんなんですか！この前番号交換したじゃないですか！』

拓哉「ん？　あ、ああ、間宮か……チッ」
あかり『なんで舌打ち！？』
　この間番号を交換したアリアの戦妹（アミカ）、間宮あかりである。いつ交換したのかって？　アリアと一緒にいたときにこいつが来てまぁそのときにな。ご都合主義というやつですよ。
拓哉「して、なんの用だ？　用件をいえそして電話を切れ」
あかり『なんでそんなに不機嫌なんですか！？』
拓哉「いやなんでもないよ。珍しく一人だからくつろげると思ってた矢先に電話が掛かってきたからって不機嫌になってないからね」
あかり『結局不満タラタラじゃないですか！』
拓哉「冗談だ。して用件は？」
あかり『えっと、友達に土屋先輩と番号交換したって知られちゃって、先輩に憧れてる友達が会わせてくれって……』
拓哉「用件はそれだけか。はい言ったとおり電話を切れ」
あかり『はい、ありがとうござ――――ってちっがーーーう！！！だからその友達と会ってあげてくださいってことですよーーー！！！』
拓哉「……めーんーどーくーせー……」
あかり『お願いですから会ってあげてください！！！』
拓哉「はぁ。分かったよ……で、何時ごろにどこに行きゃいい」
あかり『えっと、30分後に女子寮前でお願いします』
拓哉「OK。で、それだけか？」
あかり『はい。じゃあこれで』
　プチッ♪電話が切れて3秒。一息ついてこう思った。
　めんどくせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！

To Be Continued!

珍しく一人な拓哉君（後書き）

次回はそのあかりの友達と会う拓哉です
ＡＡを読んでる人は予想がつくんじゃね？
あの男っぽい子ですよ
まあその子とあかりと＋αが拓哉と会うということです
次回をお楽しみに

珍しく一人『だった』拓哉君。今は一年と……（前書き）

今回も短いです

珍しく一人『だった』拓哉君。今は一年と……

拓哉「よぉ」
あかり「あっ、土屋先輩。遅いですよ」
拓哉「ったく。久々に一人になれたってのに呼び出したのはお前だろーが」ハァ……

女子寮前。あかりに呼び出された拓哉はあかり＋αと会うことになったのだ。

拓哉「で、そっちは火野に佐々木だな」

火野ライカと佐々木志乃。わからない人は緋弾のアリアAA（ダブルエー）を。

ライカ「そうです」
志乃「はい」
拓哉「で、この間宮（バカ）が言うには俺に憧れてる奴がいるとか言ってたが、どっちだ」
ライカ「アタシです」
あかり「ちょっ、間宮って書いてバカって読まないでください！」
拓哉「火野か。なぜ俺に？」
ライカ「強いし、誰にでも優しいし、すごい人じゃないっすか」
拓哉「そか。で、佐々木はなんだ？」
志乃「いえ、私はあかりちゃんについてきただけです」
拓哉「ふーん。えっと、間宮はアリアの戦妹（アミカ）で佐々木はたしか白雪の戦妹だったか？で、火野はインターンの島麒麟の戦姉（アミカ）と。一年で戦妹（いもうと）持つのはスゲェな」
ライカ「先輩は戦妹も戦弟（アミコ）も取らないんすか？」
拓哉「めんどくさいしな。面白い奴なら考えるが」

志乃「あのー」
拓哉「どうした？」
志乃「実際の実力ってどのくらいなんですか？」

実力か。本気出したらイ・ウーを軽くつぶせるが、言わないほうがいいよなー。

拓哉「まあ、俺は普段本気を出さないが、アリアになら無傷で勝てるくらいか？」
あかり「アリア先輩に！？」
拓哉「だってあいつ、本気出したキンジにも勝てないと思うし、その本気出したキンジにも勝てる俺なら普通に勝てるだろ。まあ唯一俺と互角に戦えていたやつは金一さんくらいだろ」
ライカ「金一さんって……」
拓哉「そ、遠山金一。キンジの兄さんで俺の尊敬してる人。あの人は前にイギリスに行ったときに会ってな、一度闘ったんだよ。そしたらほぼ互角でな。今は死んでるが……（でも理子ごときに倒せる相手じゃないから生きてると信じてる）」
志乃「遠山先輩のお兄さんですか。確かニュースで批判されて……」
拓哉「そうだな」

沈みまくってるな……

拓哉「あー、もう湿っぽい話は終わり！」
ライカ「そうっすね」
あかり「そうだね」
志乃「そうですね」
ライカ「そうだ。土屋先輩、アタシと手合わせしてください」
拓哉「ん？いいぜ、本気で来い」

そうして俺と火野は手合わせをすることになる。

To Be Continued!

珍しく一人『だった』拓哉君。今は一年と……（後書き）

次回は拓哉ｖｓライカ

珍しく一人『だったはず』拓哉君。現在ｖｓ．ライカ（前書き）

ｖｓ．ライカです

珍しく一人『だったはず』拓哉君。現在ｖｓ．ライカ

拓哉「よし、始めるか」

俺は今、強襲科（アサルト）にいる。火野と手合わせをすることになったからだ。見物人は蘭豹、間宮、佐々木、その他生徒多数だ。なにやら『よっぽどなことがない限り一人で鍛える俺の闘いがみられるから』だそうだ。特に1年が多い。見物生徒の7割は占めている。

拓哉「で、何でやる？近接格闘戦（ＣＱＣ）か？近接銃撃戦（アル＝カタ）か？それともなんでもアリで行くか？」

ライカ「ルールは無用っす。なんでもアリで」

拓哉「ＯＫ。じゃあ蘭豹、頼んだ」

蘭豹「ああ、じゃあ始め！」

合図と同時にナイフを抜くライカ。対して俺は何の構えもしない。

拓哉「まずは実力を見させてもらう」

ナイフを振りかぶり斬撃を放つ。俺は距離を計り体をずらす。

ライカ「やっぱ当たんねーか」

拓哉「当然！」

俺は懐に手を入れ、不可視（インヴィジビレ）の銃弾を放つ。この技は普通連射性の良い銃じゃないと出来ないが、俺は金一さんが使っていたのを見て、ベレッタで練習していた。まあ使うのは今日が初めてだが。

周りに見えない銃弾。それがライカの脇腹に掠り、歓声が上がる。まあ、周りに見えない攻撃なんてしたらそうなるのは当然だが。

ライカ「痛っ。なんすかその技」
拓哉「手の内を簡単に教えると思うか？」
そう言いながら小声で黄金錬成（アルス＝マグナ）を使う。さすがにバレるのはヤバイから懐ですするが。
拓哉「『サバイバルナイフ４本』」ボソッ
そうすると右手にサバイバルナイフ四本が展開される。
拓哉「いくぜぇ」
しゅっと苦無（クナイ）のごとく飛ばす。
ライカ「うを！あっぶねぇ」
そういいながら突っ込んでくる。
拓哉「近接格闘戦（CQC）か？いいぜ、来い！」
ライカ「言われなくでもやってやるぜ！」
ライカは俺の腕を掴もうと手を伸ばす。対し、俺は軽く腕を捻ってかわし、床に腕を付いてカポエラキックを放つ。
ライカ「カポエラ！？」
拓哉「ｎｏｎ　ｎｏｎ♪これだけじゃねーぞ」
カポエラキックが避けられる。しかし足が地面つくと同時に飛び上がり、左足を軸に突撃槍（ランス）のごときソバットを繰り出す。

ライカ「今度はソバット！？」
拓哉「まだまだ行くぜ！」

ソバットが掠って怯んだため、地面を踏みしめ思い切りダッシュして距離を詰める。その直後に右肩と左足付け根に掌打を繰り出す。そのまま流れるような動きで腹部に双打掌を放った。

ライカ「グウッ」
拓哉「もう終わりか？」
ライカ「ハァ……ハァ……ぐっ……もうムリ」

片膝をつき息が切れているライカ。

拓哉「悪ぃ、少しやりすぎた」
綴「土屋くぅ～ん……」
拓哉「ゲッ綴、来てたのか」

綴にいろんな技を見られたとなるとめんどくさいことになる。

綴「あのサバイバルナイフはどうした～。お前の装備にサバイバルナイフはなかったはずだぞ～」
拓哉「（よりによってそれかよ）なんでもないです。ただ単に最近取り寄せて馴らしに使ってみただけです」
綴「じゃああの見えない銃撃は～？あの技は確か――――」
拓哉「それはここでは話せません。あいつに知れれば事です」
綴「それもそうか～。後で教務科（マスターズ）に来るように～」

ということで面倒ごとが増えてしまった。

拓哉「大丈夫か？」
ライカ「は……はい。なんとか……で、あの技はなんすか？あの見えない銃撃は」
拓哉「それはここでは話せない。こっちに来い」
ライカ「はい」

俺たちは強襲科から出て木陰で話すことにした。

ライカ「それで、あれはなんすか？」
拓哉「ああ、あれは不可視（インヴィジビレ）の銃弾といって、もとは金一さんの技だ。俺はあの技を見てからずっと練習してて。今日初めて使った。まあ普通ベレッタじゃ難しいんだがな。あとこの技のことは誰にも言うな」
ライカ「やっぱ土屋先輩すごいっすね」
拓哉「あー、火野。俺たちは一度闘（ヤ）りあった仲だ。拓哉でいいよ」
ライカ「へ？あ、ああわかりました拓哉先輩。アタシもライカでいいっすよ」
拓哉「わかった。ほんとは敬語も使わなくてもいいんだが、それは一部の教師や生徒に見つかると面倒なことになるからな。場合によっちゃ誤解されるし」
ライカ「そっすか。あの、これからも手合わせとか頼んでもいいっすか？」
拓哉「構わねーよ。ならアドくらい交換しといたほうがいいだろ。ほれ、ケータイ」

ライカはケータイを出し、赤外線でメアドを交換した。少し顔が赤いが……

拓哉「どうした？顔赤いぞ？」
ライカ「なっ、なんでもないっす」／／／

拓哉「そうか？何かあったら俺を頼れよ？俺は守ると決めたもんはきちんと守るから。勿論お前も守ってやるよ」
ライカ「」／／／

やっぱ顔赤いな。っと、教務科、もとい綴に呼び出されてたんだ。

拓哉「悪ぃ、綴に呼び出し喰らってんだ。俺はもう行くよ」
ライカ「あっはい。じゃあこれで」／／／
拓哉「じゃーな、ライカ」

そうして俺は、教務科を目指して歩き始める。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

珍しく一人『だったはず』拓哉君。現在ｖｓ．ライカ（後書き）

いやーインヴィジビレまで出しちった　てへぺろ♪
次回は綴と会談
インヴィジビレについて聞かれることでしょう

『完全に一人じゃなくなった』拓哉君。綴との会談（前書き）

今回は短いです

『完全に一人じゃなくなった』拓哉君。綴との会談

綴「して、土屋くぅ～ん……」
拓哉「……はい、なんでしょう……」
ここは教務科（マスターズ）。目の前には綴。ああ、ほんの1時間ほど前は平和だったのに……
綴「あれって完全に不可視（インヴィジビレ）の銃弾だよねェ……」
拓哉「はい……」
そう、ライカと闘ったときに使った不可視（インヴィジビレ）の銃弾を厄介な人に見られたのだ。
綴「あれは遠山金一くんの技だよねぇ？なんであんたが使えんのさ？」
拓哉「俺が12歳まで聖ピエトロ大聖堂で育ったのは知ってますね？そのあと15までイギリスにいたんですが、15歳になったばかりのとき日本に来たんですが、その時に金一さんに会いまして、一度手合わせをしました。その時に見たのが不可視（インヴィジビレ）の銃弾です。俺はあれを今まで練習してきて、今日初めて使いました」
綴「でもあれってベレじゃなかなか出来ないんじゃなかったけェ～……？」
拓哉「はい、そうです。でも不可能ではない。だからやったまでです」
俺は淡々と答える。
綴「でさぁ～、このことは遠山には黙っておきなよォ。面倒ごとは

嫌だからさ～」
拓哉「分かっています。まあ、時が来れば教えようとは思います」
綴「でぇ～」

そこで綴は一息付き、とんでもないことを聞いてきやがった。

綴「正直のところアンタのサバイバルナイフはなんなのさ？アンタの買ったものにサバイバルナイフなんてなかったはずだが？」
拓哉（やっぱこう来るか）

正直教えるのはやばい。なぜなら魔術のことを知られるとＳＳＲに飛ばされる可能性があるからだ。

拓哉「じゃあ、約束してください」
綴「なにを～？」
拓哉「ここで聞いたことは口外無用。誰にも言わないことと、ちゃんと信じること。そして俺を強襲科（アサルト）のままで居させること」
綴「わかったぁ……」
拓哉「あの技は、魔術です」
綴「魔術？」
拓哉「そう。クロウリー一族は魔術の発展した一族。その中でも俺は最強と言われています。１２歳の時に初代クロウリーである俺の曾々祖父の、アレイスター・クロウリーを超えました」
綴「して、あれは？」
拓哉「黄金錬成（アルス＝マグナ）。俺の編み出した魔術で、言葉一つで現実を歪めてしまう魔術です」
綴「なんだぁそれ？チートだろ～……実際にやってみなよォ」
拓哉「いいでしょう。『銃をこの手に』」

そう言うと手に銃が出現する。

綴「すごいじゃないかァ～。これはＳＳＲでもトップクラスにいけるだろうね～……」
拓哉「『消滅』。だからこそです。俺は金一さんと同じ強襲（アサルト）科にいたい。ＳＳＲに行きたくないから見せなかったんです」
綴「そうか。もういいよ戻ってぇ～……」
拓哉「じゃあちゃんと約束は守ってくださいね」
綴「ああ……」

こうして俺は教務科を後にした。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

『完全に一人じゃなくなった』拓哉君。綴との会談（後書き）

ほとんど綴との話でしたが次回はまだ決まっていません
お楽しみに

戦妹と強くなりたい理由

拓哉「そうだ、新しい武器取り寄せようかな」
教務科（マスターズ）から出てきた拓哉は、ケータイを取り出して電話をかけ出した。

拓哉「フェイリスか？」
フェ『拓哉？どうしたの？』
拓哉「いや、新しい武器を頼もうと思ってな」
フェ『新しい武器？何にする？』
拓哉「鋼鉄破りを（メタルイーター）一丁とＦＡＬを一丁、あとコルト・ピースメーカーを二丁頼む。あと買う際は俺の名義で頼む。後スキーズブラズニルを二つ送ってくれないか？」
フェ『わかったわ。で、転送場所は？』
拓哉「えっと、Ｘ－９９８０７７６　Ｙ－７６４４９８０　Ｚ－０７７８９６地点に頼む」
フェ『じゃあ今日の夕方頃に送っとくわ』
拓哉「さんきゅ。じゃあこれで」

電話を切り、部屋に戻るために歩いている。すると――――

「あの、土屋先輩」
拓哉「ん？えっと、君は？」
優「私は強襲科（アサルト）一年の青山優です」
拓哉「で、俺に何か用か？」
優「あの、私を戦妹（アミカ）にしてくれませんか？」
拓哉「へ？」
優「私の戦兄（アミコ）になってくれませんか？」

拓哉「うーん、俺ってかれこれ２５人くらい断ってんだよねぇ。みんなつまらない奴だったし。まず、ランクは？」
優「Ｅです……Ｅじゃダメですか？」
拓哉「まずランクは合格か。むしろランクが低いほうが教える楽しみがあっていい。次、武装は？」
優「コルトＭ１８４８とサーベルです」
拓哉「ドラグーンとサーベルか……把握した。じゃあ最後に何で俺の戦妹になりたいんだ？」
優「強くなりたいからです」
拓哉「ふーん、もっと詳しく頼んだ」
優「私は武偵である兄に守られてばっかりで、自分も誰かを守れる存在になりたいと思ったからです」
拓哉「うん、いい理由だ。採用！お前は今日から俺の戦妹だ」
優「ほ、本当ですか！？」
拓哉「ああ。俺に来る奴は、俺への憧れだとか、そんなくだらない理由で来る奴しかいなかったから気に入らなかったんだ。でもお前はちゃんと目標をもってる。だからだよ」
優「あ、ありがとうございます！！」
拓哉「じゃあ、これ。俺の部屋の鍵。まあ、今はキンジの部屋にいるから使ってないけど、勝手に出入りしていいぞ。あと、俺のことは名前でいい」
優「はい」

そこまで話していると――――

あかり「土屋先輩」
拓哉「間宮か」
優「あかりちゃん？」
あかり「あれ、優ちゃん？どうしたの？」
優「拓哉先輩の戦妹になったの」

あかり「えっ？土屋先輩、戦妹いらないんじゃなかったんですか？」
拓哉「単純に俺がこいつを気に入ったからだ。ほかの奴にはない意志の強さを持ってるからな」
あかり「そうですか……あっ、土屋先輩。さっきの闘いすごかったです」
拓哉「そうか？サンキュー」
優「そうですね。あの見えない攻撃とか格闘術とかすごかったです」
拓哉「まあ、一応俺はカポエラ、中国拳法、ソバット、マーシャルアーツ、ボクシング、柔道、ムエタイ、その他もろもろしてたしな」
優「そんなに！？」
拓哉「ああ。あっ、悪ぃ。そろそろ帰るわ」

そう言って俺は寮へ向かう。

寮に着いて自室に行く。すると、さっき頼んだ武装が届いていた。

拓哉「届いたか……」

そこには頼んでいた鋼鉄破り、ＦＡＬが一丁ずつ、コルト・ピースメーカーが二丁あり、その横に二つのカバンが置いてあった。
カバンの名前はスキーズブラズニル。北欧神話に登場する魔法の帆船をもとに作られた霊装で、その中にはどんな大きいものでも入れることができ、さらに一つのスキーズブラズニルに入れたものは他のスキーズブラズニルからも取り出せるというものである。オリジナルはかなりの大きさがあるそれだが、俺らの作ったコピーは小さくし、持ち運びを便利にした。しかし機能は変わらないという優れものである。
拓哉は片方のスキーズブラズニルに、鋼鉄破り、ＦＡＬ、コルト・

ピースメーカー、ベレッタを一丁ずつ入れ、普段持ち歩く銃をコルト・ピースメーカーとベレッタを一丁ずつにした。

拓哉「片方のスキーズブラズニルは隠しとかないとな……」

スキーズブラズニルはその性能から、悪用されるととんでもないことになる。片方を隠し、もう片方を持ち歩くということである。

キンジ「ただいまー」

拓哉「キンジが帰ってきたか……。結局くつろげなかったな……」

そう呟き、キンジを出迎えに行く拓哉だった……

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

シャワーとキンジの災難

今、キンジはシャワーを浴びている頃だ。俺は自分の部屋に帰ってきた。

拓哉「ふぅ。久しぶりの自分の部屋だな」

正確には帰ってきたのではない。様子を見に来ただけだ。魔剣（デュランダル）が解決するまでキンジの部屋にいたほうが都合がいいのだ。もういっそそこに住んでもいいかと思っているくらいである。

拓哉「そこそこ直ってきてるな。2，3週間くらいでかえって来れるか？」

そんなことを考えながら部屋を後にし、キンジの部屋へ向かう。

拓哉「よぉ、アリア」
アリア「あれ？拓哉なんでこんなところに？」
拓哉「自室がどうなってるか確認しに行っただけだ」
アリア「そう。じゃあ、さっさと帰りましょ」
拓哉「あぁ」

玄関前に立ち、扉を開けた。そこには――――

ア，拓「「ただいまー」」

――――そこには服を脱がしあっているキンジと白雪がいた。

拓哉「……お邪魔しましたー。ごゆっくりー……」

俺は、さっとアリアの目を隠し、引っ張りながら逆再生よろしく玄関から出てドアを閉めた。

アリア「……こんのぉぉぉ……」

アリアは俺の拘束を逃れ、玄関をバタン！と開け放ち、手をスカートの側面に突っ込む。

アリア「バカキンジぃいいいいーーーーー！！」

バスバスッ！とガバメントが、問答無用で．４５ＡＣＰ弾をブッ放した。

キンジ「うおっ！？」

キンジは飛び上がる。俺はただ苦笑いすることしかできなかった。出会った時と同じように、強猥魔だの、変態だの、死ねだの怒鳴りまくる。そのたびにバスバスッ！と足元を撃ちまくる。

アリア「あんたは！ほんとに！ケ、ケダモノ！ウジ虫！バクテリア！」

またまた始まりました評価下落。今度はドレイ→ケダモノ→ウジ虫→バクテリアだ。

白雪「ち、違うのアリア！負け惜しみはもうやめて！」

アリア「なんであたしが負け惜しみなのよ！」

白雪「あれはキンちゃんがムリヤリしてたんじゃないの！合意の上だったんだよ！」

アリア「ご、合意――――？」
白雪「そうなの、あれは私が自分から脱ごうとしてたの！だからキンちゃんは悪くない」
アリア「ぬ、脱ぐって、あ、あああ、あんたら一体何しようとしてたのよ！」

はい、もう空気ですね。もうどっか行っていいですか？

拓哉「めんどくさ……」

俺はあいつらが言い合ってるのを尻目に、コンビニに向かっていった。ドアの向こうでは、風穴だの、頭冷やせだの聞こえたが、無視してコンビニに向かっていく。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

結社の仲間

キンジは昨日、海に突き落とされたそうで、風邪をひいていた。今、キンジは寝ている。

拓哉「全く、気を付けとけや馬鹿が」

キンジの額に手を乗せ、そっと治癒魔術をかけておく。

拓哉「あんまパッと治ると怪しまれるからな……」

中途半端な治癒魔術をかけ、治りを早くしてやった。

拓哉「さぁガッコに行きますかね」

今俺は強襲科(アサルト)施設の中で、軽音の練習をしている。今まで俺は、練習をサボり続けてきたが、今日初めて来た。

決まった役割は、不知火がギター兼ボーカル。俺がベース兼ボーカル。キンジがエレキギター。武藤(バカ)がドラムだ。黄金(むこう)の夜明けにいたころに、趣味としてやっていた俺は、ベース以外の楽器もいろいろできる。

とりあえずブランクも長かったので、ベースをかき鳴らしてみる。まだ練習は始まっていないため、プロ顔負けのベースにみんなが注目する。久しぶりの感覚を取り戻してきた俺は、そんなギャラリーに気づきもせずノリノリでベースをかき鳴らし続ける。そして一区切りつけて一旦やめると、ギャラリーが騒ぎ出していた。

「嘘！？拓哉ってこんなにベース上手いの？」と強襲科女子
「もはやプロを名乗っても違和感ないわね」と諜報科女子（レザド）
「カッコイイわ……」と探偵科女子（インケスタ）

うっとおしく思っていると、練習が始まった。

拓哉「Ｉ'ｄ　ｌｉｋｅ　ｔｏ　ｔｈａｎｋ　ｔｈｅ　ｐｅｒｓｏｎ．．．」

一応ボーカルだが、練習ということで小声で歌う。

拓哉「……はぁ、女子も頑張ってんな……」

女子たちはポンポンを持って軽快に踊っている。
そんなこんなしているうちに練習も終わり、帰ろうとしたそのとき――――

「ねぇねぇ拓哉。なんでそんなにベース上手いの？」
「バンドとかしてたことあるの？」
「今度教えてくれない？」

女子からの、さっきのベースについての質問攻めが来た。てかさっきのスピードなに？俺が逃げる暇もなかったぞ。

拓哉「はいはい、一人づつ答えるから道を開けて。まず上手いかどうかは知らんが、趣味で楽器をやってたことがあるんだ。で、次はバンドを組んだことはない。あくまで趣味だった。で、次は答えはＮＯだ。俺にはやることがある」

次々と質問に答え、さっさと部屋に帰っていく拓哉だった。また、

最後の方に「拓哉～、まってよ～♪」と甘ったるい女子の声が聞こえてきたのは秘密だ。

拓哉「キンジ、風邪は大丈夫か？」

帰ってきて、キンジに聞く。まあ聞く必要はないんだが。

キンジ「ああ、なんとかな」

拓哉「はぁ、体調管理くらいしとけよ、バカ。ん？」

ｐｒｒｒ♪ｐｒｒｒ♪

キンジ「お前のか？」

拓哉「ああ、俺のだ。はいもしもし？」

電話に出ながらベランダに行く俺。

『ああ、拓哉先輩っすか？』

拓哉「ああ、ライカか。どうした？」

ライカ『今日のバンドの練習のことが学校中で噂になってたみたいっすよ。裏サイトにも書き込みがめっちゃあるんすよ。ベースがプロ顔負けとか、すごくかっこいいとか』

拓哉「俺がかっこいい？ありえねぇなｗｗｗ」

ライカ『……本当はカッコイイんすけどね……』ボソッ

拓哉「ん？何か言ったか？」

ライカ『ななななな、なんでもないっす。じゃあこれで』

拓哉「あ、ああ、じゃあな」

電話をきり、一息ついて眠ることにした。

拓哉「よぉ、キンジ。おはよう。今日は大丈夫だよな？」
キンジ「ああ」
拓哉「そか」

朝食をとり、準備をして学校へ行く拓哉。しかし投稿途中に呼び止められた。そこに居たのは――――

「おはようございます、拓哉さん」
「拓哉、久しぶり」

銀髪の少年と、金髪に褐色肌の少女だった。

拓哉「お、アーロンとクレールじゃねえか。久しぶり」
キンジ「誰だ？拓哉の知り合いか？」
拓哉「ああ、俺の仲間だ」

少年の名はアーロン・モーガン。学年が一つしただが黄金の夜明けの幹部の魔術師である。

少女の名はクレール・ショコヨトル。アステカの王様、モテウクソマ・ショコヨトル１９世である。使用する魔術はアステカ神話を応用した魔術である。ちなみに同い年だ。

拓哉「で、その制服を見るに、クレールも武偵になるのか？」
クレ「そう。フェイリスさんに拓哉と同じクラスになれるように手配してもらった」

拓哉「で、お前らの武装はなんだ？」
アー「フルティングは一応持ってきました。銃はモーゼルＣ９６を二丁です」
クレ「私はトラウィスカルパンテクートリの槍とベレッタＭ１９５１、あとサバイバルナイフを」
拓哉「まったく、神話級の武器を持ち込んできやがったよこいつら」

フルティングは北欧神話の剣。トラウィスカルパンテクートリの槍はアステカの神様が使ったものだ。

キンジ「あのさ、とらなんとかって奴はなんだ？」
拓哉「トラウィスカルパンテクートリ。アステカの破壊神だ。そいつは槍を使っていたんだが、その槍がこれだ」
キンジ「マジ？」
拓哉「マジモンだぞ。ちなみに金星の光を浴びると強くなる。なんたって、トラウィスカルパンテクートリは金星の神様だからな」
キンジ「そ、そうか。何か聞くのも馬鹿馬鹿しい……」
拓哉「そか。で、さっさと行かねーと間に合わないんじゃね？」
キンジ「まずい。さっさと行くぞ」

学校へ急ぐ拓哉一行だった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

結社の仲間（後書き）

はい、拓哉とアーロンが合流しました
しかも、もう一人というのはアステカの王様の子孫でした
次は転入初日です

転入初日（前書き）

短めです

転入初日

拓哉「そうだ。お前ら、学科は？」

拓哉はアーロンとクレールに聞く。

アー「どちらも強襲科（アサルト）です」

拓哉「へぇ、なら一緒か……で、”魔女”についての報告を頼む」

クレ「ヤツは拓哉の周りを嗅ぎ回っているわ。拓哉の魔力の周りにヤツの魔力が常にあったから」

アー「ちなみに魔力の強さは強いものではありませんでした」

拓哉「魔力を抑えているとは、相当な奴だな」

魔力は相当な腕がない限り自力で抑えるのは難しいのだ。特別な道具でも使わなければ、簡単に抑えられるものではない。

拓哉「ま、そろそろ強襲科（あっち）行こうぜ。遅れたら蘭豹がウザイ」

ということで三人で強襲科へ行く。着いてそうそう二人は自己紹介をさせられた。

アー「イギリスから来ました。1年A組のアーロン・モーガンです。ランクはAです。よろしく」

一年でA。そう知った途端にみんなが騒ぎ出した。

「えっ、一年でA！？すごい！！」

「2年でも数人しかいないのに！」

「後で手合わせお願い！」

そんなふうに騒ぐ生徒共（バカ）。次はクレールだ。

クレ「クレール・ショコヨトル。2年A組。ランクはSです。よろしく」

女子ということで、男子共（エロヤロウ）が騒ぎ出す。

「褐色美人！金髪！スタイル抜群！」
「しかもSランクと、強い！」
「クレール様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

馬鹿なことを言うな。しかも三人目は精神科に行くことをオススメします。

蘭豹「こいつらのことは土屋に頼む。知り合いみたいやからな」

と、蘭豹が行った瞬間、余計に騒がしくなる。

「土屋、またお前か！」
「少しは女を俺によこせ！」
「土屋君が一緒なんて、最高じゃないの！！」
「土屋君×アーロン君……いいわ……！」

おい、最後の奴、一回死んで来い。

土屋「おい、蘭豹よぉ。めんどくせぇことしてくれてんなぁ。（あのことばらしてもいいのか？）」
蘭豹「仕方ないやろ。土屋に頼めって言われたんやから。（いや、マジでばらさないで）」

結局世話を押し付けられて、面倒ごとが増えるだけだった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

仲違い（前書き）

今回も短めです

仲違い

俺は今、アーロンとクレールに学校を案内しながら説明をしたところだ。あと行っていないのは屋上くらいなのだが、屋上についたら大変な状況になっていた。どういう状況かというと、アリアとキンジの喧嘩である。魔剣（デュランダル）はいないだの、貴族（おまえ）はズレてるだの言うキンジと、白雪の服を脱がしただのと言うアリア。

挙句の果てには……

キンジ「いもしない敵が迫っているなんて、信じられるか！主張があるなら証拠を出せ！それが武偵だ！何度でも言ってやる！敵なんていねえ！」

この言葉にキレたアリアはバカバカと言いながら、銃をぶっぱなして、貯水タンクに『バ　カ　キ　ン　ジ』と書いてるし。

クレ「……あー、拓哉。どうするのコレ……」

拓哉「確かに、あの二人がいないと魔剣（デュランダル）はあいつらに任せるつもりだったのになぁ……」

アー「魔剣（デュランダル）は話によるとジャンヌ・ダルク３０世と聞いています。しかも聖剣デュランダルも持っていると……」

拓哉「ジャンヌか。敵ではないんだが、聖剣を持っているしな……」

デュランダル　（Ｄｕｒａｎｄａｌ）　。フランスの叙事詩『ローランの歌』に登場する英雄・ローランが持つ聖剣の名前。イタリア語読みでドゥリンダナ　（Ｄｕｒｉｎｄａｎａ）　とも読まれ、デュランダーナとも呼ばれる、不滅の刃。

『ローランの歌』の作中では「切れ味の鋭さデュランダルに如くもの無し」とローランが誇るほどの切れ味を見せる。　『ローラン

の歌』では、ロンスヴァルの谷で敵に襲われ瀕死の状態となったローランが、デュランダルが敵の手に渡ることを恐れて大理石に叩きつけて折ろうとするが、剣は大理石を両断して折れなかったというエピソードが有名。
それほどに切れ味も良く、丈夫な剣なのだ。エクスカリバー並みの聖剣でもないと、勝つことは難しいだろう。

拓哉「エクスカリバーを持って来たいところだが、今は初代（クソヤロウ）ホームズが持っていやがるしな。早くしないと白雪も危ねぇぞ」

”魔女”のこともあるために、一緒にいることもできない。こんな状況下にいることは危ないのだ。

拓哉「さて、こんな状況でどう出る、”魔女”よ」

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

花火大会。そして、"魔女"とのFirst Conta

ゴールデンウィーク最終日。キンジは花火大会に行くそうだ。俺は部屋で一人寝ている。

prrr♪prrr♪

拓哉「ったく、誰だよ」

拓哉は電話を取り、通話ボタンを押す。

拓哉「もしもーし」
ライカ『た、拓哉先輩』
拓哉「ああ、ライカ。どうした？」
ライカ『一緒に花火大会に行きませんか？』
拓哉「花火大会？まぁ暇だからいいけど」
ライカ『じゃあ、女子寮前で待ってます』
拓哉「おう」

プチッ♪

電話を切り女子寮に向かった。

拓哉「悪ぃ、待ったか？」
ライカ「い、いや全然待ってないっすよ／／／」
拓哉「ん？顔赤いぞ？」
ライカ「いやいや、なんでもないっす」
拓哉「そうか？じゃ、行くか」
ライカ「はい」

俺たちは花火大会に向かった。まぁウォルトランドには入らないで海岸で見てるんだが。

ライカ「綺麗っすね」

拓哉「そうだな」

花火に見とれるライカ。俺はそんなライカを見て微笑んでいた。そこで変な気配を感じた。

拓哉「ライカ、俺の後ろにいろ」

ライカ「へ？」

拓哉「いいから。おい、居るんだろ”魔女”。さっきから周りに人がいない。お前が人払いをしたんだろう」

魔女「あはは、やっぱ気づいちゃったかぁ」

ライカ「ちょっ、誰っすかアレ」

拓哉「黙ってろ。『アーロン、クレール。ウォルトランド近くの海岸に来い。”ヤツ”だ』」

通信魔術でアーロンとクレールを呼ぶ。

拓哉「テメェ、何が目的だ」

魔女「勿論テメェを殺すことだよ！」

拓哉「チッ、語る意味無しか」

俺はコルト・ピースメーカーで不可視（インヴィジビレ）の銃弾を6発放つ。

魔女「なにぃ、それが効くとでも思ってんのぉ？」

拓哉「思っちゃいねぇよ。小手調べってやつだ」

俺は某ヘタレ魔術師のようにルーンカードを取り出し、ばらまく。
魔女「へぇ、ルーン魔術ねぇ」
拓哉「いくぜ『灰は灰に、塵は塵に。吸血殺しの紅十字』！！」
吸血殺しの紅十字を放つ。２本の炎剣が十字を描いて”魔女”に迫る。そして爆発を起こし辺りを巻き込んでいく。
魔女「危ない危ない」
拓哉「何っ！？」
魔女「まったく、アレイスターを超えたとか聞いたけど、所詮この程度か。じゃ、死ね」
拓哉「ぐはぁ！」
俺は”魔女”の正体不明の攻撃を受ける。そしてその場に倒れこんだ。
アー「拓哉さんっ！」
クレ「拓哉！」
魔女「チッ、増援が来やがった。逃げるか」
ライカ「ま、待てっ」
拓哉「……やめろ、ライカ。お前が行っても、死ぬ、だけだ……」
ライカ「っ」
拓哉「……悪ぃ、アーロン、クレール。助かった……アーロン、クレール、病院の、手配を、頼む……ぐっ……」
そこまで言ったところで拓哉は意識を失った。
ライカ「クソッ、アタシに力がなかったから！！！」

ライカの叫びは、ただ夜の闇に飲まれていくだけだった。

To Be Continued!

病院にて

拓哉「はっ！？」

俺は目を覚ました。

拓哉「クソッ！本気を出せなかったからな……」
ライカ「拓哉先輩！！」
拓哉「ライカか……悪い、お前がいたら俺が本気を出したときに巻き込んじまうから本気を出せなかった」
ライカ「いいんです。拓哉先輩が生きていただけで」
拓哉「俺がそう簡単に死ぬかよ」

ライカが俺に抱きついている。そんな時にいきなり病室のドアが開いた。

キンジ「おい、拓哉。大丈夫か？」

キンジの視線→俺とライカ。

キンジ「……ごゆっくりー……」
拓哉「ちょっ、まって！誤解だ！」

キンジは俺たちの状況を見て、冷たい視線を向けて戻っていこうとした。しかし俺はそれを止める。

キンジ「で、お前らは一体何があった？」
拓哉「ちょっとな」
キンジ「ちょっとじゃないだろう！何があった！？」

拓哉「いいのか？これを知ればお前も必然的にこっち側の人間になるぜ？ライカ、お前もだ。どうせ知りたいんだろう？」
キンジ「構わない」
ライカ「アタシも構いません」
拓哉「もう引き返せないからな。じゃあ教えてやるよ。魔術世界の全てを」

そう言って俺は語りだす。

拓哉「まず、キンジは知っててもライカは知らないことからだ」
キンジ「魔術の存在……」
拓哉「そう。魔術は超能力（ステルス）とは違う。超能力は精神力を使って超常現象を起こす力だが、魔術師は自身の生命力を魔力に変えて、全身を巡らせている。詠唱などによって魔力に刺激を与えることで超常現象を起こす力だ。魔術師が魔力を使いすぎると疲労してしまう。それは魔力が足りなくなることで生命力から魔力を生成し、生命力が低下するせいだ。また、ルーンや霊装を使った魔術の仕組みは、魔術師を電源電圧と例えると、ルーンや霊装はいわゆる変圧器だ。大きすぎる力を抑えたり、小さな力を大きく増幅したりするものだ」
ライカ「そんなものが……」
拓哉「そして、ここからはキンジも知らない魔術世界のことだ」

キンジとライカはゴクリと喉を鳴らす。

拓哉「魔術は世界各国にある。白雪のような日本魔術。いわゆる巫女さんだ。中世ヨーロッパの錬金術。ルーン魔術。中国の煉丹術。北欧神話をもとにした魔術。ギリシア神話をもとにした魔術。アステカ魔術などだ。俺が主に使うのは北欧神話とギリシア神話だ。クレールはアステカ魔術。アーロンは北欧神話だ。そして、俺やクレール、アーロンが所属する組織、黄金の夜明けという魔術結社だが、

俺はそのリーダーだ。黄金の夜明けは一国をつぶせるほどの強大な力を所有する。クレールやアーロンはその幹部だ。この組織は昔、俺の曾々祖父さん、アレイスター・クロウリーから貰い受けたものだ。そして、ここからが重要だ。黄金の夜明けの他に、魔術結社は多数存在する。俺を狙う”魔女”はそのある組織の刺客か、もしくはリーダーだ。俺は魔術世界では超有名だからな。なにせあの世紀の大魔術師の五世で、現世界最強の魔術師で、魔術世界での賞金首みたいなもんだからな。初代はいろんな魔術師の恨みは買ってたし、俺も暴れまわったからだ」

キンジ「マジかよ……」

拓哉「マジもマジ、大マジだ。俺の組織は様々な国家から依頼を受ける。場合によっちゃ暗殺や処刑などもだ。魔術世界ではそれが当たり前。殺すのを躊躇えば一瞬で自分が殺されるからだ」

ライカ「でも、武偵憲章９条が……」

拓哉「それでもだ。たとえ武偵をやってる魔術師がいても魔術結社が犯した殺人はすべてもみ消されるか情報が改ざんされる。あらゆる国家が関与してな。もしもそれに文句を言えば国家に仇なすものとして処刑される。だが俺は今まで殺さなかった。殺したフリをして組織に引き入れたり、情報を改ざんして逃がしていたからだ」

キンジ「つまり武偵憲章は破っていないと……」

拓哉「そういうことだ。俺が本気を出さない理由もついでに教えてやろう。俺が本気を出すと、周りを巻き込んでしまうからだ。例えば自分の身体に大天使を堕ろすとしたら、制御を失えば暴走してしまうんだよ」

ライカ「それは……」

拓哉「どうだ？こんな化け物、嫌いになっただろう？」

キンジ「そんなわけねぇだろ！！！」

ライカ「そんなわけありません！！！」

拓哉「お前ら……」

ライカ「拓哉先輩は化け物じゃない！ただの優しい先輩じゃないで

すか！」
キンジ「そうだ。お前は俺の親友だ！化け物なんかじゃねぇよ！」
拓哉「そうか、ありがとな。クレール、アーロン、居るんだろ？」
アー「気づいてましたか」
クレ「気づいてたのね」
拓哉「確かに魔力も気配も感じなかったが、お前らのことだからいると思ってな。こいつらに魔術を教えるが、構わないよな？」
キンジ「おい、俺らに魔術が使えるのか？」
拓哉「使えるよ。ただ、生命力から魔力を生成する方法を覚えればな」
キンジ「マジか……」
拓哉「いいか、お前らは護身程度の魔術を覚えてもらう。ただし魔術世界に関与することや、魔術が使えることを他人に教えることはするな」
キンジ「わかった」
ライカ「わかりました」
拓哉「じゃあ、アーロン、クレール。俺に治癒魔術をかけろ」
アー「わかりました」
クレ「わかったわ」

数分ほど経つと体の痛みも消え、傷もなくなった。

拓哉「よし、治ったか。魔術については明日から教えていく。いいな」
キンジ「ああ」
ライカ「はい」

こうしてキンジとライカの魔術師化計画が始まった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

魔剣と"魔女"

アドシアードが始まった。俺はキンジとライカに魔術を教えた。あいつらは飲み込みが早く、１時間で魔力生成を覚えてしまった。
俺は基本となる人払いと、役に立つ治癒魔術、転移魔術、通信魔術を最初に教えたが、これも3時間で覚えてしまった。
次に、護身程度の魔術だが、まずは才能を図るためにあらゆる魔術をやらせた。結果どちらもルーン魔術の才能があるようだった。キンジは『風』を、ライカには『水』を重点的に教えた。
結果、攻撃魔術はキンジの方が才能があり、治癒はライカの方が才能があった。雑魚魔術師なら一人で倒せるほどに成長した二人だった。

拓哉「ライカ、キンジ、これでお前たちも一人前の魔術師だ。お前らは黄金(うち)の夜明けに引き入れたいほどに才能があった。おすすめはしないしむしろやめて欲しいくらいだが一応聞いておく。入る気はあるか？」
キンジ「悪い、考えさせてくれ」
ライカ「アタシにも時間をください」
拓哉「そうか。まあ今はアドシアードを楽しもうや」
キンジ「そうだな」
ライカ「アタシはあかりたちのところに行きます」
拓哉「”魔女”に気をつけろ。何かあったら転移魔術で逃げろ」
ライカ「はい」

そう言ってライカはどこかへ行ってしまった。

拓哉「じゃあ、バンドもあるし、武藤たちのところに行くか。ところで白雪は？」

キンジ「どうせアリアが見張ってるだろう。あいつなら大丈夫だ」
そんな話をしていると、はぁはぁと息を切らしながら武藤が走ってきた。
武藤「おい、キンジ、拓哉。ケースD7だ！星伽さんが失踪したらしい」
失踪。そう聞いてキンジと俺は凍りつく。
拓哉「ちくしょう、こんな忙しいときに。キンジ、行くぞ！」
俺とキンジは息を切らしながら走る。
ケータイが鳴り、キンジは電話に出る。
レキ『キンジさん。レキです。今、あなたたちが見える』
レキか……
レキ『D7だそうですね』
キンジ「ああ」
パリン！と街灯が一つ割れ、その音にキンジは冷静さを取り戻した。
レキ『キンジさん。落ち着いてください。冷静さを失えば、人は能力を半減させてしまう。今のあなたがまさにそれです。落ち着きましたか？』
キンジ「ああ」
レキ『地下倉庫（ジャンクション）に行ってください。おそらくそこに白雪（クライアント）さんがいる

はずです』

俺らは地下倉庫に来た。火薬庫のため、銃が使えない。俺は黄金(アルス)錬成(マグナ)でロングソードを呼び出し、キンジはバタフライナイフを構える。なぜ日本刀を使わないかというと、デュランダル相手じゃ力負けするために、壊れて構わない剣を使うためである。

奥に進んでいくと白雪がいた。

白雪「どうして私を欲しがるの、魔剣(デュランダル)大した能力もない……私なんかを」

やはりデュランダルだった。

白雪と魔剣はしばらく言い合っていた。キンジが欠陥品だと言われたときは、殺意を抑えるのに苦労した。

魔剣「私(フォローミー)に続け、白雪。お前のいるべき場所はこんなところではない。私が今から連れていってやる。――――イ・ウーにな」

イ・ウー。武偵殺しを使って金一さんを殺した犯罪集団。黄金の夜明けも危険視している組織。

キンジはイ・ウーの名を聞いてカチカチとバタフライナイフを鳴らしていた。

魔剣「それともう一つ。今回のことにいくつか誤算があった。土屋拓哉なる武偵も一緒にいたこと。そして、お前の正確を読み間違えていたことだ」

白雪「なんのこと……？」

魔剣「『なんの抵抗もせず自分を差し出す代わりに武偵高の生徒、

そして誰よりも遠山キンジたちには手を出さないで欲しい』お前はたしかにそう言った。だがその裏で、お前は奴らを読んでいる」

そう言って俺らの方に向けていう魔剣。いやー、この声まさかそういうこととは。

拓哉「おい、アリア。居るんだろう？」
アリア「ちょっ、なんでばらすのよ」
拓哉「ちょっと、俺にはやらなくてはならないことがあってな。で、聖剣デュランダルを持っているということだから魔術の名家の者かと思ったら、まさかテメェとはな。ジャンヌ・ダルク３０世」
ジャ「ほう、気づいていたか。だがただの武偵が私に勝てるとでも？」
拓哉「そうじゃねぇよ。俺はただの武偵でもないし、テメェに言いたいこともそういうことじゃねえ。いいか、テメェも聞いたことがあるだろう？世界最強の魔術師、クロウリー五世の名を」
ジャ「まさか、お前がクロウリー五世だと？」
拓哉「ああ、そうだ。あと、”魔女”出てきやがれ。居るんだろうが」
魔女「あはは、今度もやっぱ気づいてたか」
拓哉「意図的に気づかせただろうが。魔力がだだ漏れだ」
魔女「どーかなー？」
拓哉「アリア、キンジ、白雪、ジャンヌ。今から広いところに魔術で転移するぞ」

そう言って俺はとある空き地に転移した。

ジャ「ここは……？」
拓哉「ちょっとした空き地だ。おい、四人とも、危険だから下がってろ。なぁ”魔女”マーガレット・マリー２７世」

ジャ「どういうことだ」
拓哉「世界最強の魔術師の戦いに巻き込まれたくなかったらどいていろということだ」
マリー「あはは、滑稽ね。弱者を守れば罪が消えるとでも？」
拓哉「罪は消すもんじゃねぇ、背負うもんだ。『アーロン、クレール。俺の魔力をもとに転移してこい。ライカを連れてな』」
マリー「世界最強の魔術師とか言って、助けを呼んでるの？笑っちゃうわねぇ」
拓哉「ちげぇよ。あくまでもギャラリーだ」

俺はルーンカードをばらまく。

拓哉「『この場は我が領域とす』」

詠唱を済ませる。

拓哉「さぁ、人払いは終わったぜ。ショウタイムだ！」
マリー「今度は殺してやるわ！『今よりこの場は我が領域。闇に飲まれし場所、我が巣となりし』」

マリーは詠唱を済ませると、辺りが夜のように暗くなった。
そしてそのまま、花火大会のときに使った正体不明の攻撃をする。

拓哉「がぁ！」
キンジ「拓哉！」
マリー「あはは、やっぱり大したことないじゃない」
拓哉「まてよ、我が領域、暗い、夜、正体不明の攻撃。そうか、分かった」
マリー「死ねぇ」

もう一度あの攻撃をしようとするマリー。しかし――――
拓哉「お前の攻撃、もう見切った。『我が魔力は光となりし。その光は小さな幸せを温める大きな炎となり』」
詠唱をすると俺の体が光り出す。
マリー「なにっ、この攻撃を見破っただと！？」
拓哉「そう、お前は暗い場所では見えなくなる攻撃をしていたのだろう？そして、俺があの時攻撃したのは夜の闇による幻影。つまりお前は光ある場所では弱い」
マリー「なめるな！『炎の巨人はその熱で民を苦しめる』」
マリーの手から大きな火球が放たれる。
拓哉「甘い！『波、壁となりて全てを包み込め』」
しかし火球は水の壁に阻まれ沈静化する。
マリー「クソッ、『錬金』！」
拓哉「今度は肉弾戦か。ロングソード仕舞わないでよかった」
マリーはメイスを錬成する。
マリー「このっ、死ねぇ」
拓哉「甘ぇんだよこら」
剣でメイスをいなす。
アー「拓哉さん！」

クレ「拓哉」
ライカ「拓哉先輩！」

転移魔術で例の三人が転移してきた。だが……

拓哉「手ぇ出すんじゃねぇ。キンジたちと隠れてろ！『炎を纏いし剣、敵の傷口を焼く』」

詠唱をすると剣から炎が巻き上がる。

拓哉「柔けぇメイスで俺が止められるわけねぇだろぉが！！！」

そのまま剣でメイスを焼き切った。メイスは土に還ってしまう。

マリー「クソ！『我が手に宿り――――』もごっ」

拓哉は剣の柄を口の中に突っ込む。これで詠唱は出来なくなってしまった。

拓哉「終わりだ、マーガレット・マリー」
マリー「ゴホッ！クソ、殺せ」
拓哉「殺しはしない。お前は殺されたいのかよ」
マリー「殺されたいわけないだろうが。だが魔術世界は殺しが当たり前だろうが」
拓哉「俺は一度も殺してねぇ」
マリー「嘘をつくな！」
拓哉「嘘なんざついてねぇよ。いつもこういう状況の時は全て俺の組織に招き入れてたんだよ。ということで、お前の組織に戻ればお前は殺されるだろう。殺されるか、俺の組織に入るか、どちらがいい」

マリー「じゃあ、お前の組織に入るよ。殺されたくはねぇからな」
拓哉「なら、お前は今日から黄金の夜明けの一員だ。歓迎するぜ。ということだ。分かったなアーロン、クレール」
アー「はい」
クレ「ええ」
拓哉「で、そっちに隠れているキンジたちももう出てきていいぞ」
アリア「す、すごかったわ」
キンジ「あれが、マジモンの魔術師の戦いか」
ライカ「武偵とは比べ物にならないくらいにすごかったな」
拓哉「で、ジャンヌ・ダルク。お前、俺と戦って勝つ気はあるか？」
ジャ「ない。お前には勝てないだろう」
拓哉「俺の予想だが、お前は？種超能力者（クラス？ステルス）。魔法使（マツギ）いだろう？」
ジャ「ああ、そうだ。それがどうした？」
拓哉「お前イ・ウーを抜けて黄金の夜明けに入らないか？魔法使（マツギ）いなら問題はないし、魔術は俺が教えてやる。勿論魔剣のことは償ってもらうが……」
ジャ「いいだろう。私も入らせてもらう」
拓哉「ということだ。帰るか」

俺たちはジャンヌを逮捕し、そのまま武偵高に戻っていった。
魔女はフェイリスに頼んで武偵高の生徒ということにしておいた。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

打ち上げ

アドシアードの打ち上げだが、俺とキンジとアリアと白雪の四人でした二次会のとき、白雪もドレイにするだとかなんだとか。
して今は、俺、キンジ、ライカ、アーロン、クレール、マーガレット・マリーの魔術師勢による三次会である。場所は修理が終わった俺の部屋。
部屋のテーブルの上には、２Ｌや１．５Ｌサイズのペットボトルジュースが５，６本と、菓子が大量に置いてある。

拓哉「さぁ、朝の返事を聞こうか。キンジ、ライカ。おすすめはしないが、黄金の夜明けの一員になるつもりはあるか？」

そう、黄金の夜明けへの勧誘である。今日一日で既に２人増えている。

キンジ「俺は、入るよ」
拓哉「キンジは入るのか……ライカは？」
ライカ「アタシも、入ります。もっと強くなりたい」
拓哉「そうか。正直止めておいて欲しかったが、お前らが決めたんならしょうがない。今よりお前らは黄金の夜明けの一員だ。歓迎するぜ」

結局今日一日で四人もメンバーが増えた。

拓哉「さぁ、ここからが本題だ。俺は一時的にイギリスに帰国する。黄金の夜明けをフェイリスに任せっきりだったからな。新しく仲間になったお前らは挨拶としてイギリスに一緒に来てもらうが、問題はないか？」

キンジ「いつからだ」
拓哉「明後日の夜出発」
キンジ「いきなりだな、オイ。まぁ構わないが」
ライカ「アタシも構いません」
マリー「私も構わないわ」
拓哉「そうか、ならいい。で、お前らの友人を数人連れてきてもいいぞ。俺も優を連れていくし。勿論黄金の夜明けのアジトに入れられないから俺の家に待機してもらうことになるが」
キンジ「じゃあ、アリアと白雪でも連れていくか」
ライカ「アタシもあかりと志乃を連れていこうかな」

と、いうことで、イギリスに行くことになった。

拓哉「じゃあ今のうちに大丈夫か連絡を入れておけ」
キンジ「ああ」
ライカ「はい」

二人ともメールを打ち始め、俺も打つ。
すると、ライカの方は一着即返ってきた。おそらく間宮だろう。
そして、数分ほど経つと、すべて返ってきたようだ。優は問題なく行けるそうだ。

キンジ「アリアは構わないそうだ。だが白雪はＳＳＲの合宿みたいなので行けないと」
ライカ「こっちも大丈夫みたいです」
拓哉「そうか。集合場所だが、明後日夕方に俺(ここ)の部屋で。あとは車輌(ロジ)科においてある俺のジェット機で行く。まあ自家用ジェットみたいな小さいやつだがな」
キンジ「わかった」
ライカ「わかりました」

マリー「わかったわ」
拓哉「よし、用も済んだところで、黄金の夜明け新メンバー歓迎会を始めるぜ！新メンバー追加を祝って、乾杯！」
全員『乾杯！』
拓哉「よし、今日の会費はすべて俺持ちだ！好きなだけ飲んで食って騒げ！夜が明けるまで楽しむぜ！足りないものがあれば言え！俺が黄金錬成（アルスマグナ）でなんとかしてやらァ！」
ライカ「よっ、拓哉先輩太っ腹！」
アー「拓哉さん。迷惑にならない程度にしてくださいよ」
マリー「お言葉に甘えて騒がせてもらうわ」
キンジ「こんなチャンス滅多にないんだ。久々に騒ぐか！」
クレ「拓哉！酒頼むわ。久々に飲み比べするわよ！」
拓哉「おいおい、俺が酒に強いこと知ってて挑んでるのかよ。また返り討ちだぜ？」
クレ「今度こそ勝つのよ！」
拓哉「よっしゃ、いっちょやるか！」

ということで俺たちは朝まで騒ぎ、酒もあったために俺以外の奴らはみんな酔っ払っていた。

To Be Continued!

打ち上げ（後書き）

さぁ、アドシアード終了
いよいよイギリスへ！

キャラ設定？（前書き）

魔剣と”魔女”で新しく登場したオリキャラの設定を公開します

キャラ設定？

〜名前〜
フェイリス・ミダース

〜体格・見た目〜
身長１５８ｃｍほどで、体重は頑なに教えようとはしない。
スリーサイズは不明だが、本人は「拓哉にしか教えるつもりはないわ」とコメントしている。
スタイル抜群の金髪ロングで美人。

〜性格〜
おとなしい。
しかしキレるとすごいと黄金の夜明けのメンバーはコメントしている。
曰く、絶対に怒らせるな、ということである。

〜出身・生い立ち〜
出身はギリシャのアテネ。
イギリスに来たときに、とある魔術結社にミダス王の末裔であることを知られて連れ去られてしまう。しかし、拓哉が救いだし、黄金の夜明けに引き入れた。

〜その他〜
ギリシア神話の神、ミダス王の末裔。
拓哉がこの組織のリーダーになったばかりの頃、とある魔術結社に利用されていたところを救い出した少女。そのまま黄金の夜明けの一員となり、ずっと拓哉を支えてきた。拓哉に惚れているようだ。
年齢は拓哉たちの一つ上だが、拓哉に最も信頼されている魔術師。

使用する魔術は錬金術がメインだが、その他の魔術もピカイチである。

〜名前〜
アーロン・モーガン

〜体格・見た目〜
身長は１６２ｃｍほど。銀髪の美少年。

〜性格〜
曲者（くせもの）の多い黄金の夜明けには珍しい常識人。
基本的に切れたフェイリスを止めるのはアーロンか拓哉。

〜出身・生い立ち〜
出身はイタリアのローマ。
４代目クロウリー、つまり拓哉の父の友人の息子で、魔術は生まれつき才能があったようだ。

〜武装〜
モーゼルＣ９６を二丁と北欧神話に出てくる魔剣、フルティング

〜戦い方〜
銃で牽制しつつ魔術で攻撃。フルティングは最終手段で、殺すつもりで行くときに使う。

〜その他〜
拓哉にとても憧れている。

拓哉の一こ下でありながらも、黄金の夜明け幹部を任せられるほどに腕が立つ。
使用する魔術は北欧神話をもとにした魔術が主。治癒も得意。
強襲科（アサルト），ランクＡ

〜名前〜
クレール・ショコヨトル

〜体格・見た目〜
身長は１５１ｃｍ。
金髪に褐色肌の美少女。
スタイルは良くなく、いわゆるペッタンコ。

〜性格〜
案外常識人だと思ってしまうが、実際はズボラで怠け者。

〜出身・生い立ち〜
出身はメキシコ。
アステカ文明を受け継ぐ少女。
アステカの君主モウテクソマ・ショコヨトルの子孫。

〜武装〜
ベレッタＭ１９５１，サバイバルナイフ，トラウィスカルパンテクートリの槍
トラウィスカルパンテクートリの槍とは、アステカ神話に出てくる神様が使った槍である。
ちなみに本物。

〜戦い方〜
基本的にベレッタだけで戦う。サバイバルナイフは牽制に使う程度。
槍は魔術を使うときに使う。

〜その他〜
黄金の夜明けの幹部。
使用する魔術はアステカ魔術。
拓哉と同い年だが、酒が大好き。
強襲科，ランクＳ

〜名前〜
青山優

〜体格・見た目〜
身長は１５８ｃｍ
黒髪ショートの美少女で、スタイルもそこそこ。

〜性格〜
優しく、温厚な性格。

〜出身・生い立ち〜
不明

〜武装〜
コルトＭ１８４８とサーベル

〜戦い方〜
任務は全てほかの人のカバーで成り立っているため、ちゃんと戦えるのかさえ不明。

〜その他〜
武偵である兄に守られてばかりの状態が嫌で武偵になる。
強襲科，ランクEであったため、強くなりたいと思い、拓哉の戦妹（ミカ）になる。

〜名前〜
”魔女”／マーガレット・マリー27世

〜体格・見た目〜
金髪ショート。スタイル抜群。身長は161cm

〜性格〜
仲間には優しいが、敵には冷酷。

〜出身・生い立ち〜
出身は不明。小さな頃から魔女宗という魔術結社にいた。

〜その他〜
拓哉と戦い、敗れたために、結社に戻れば殺されるからということと、魔術師としては超一流だからということで、黄金の夜明けに引き入れられる。
夜の闇を利用した魔術を得意とする。

魔女宗の初期メンバー、マーガレット・マリーの子孫。
魔術世界では”魔女”の名で通っている。

いざ行かん、イギリスへ

現在時刻ＰＭ５：５７。俺の部屋には、キンジ、アリア、アーロン、クレール、ライカ、間宮、佐々木、優、マーガレットがいる。

拓哉「そろそろ出発する。付いてこい」

俺は部屋から出て、車輌科（ロジ）に向かう。

拓哉「これが俺のジェット機だ。乗れ」

俺はジェット機を指さす。

キンジ「スゲェな、これ本当にお前のかよ」

あかり「うわー、すごーい」

アー「拓哉さんの口座にはかなりお金がありますからね」

拓哉「具体的に言うと、〇百億くらいかな」

ライカ「け、桁がちげぇ」

志乃「すごいですね」

みんな口々に驚いている。

拓哉「みんな乗ったな？じゃあ、アーロン頼んだ」

アー「はい」

拓哉「自動操縦に切り替えたらこっちに来いよ」

キンジ「なんだ？お前が運転するんじゃないのか？」

拓哉「たしかに俺も運転できるが、アーロンがいるときはいつも頼んでるな」

キンジ「そうか」

拓哉「ああ。で、ここがホールだ。一応ホテルっぽくなってるからな。で、あっちがトイレだ。冷蔵庫とかは一通り揃ってるから勝手に開けてもいいぞ。てことで俺はこれを」

一通り説明して、冷蔵庫からビールを出す。

あかり「お酒！？」

拓哉「ああ、今日は全員飲め。飲まないという選択肢はないからな。ビールが嫌なら日本酒やワインもあるぞ。ただしチューハイはないがな。あんな生ぬるいもんは置いてねぇ。あんなもんジュースだジュース。クレール、お前は日本酒でいいよな？」

クレ「いや、今日はビールだ」

あかり「いやいや、未成年なんですけど」

拓哉「気にしたら負けだ。今日は飲まねぇと許さねぇぞ。ほれキンジ、ビールだ」

ビールを注いだグラスをキンジに渡す。

キンジ「まあ一昨日も飲んだし、大丈夫か」

拓哉「アリア、お前にはワインだ」

アリアには赤ワインを渡した。

ライカ「アタシも一昨日飲んだしな。アタシはビールで」

あかり「ちょっ、ライカ！」

拓哉「ほれ、ビール。間宮も飲め飲め。酒の味を知らねぇのは人生損だぞ。佐々木、優、お前らはどうする」

志乃「じゃあ私は日本酒で」

拓哉「水割りお湯割りロックストレート何がいい？」

志乃「水割りで」

拓哉「ほれ」
志乃「ありがとうございます」
優「じゃ、じゃあ私はワインを」
拓哉「白？赤？」
優「赤で」
拓哉「マーガレット、お前は？」
マリー「ビールだ」
拓哉「ほらよ。ほら間宮、お前だけだぞ」
あかり「ちょっ、あたしだけアウェー？わかりましたよ。じゃあ赤ワインでお願いします」
アー「もどりましたー。って、みんな勝手に始めてたんですか？僕は日本酒ロックで」
拓哉「アーロンも戻ってきたことだし、始めるぞ。いいか？カンパーイ！！！」
全員『カンパーイ！！！』

酒を飲み始めてからがカオスだった。泣き出すあかり。暴れだす佐々木。笑い出す優。比較的酒に強い俺はそれを見て爆笑していた。アーロンは酒には強いが酔うまで飲もうとするから酔ってしまう。

拓哉「よーし、いい感じになってきたしウィスキー開けるぞー。飲む奴ぁ手ぇあげろ」

というとキンジ、マーガレット、クレール、アーロンが手を挙げた。

拓哉「水割りでいいな？」

全員頷く。

拓哉「あー、久しぶりのウィスキーはいいぜェ」

いよいよ酔い始めてきた俺。

結局は3，4時間ほど騒ぎっぱなしでみんな眠りに落ちていった。

To Be Continued!

到着！拓哉の実家にて

拓哉「やっと着いたぜ」

現在時刻、ＡＭ７：３２。イギリスの空港に到着した俺達。

キンジ「うう、頭痛ぇ」
拓哉「二日酔いか？あの程度で二日酔いとかせんだろ」
あかり「あたしは大丈夫ですよ」
拓哉「なんで酒飲んだの初めての間宮が二日酔いじゃねぇのにキンジが二日酔いなんだよ」
キンジ「体質じゃねぇ？うちの家系みんな酒に弱いらしい」
優「私は大丈夫ですね」
クレ「私も大丈夫よ」
アリア「頭痛いわ」
拓哉「ワインで二日酔いしてるし……」
マリー「私はさすがに飲みなれてるからな」
アー「僕もです」
志乃「私は少し頭が痛いです」
ライカ「アタシも頭痛い」

まぁ、そろそろ行かねぇと。

拓哉「じゃあまず俺の実家に行くぞ」

と、いうわけでイギリスのロンドンに来ました俺達。

「拓哉様、おかえりなさいませ」
拓哉「おう、ただいま。みんな、ついてこい」

全員を誘導する。

拓哉「ここが俺の実家だ。住んでいるのは父さんと母さんと曾々祖父さんと弟だ。俺の親父がイギリス人と日本人のハーフでな、母さんも日本人だ。初代も日本語を話せるから家んなかでは日本語でいい」

「兄さん、おかえり」

拓哉「ただいま、拓斗」

こいつは土屋拓斗。Ｍｙ ｂｒｏｔｈｅｒだ。ちなみに家を継ぐのは俺なので、Ｃの名はない。まあ、いい弟だ。

キンジ「誰？」

拓哉「Ｍｙ ｂｒｏｔｈｅｒ！」

アリア「あんた、弟いたの！？」

拓哉「ああ」

拓斗「兄さん、誰？」

拓哉「俺の友達だ。自己紹介しろ、拓斗」

拓斗「土屋拓斗です。兄がいつもお世話になってます。歳は１０歳です」

キンジ「遠山キンジだ。よろしくな」

アリア「神崎・Ｈ・アリアよ」

ライカ「火野ライカだ」

あかり「間宮あかりです」

志乃「佐々木志乃です」

優「青山優です」

マリー「マーガレット・マリーだ」

拓斗「はい、よろしくお願いします」

弟とも打ち解けてきたな。次は父さんと母さんだな。

「おぉ、なんだ拓哉帰ってきたのか」
拓哉「ああ」
「後ろにいる人たちは友達？」
拓哉「そうだ」
キンジ「まさか、父さん母さんか？」
拓哉「ああ」
「そうか、君たちが拓哉の友達か。俺は拓哉の父で、現クロウリー家当主、土屋・C・慎哉だ」
「妻の土屋杏子です」
拓哉「まぁ、みんなはくつろいでてくれ。俺は曾々祖父さんに挨拶してくる」
慎哉「ん？じいさんなら出かけているぞ？結社の様子を見に行くとかで」
拓哉「結社の方に？じゃあ、そっちにも用があるし、行ってくるよ。キンジとライカとマーガレットはついてこい。アーロン、クレールはわかってるな？」

と、いうことで、結社に向かう拓哉であった。

To Be Continued！

黄金の夜明け

アリア「ちょっと、なんでその五人だけ連れていくのよ」

俺が黄金の夜明けにキンジ、ライカ、マーガレット、アーロン、クレールだけ連れていくと言って、アリアが反論してきた。

拓哉「ちょっとした事情だよ」
アリア「事情って何よ」
拓哉「事情は事情だ。事情があるからこそ話せないんだろうが」
アリア「連れていかないと風穴開け――――」
拓哉「一つ言っとくが、お前が付いてきたらイギリス政府から戸籍だけじゃなくて様々な会員証とかまで消されて『お前』という存在自体なかったことにされるぞ」

食いついてくるからドスの効いた声でそう言ってやったら黙った。

拓哉「血迷ってもストーキングすんなよ」

そして俺、キンジ、ライカ、マーガレット、アーロン、クレールで黄金の夜明けのアジトへ向かった。
数十分歩いたところに、とある廃ビルがあった。

拓哉「ここだ」
キンジ「ここが……」
拓哉「そ、世界最大の魔術結社、『黄金の夜明け』のアジト。じゃあ行くぞ」

拓哉は廃ビルに足を踏み入れ、歩いていく。そこには大きな扉が

あった。

拓哉『俺だ。今帰った』

通信魔術を使って伝える。

『拓哉さん、アーロンさん、クレールさんどうぞお通りください。後ろにいる3人は？』

拓哉『新入りの魔術師だ。通せ』

『はい』

ギギギ……と、大きな扉がゆっくりと開く。そこには、数人の魔術師が出迎えていた。

拓哉「ただいま、みんな」

「おかえり、拓哉さん」

キンジ「この人たちは……」

拓哉「まあ幹部といったところだ」

フェ「拓哉、久しぶりね」

拓哉「ああ、元気だったか？フェイリス」

フェ「勿論。ああ、お爺様来てるわよ」

拓哉「もともとその用事もあったんだ。会ってくるよ」

キンジたちはフェイリスに預け、奥に行く。

拓哉「アレイスターのじいさん。今帰った」

アレ「おお、拓哉」

拓哉「久しぶり。元気そうで何よりだ」

アレ「はっはっは。世紀の大魔術師と呼ばれたこの私はそう簡単には死なん」

拓哉「まぁ、魔力のおかげで長生きしてるだけだがな」
アレ「して、日本はどうだったか？」
拓哉「いいところだ。友人もできたし、新入りも四人見つけてきた。今日はそのうち三人を連れてきたよ。会議で紹介するから、じいさんも出席な」
アレ「そうか、新入りか。それは、誘ったのか？」
拓哉「二人は誘ったが状況が状況だった。あとの二人は自発的だ」
アレ「そうか」
拓哉「じゃあ、会議だ。行こう」
アレ「ああ」

そして、メンバーを会議室に収集して、キンジ、ライカ、マーガレットを連れて会議室に向かった。
黄金の夜明けの副リーダーであるフェイリスもいる。

キンジ「なあ、お前の隣にいる人誰？」
拓哉「初代クロウリー。アレイスターのじいさんだ」
キンジ「若ッ！？」
ライカ「どこがじいさんなんだよ……？」
マリー「生きているという噂は本当だったか……」

そう、アレイスターの見た目は若すぎるのだ。実年齢は１３５歳。とても人間の生きていられる年齢ではないのだが、魔力のおかげで生きていられる。見た目はなんと、二十代中盤位にしか見えない。

アレ「君たちが新入りの魔術師かね？私はアレイスター・クロウリー。拓哉の曾々祖父だ」
キンジ「これはどうも、遠山キンジです」
ライカ「火野ライカです」
マリー「マーガレット・マリーだ」

アレ「おや？君は”魔女”ではないか？」
フェ「あら？まさかやるとは思ってたけど”魔女”も引き入れたのね」
マリー「っ！？気づいて――――」
アレ「そう身構えなくてもいい。自分が倒した魔術師は組織に引き入れるのがこいつのやり方だからな」
フェ「そうそう。ほかの組織から引き入れた魔術師なんて、ここにはいっぱいいるわよ」
マリー「そうか……」
拓哉「そろそろ会議始めるから静かにしてくれ」

拓哉は会議室の壇上に上がった。

拓哉「諸君！久しぶりだな。ではこれより、『黄金の夜明け』の会議を始める！」

いよいよ、新入りを交えた会議が始まった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

会議

魔術結社、『黄金の夜明け』の会議である。

拓哉「昨日まではフェイリスに任せていたが、俺が一時帰国している間はまた俺がリーダーに戻るが、異論はないな？」

「もちろんです」

「拓哉様、万歳！」

拓哉「静まれ！」

煩くなってきたところを一喝すると、シン――――……となった。

拓哉「まずは、俺が不在だったために、前回の報告をフェイリスにしてもらう」

フェ「はい、前回は小さな魔術結社が行なっていた計画を潰し、イギリス政府に引き渡すという任務を政府直々に言い渡されましたが、私、カルラ、エリックの三人で完遂しました。報酬は１０億ポンドです。」

拓哉「よろしい」

ここで、『黄金の夜明け』について説明しておこう。

『黄金の夜明け』のメンバーは、リーダーである俺と、副リーダーであるフェイリスを中心とし、幹部１０人と、約５６０人からなるメンバー、そして約１５００人ほどもいる下部組織の、総計約２１００人で構成されている。

下部組織のメンバーは、魔術の才能はあっても開花していない人間が多い。通常メンバーは様々な人間がいる。幹部は魔術の才能の優れた人間１０人による、いわば精鋭部隊だ。

普通の魔術結社は、多くても２００人程度だが、『黄金の夜明け』

は桁違いに大きい組織なのである。そして魔術も優れている。
『黄金の夜明け』は他の魔術結社のストッパーとしての役割も担っている。もしも不信な動きをすれば、あらゆる国家より結社を潰すようにと命令が下る。俺たちはそれを潰し、報酬を得ているのだ。
拓哉「では諸君、今日は依頼も任務もない。だが、大事なお知らせがある。新メンバーの追加だ」

そう言うと、ざわざわと騒ぎ出す。

拓哉「静かに！新入りの魔術師は四人だが、そのうちの三人が今ここにいる。紹介しよう。こいつらだ！」

俺は後ろ手でキンジたちを手招きする。

拓哉「さあ、紹介する。まずはこいつ、遠山キンジだ！こいつは俺が日本で武偵をしているときに仲良くなった友人だ。新米の魔術師だが、こいつの才能には驚かされた。魔力の生成を、なんと一時間で覚えてしまった。さらに転移と治癒魔術も三時間で覚えてしまった。最後に攻撃魔術だが、これも短時間で覚えてしまった。俺はおすすめはしなかったが、ここまでの才能がある人物は貴重だと思い、入るかどうか聞いた。こいつは自分から入ると言った。ということで迎え入れた。もちろん武偵だけあって、魔術なしの戦闘も上手い。こいつが入ることに、異論がある奴は言え」
「はい！新米の魔術師と聞きましたが、覚悟はあるのですか？」
拓哉「どうだ？キンジ」
キンジ「もちろんある」
拓哉「だそうだ。だいたい武偵だから世界の汚いとこは多少知っているんだ。大丈夫だろう。して、こいつの配置は、正規メンバー入りだ。戦い慣れているし、何より魔術の才能がかなりある。こいつ

は鍛えれば鍛えるほど硬さを増す鋼のような奴だ。構わないな？」
『はい！』
全員の声が揃う。キンジは歓迎されたようだ。
拓哉「では次だ。こいつは火野ライカ。こいつは武偵高の後輩だ。こいつもキンジと同じく、短時間で魔術を覚え、強さもそこそこだ。そしてこいつも武偵だから戦い慣れている。配置はキンジと同じ理由から正規メンバーだ。異論はないか？」
誰も異論はないようだ。誰の手も上がらない。
拓哉「こいつも武偵だけあって裏の事情は少しだけ知っている。決意もあるだろう。いいな？」
『はい！』
拓哉「では最後に、マーガレット・マリーだ。こいつは魔女宗の”魔女”だったが、俺がまた引き抜いた人間だ。強さは保証できる。裏切るようなことはないよな？」
マリー「勿論だ。お前には助けてもらった。それを裏切ることはできん」
拓哉「だ、そうだ。俺は今まで様々な奴らを救ってきたが、こいつもその一人だ。配置はもちろん正規メンバーだ。問題ないか？」
『はい！』
拓哉「では、この場にいる三人は、晴れて正規メンバーということだ。ようこそ『黄金の夜明け』へ。俺たちは君たちを歓迎しよう」
三人は問題なく正規メンバーとなった。
拓哉「次にもう一人の新入りだが、今この場にはいない。しかし都合が合えばいずれ連れてこよう。では、今日の会議を終了しよう。

幹部は残っておくように。では諸君、解散！」
『おつかれさまでした！』

下部組織及び正規メンバーは去っていった。俺は幹部たちに向き直る。

拓哉「じゃあ、今日はホテルのホールを貸し切ってこいつらの歓迎会をするが、幹部はみんな予定はあるか？時刻は２０：３０からだが」

そう聞くと、皆予定はないようだ。よかった。

拓哉「自己紹介などは歓迎会の時にしてもらう。じゃあお前たちももう下がっていいぞ」
『はい！』

すると、幹部たちも下がっていった。

拓哉「はぁ、堅苦しい挨拶疲れた」
キンジ「なあ拓哉、なんで会議の時はあんな喋り方なんだ？」
拓哉「そりゃあ、上に立つ者として、適当にするわけにもいかないだろ？それに下部組織からなめられないようにするためだ」
ライカ「でもすごかったです。かっこよかったですよ」
拓哉「そうか？」
ライカ「はい」
マリー「お前は、すごいんだな。どうりで私が勝てないはずだ。お前、みんなに信頼されているようだし」
フェ「そうよー、拓哉は昔からみんなに信頼されてたんだから。お爺様の玄孫だからではなく、ひとりの人間としてね」
キンジ「フェイリスさん、昔の拓哉ってどんな感じでしたか？」

フェ「あらキンジ君、そんなに畏まらなくてもいいのよ？たった一歳上なだけだし、メンバーに敬語を使わない人も多いしね」
キンジ「そうか？で、拓哉はどんな感じだったんだ？」
フェ「拓哉はねぇ、私を昔助けてくれたのよ。魔術結社に連れ去られそうになったとき、たまたまその結社を潰すように命じられてたんだって。そして私は魔術の腕を見込まれて、引き入れられた。『黄金の夜明け』を拓哉が引き継いだばかりのときからずっと一緒に頑張ってきたのよ。そんな感じで、昔から強くて優しい人だった」
ライカ「そんなことが……」
フェ「それにね、メンバーにワケありな人間が多いのよ。それをみんな拓哉が救ってきたの」
アレ「だから拓哉は信頼される。自分を救ってくれた人なのだから、と自然と周りに人が集まる」
マリー「私もその一人、というわけか……」

ここまで褒められると、少し照れるな……

アレ「じゃあ、私は屋敷に戻るよ。また機会があったらくる。アーロン、クレール、一応の護衛を頼む」
アー「はい」
クレ「わかりました」
フェ「お爺様、また」
拓哉「じいさん、魔術師に気を付けて帰れよ」
アレ「気を付けておくよ」

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

観光に行こう（前書き）

いつの間にかお気に入り登録件数が１００件を超えていました
これも皆さんの応援のおかげです
これからもよろしくお願いします

観光に行こう

アレイスターのじいさんが、屋敷に帰った直後、俺たちは話をしていた。

拓哉「そう言えば観光に行くんだったな」
キンジ「あー、そうだった」
ライカ「すっかり忘れてた」

そう、オレらはもともと、みんなを観光に連れてきたのだった。

拓哉「あと、悪いんだがマーガレットは行けない」
キンジ「なんでだ？」
拓哉「こいつの偽装身分を作成しなくちゃいけないんだ」
マリー「私のことは気にするな。この辺はだいたい知っているから観光の必要もない」
拓哉「そうか、悪いな。フェイリス、偽装身分の件は頼んだ」
フェ「分かったわ。キンジ君たちも楽しんできてね」

ということで、俺たちは一旦屋敷に戻った。

拓哉「ただいまー。みんなー、観光に行くぞー。優ー」
キンジ「アリアー」
ライカ「あかりー、志乃ー」

とりあえずみんなを呼んだ。

アリア「フン」

アリアは屋敷を出る前のやりとりのせいで、わかりやすく不貞腐れていた。

あかり「イギリスって初めてです」
拓哉「まずはロンドン塔辺りに行くか。いくぞみんな」
拓斗「行ってらっしゃい、兄さん、皆さん」

俺たちはロンドン塔に向かって歩き出した。

ここはロンドン塔。テムズ河沿いに建つ、１１世紀ウィリアム征服王によって築かれた城塞。その後王室の居城としても使われていた。さらに長い間政治犯らの牢獄としても使われ、多くの囚人が収容されていた。敷地内には処刑台の跡も残され、悲しい歴史を今に伝えている。王室の宝物庫であったこともあり、城内のジュエル・ハウスには、王冠などの宝物が展示されており、世界最大という数百カラットのダイヤモンドも見ることができる。ガイドもしてくれる衛兵、ビフィーターは、ロンドン塔の名物的存在である。

拓哉「ここがロンドン塔だ」

俺は受付に、俺、キンジ、アリア、ライカ、間宮、佐々木、優の分の入場料、一人９．５ポンドの、計６６．５ポンドを払って入場した。俺とアリアと間宮で、お前らは充分小学生に見えるからタダでいいか否かで言い争ったが。

俺たちは入場し、処刑台や牢獄、世界最大のダイヤモンド、財宝などを見学して、ロンドン塔を後にした。

キンジ「処刑台とか、すごかったな」
優「大きなダイヤモンドも綺麗でした」
拓哉「次はどこ行こうか……」

俺は次に行くところで悩んでいる。

ライカ「やっぱりイギリスといったらバッキンガム宮殿じゃないですか？」
志乃「大英博物館はどうでしょう？」
キンジ「ロンドンアイとかはどうだ？」
拓哉「うーん……どうしようかな」

俺には決められそうもなかったため、俺以外の奴らで多数決をした。すると……

宮殿　アリア，ライカ
博物館　あかり，志乃
ロンドンアイ　キンジ，優

きっちり三頭分されてしまった。まだまだ話し合いは長く続きそうだ……。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

観光に行こう（後書き）

さて、アンケートを取りたいと思います
その内容は、拓哉のヒロインを誰にするかです
予定としての選択肢は←

1，ライカ
2，フェイリス
3，優
4，理子

では、コメントにて投票してください

観光？どうでもいい！事件だ事件！（前書き）

アンケート途中経過

1，ライカ　0票
2，フェイリス　1票
3，優　0票
4，理子　2票

投票は一回ですが、一回の投票で三票までとします
例）フェイリスに2票、理子に1票の投票
アンケートは年明けまで続けるつもりです
ではよろしくお願いします

観光？どうでもいい！事件だ事件！

今は観光中。みんなでどこに行こうか言い争っている。だが……

ｐｒｒｒ♪　ｐｒｒｒ♪

拓哉「はいもしもし？フェイリス、どうした？」
フェ『事件よ』
拓哉「何！？どこでだ！？」
フェ『ロンドン塔から北北東に１２００ｍ』
拓哉「どんな事件だ！？」
フェ『大きな喧嘩みたい』
拓哉「ちょうど俺らロンドン塔にいるから、今から向かう」
フェ『分かったわ』

拓哉「おい、みんな。観光は中止。ここから北北東に１２００ｍ地点で喧嘩だそうだ」
キンジ「マジか？」
拓哉「俺は今から鎮圧に向かう。行くぞ！」
アリア「分かったわ」
優「私も行きます！」

俺は事件現場に向かった。

Ａ「Ｄｉｅ！」
Ｂ「Ｉｔ　ｉｓ　ａｎｎｏｙｉｎｇ！　Ｉｔ　ｗｉｌｌ　ｋｎｏｃｋ！」
Ａ「Ｉｔ　ｉｓ　ａｓ　ｗｈａｔ！？」

口喧嘩の末、殴りかかっていく。
キンジ「英語が分からねぇ」
あかり「あたしも……」
優「私もです」
アリア「もう、ダメダメねぇ」

とりあえず鎮圧に行こう。

拓哉「Ｓｔｏｐ！！」
Ａ，Ｂ「Ｗｈａｔ！？」
拓哉「Ｉ'ｍ　ａｎ　ａｒｍａｍｅｎｔｓ　Ｄｅｔｅｃｔｉｖｅ！
Ｓｔｏｐ　ａ　ｑｕａｒｒｅｌ！」
Ａ「Ｉｔ　ｉｓ　ａｎｎｏｙｉｎｇ！　Ｐｒｏｂａｂｌｙ，　ｉｔ
ｉｓ　ｎｏｔ　ｒｅｌａｔｅｄ　ｔｏ　ｙｏｕ！」

片方が殴りかかってくる。

拓哉「ふん」

拓哉は軽々と避け、相手の手の甲を中のグリップで殴った。

Ａ「Ｉｔ　ｉｓ　ｐａｉｎｆｕｌ！」
Ｂ「Ｉｔ　ｉｓ　ｈｏｗ　ｉｆ　ｉｔ　ｉｓ　ｔｈｉｓ！」
拓哉「Ｕｓｅｌｅｓｓ　ｆｕｔｉｌｉｔｙ！　ほいっと」

次にもう一人の後頭部に手刀を入れ、意識を落とした。

拓哉「Ｔｈｅｙ　ａｒｅ　ｂａｄ　ｌｏｓｅｒ　ｆｅｌｌｏｗｓ……」

すると、野次馬から大拍手が巻き起こった。俺は警察に連絡し、二人に手錠をはめて手渡した。

拓哉「ああ、フェイリス？鎮圧は終わった」

フェ『うん、ありがとう。こっちもマーガレットの偽装身分証明書は完成したわ』

拓哉「さんきゅーな」

フェ『ええ』

これにて一件落着。屋敷に戻る拓哉一行であった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

観光？どうでもいい！事件だ事件！（後書き）

さて、今回の話に出てきた英文ですが、理解できましたか？
あえて和訳を入れませんでした

特別編　とある日の四対四戦（カルテット）　合宿編（前書き）

緋弾のアリアＡＡの三巻を買ったので、その記念に書きました

特別編　とある日の四対四戦（カルテット）　合宿編

間宮ｓｉｄｅ．

とある日の昼休み。１年Ａ組に、二年の先輩が入ってきた。

中空知「にっ２年の中空知ですッ！教務科（マスターズ）より伝令！せっせっ清聴ォー！」

あかり「ん？二年の先輩か。なんだろ？」

中空知「四体四（カルテット）戦の班決め申請率が、ひく　ひく　低いので急ぎ申請するように！以上！！」

中空知先輩はそう言うとすぐにあわあわしながら出ていった。なんだったんだろ？それにカルテットって……

あかり「カルテット――――って、何？」

あたしは志乃ちゃんとライカに聞く。本当に何かわからないから困る。

志乃「一年全員参加の四対四の実践テストですよ」

ライカ「インターンも入れていいみたいだな」

聞くと二人は教えてくれた。四人かぁ……。ってことは、

あかり「だったらあたし達と麒麟ちゃんで申請しようよ」

志乃「いいですね」

ライカ「まあ、四人必要だし……」

ライカと志乃ちゃんは引き受けてくれた。やっぱり持つべきものは友達だね！
あたしはウキウキしながら申請用紙に書いていった。

side out.

拓哉「四対四戦ねぇ」
四対四（カルテット）戦。それは一年全員参加の四対四実戦。去年は俺とキンジが組んで独壇場だったが……
拓哉「で、なんで俺が間宮の班の管理やらなきゃなんねぇのさ」
アリア「しょうがないでしょ。小夜鳴先生がその日急用でできなくなって、教務科（マスターズ）がご指名なんだから」
拓哉「小夜鳴ェ……」
恨むぜアンタ。まぁウジウジしても仕方ねぇし、やるっきゃねぇな。
拓哉「して、間宮の班の対戦相手は……。げ、高千穂班かよ。メンバー見る限り、間宮は確実にボロ負けだろうな」
高千穂麗。一年C組の組長で、高飛車なお嬢様。いつも金で取り巻きを作っているが、所詮は武装弁護士である父のおかげで威張っていられる雑魚だ。まぁ雑魚だと言っても実力はそこそこだがな。一年如きが威張っているだけってことだ。
拓哉「まぁ、俺もアイツは苦手っつーか、相手したら疲れるし、間宮に手助けしてやるか……」
アリア「あかりに手助けするの？まぁいいけど、やりすぎないでね」

拓哉「わーってるよ。はぁ、噂をすれば……」

目の前で高千穂班と間宮班が喧嘩していた。ったく、止める身にもなりやがれ。

アリア「こらー！教務科（マスターズ）の前で何やってんの！」

アリアを見ると、高千穂の顔に驚愕の色が浮かぶ。間宮の戦姉（アミカ）っていうことに驚いたのだろう。

拓哉「ったく、一年のガキどものお守りを任される俺の身にもなりやがれ。なぁ、所詮武装弁護士である父のおかげで威張ってられる高千穂よぉ。一年の分際で威張るな、雑魚」

少し急を据えてやる。まぁ、風魔とあの双子も一緒になって束でかかっても、雑魚には変わりない。

拓哉「して、風魔。テメェ、金で動いてんな？高千穂麗側（こんなやつ）に付くなんざ、テメェキンジに何教わった？こいつと組んでもなんのプラスにもなりゃしねぇよ。だってさぁ、所詮武装検事の一族だろ？大した実力もねぇくせに金でものを言わせる雑魚じゃねぇか」

風魔「それは……」

拓哉「高千穂」

高千穂「なっ、なんですか！？」

拓哉「俺を束になって潰そうなんて馬鹿な考えはもつなよ。殺気がダダ漏れだ。俺が本気になりゃ、一日でお前の家潰せるんだからよ」

高千穂「っ！？」

少し殺気を高千穂だけに向けてやった。高千穂は怯えるが、殺気を向けられてない他の奴らは何かわからないようだ。

高千穂「そっ、それじゃあ本番をお楽しみに」
怯えながら捨て台詞を吐き、どこかへ行ってしまった。
拓哉「たく、一年の間宮と佐々木と火野、それにインターンの島だな？」
気絶していた火野と島は復活していた。
拓哉「相手の挑発に乗るな。まんまと乗せられてやがるぞ」
あかり「だって……」
拓哉「ああ、一応言っとくが、金で人雇うことにずるいとか思うなよ。もともと武偵は金で動くもんだからな。ったく、風魔もあんな奴の誘いなんて断りゃいいのに。もっといい組み合わせがあったと思うんだがなぁ……」
拓哉「まぁ、あいつの対策は俺が教えてやるよ。あと、島」
島には優秀な元戦姉（アミカ）がいる。そいつにも協力を仰ごう。
麒麟「なんですの？」
拓哉「お前、確か去年の戦姉（アミカ）が理子だったな？アイツにも協力してもらうが、いいな？」
麒麟「もちろんですの。そうと決まったら合宿場を……」
拓哉「おいおい、忘れたか？高千穂家は金持ちなんだぜ？確実に全部借りてるだろうよ」
志乃「それなら、私の家を合宿場として提供します！高千穂家には負けません！」
拓哉「さんきゅー、佐々木」

こうして、女子5人、男子俺一人という奇妙な合宿が決定した。
ああ、理子は電話でＯＫ貰ったぞ。

そして、合宿当日――――

拓哉「で、この娘は？」

見慣れない娘を指さし、聞く。

あかり「あたしの妹」
ののか「間宮ののかです。貴方は？」
拓哉「俺は土屋拓哉。こいつらの特訓を任された者（モン）だ。こいつらの先輩ってとこ。ああ、心配すんな。男は俺一人だが、手を出すとか、そういうのねぇから。俺年上が好みだし、特に島と間宮姉に手を出したらロリコンって言われそうだし……」
あかり「誰がロリですか！」
麒麟「失礼ですの！」
ののか「あはは、そうですね」
あかり「ののかも肯定しない！」

他愛ない話をしているうちに、佐々木家に着く。なんかへんなやりとりもあったが、俺は先に指定された場所に来ていた。ここで俺が講習をするのだ。ああ、間宮妹は帰ったそうだ。

拓哉「さぁ、説明するぜ？教務科（マスターズ）より定められたお前たちの競技は『毒の一撃（ブワゾン）』。コイツは俺が去年受けた競技でもあるからいろいろと教えられることがある。まず間宮班、高千穂班、それぞれ目のフラッグを一本。蜂か蜘蛛のフラッグを四本ずつ渡される。守るのは目のフラッグ。蜂と蜘蛛のフラッグは攻撃用で、こいつで相手の目のフラッグに触れたら勝ちだ。」

あかり「目を毒虫に刺されたら負けってことだね」
拓哉「間宮、お前鋭いな。そういうことだ。お前たちの攻撃フラッグは蜂だ。試験場は第十一区。その中にあるものは何を利用しても構わない。そして、高千穂班は北端。お前たちは南端から開始する。基本ルールは以上だ」

案外シンプルなルール。だが、だからといって侮れないのが『毒(プ)の一撃(ワンン)』だ。

志乃「シンプルですね」
あかり「だね」
ライカ「だな」
麒麟「でも、隠匿・強襲・逃げ足・チームワーク。いろんな能力が試されますわ」
??「さっすがりんりん。あたしの教え子だぁー」
拓哉「来たか、理子。コイツは探偵科(インケスタ)の二年、峰理子だ」
理子「それにしても、たっくんが教えるなんてもう反則レベルだよ」
あかり「へ、なんでですか?」

おい、あれを言うつもりかよ……

理子「だって、去年たっくんとキーくんの二人だけで、開始早々10分で終わらせたしねぇ。しかも攻撃フラッグは一本として折られなかったし」
拓哉「ったく、それを言うか……。ま、そういうことだ。俺とキンジの二人の独壇場だったってことだ」
間宮「えーーーーっ!?」
ライカ「す、スゲェ。確か強襲科(アサルト)でもSランクだったっけ」

やっぱ俺のことも知られてたか。ま、いいけどさ。

拓哉「理子、お前はどう思う？」
理子「確実に工事現場を陣取るだろうね」
拓哉「やはりな。相手が型破りなことをするとは思えねぇし」
理子「自分の身は自分で守るのが武偵。あたしは後輩を守らない戦(あ)姉(ね)。ただし、鍛えては上げるぞよ」

こうして、間宮班の合宿は始まった。

理子「志乃っちは――――」

いよいよ特訓が始まった。俺はバカを懲らしめるとしよう。

拓哉「……『我が身は一つでは無し。自分であって自分でない者。自分は自分であって他人である』」

この詠唱は分身術式。片方はこいつらの特訓をさせ、もう一人はどっかのバカを懲らしめる。いいもんだろ？

拓哉「さぁ、無粋なバカはどこにいるのかな？」

とあるビルを見る。魔術で視力を強化しているので、カメラのレンズ越しに目があった。俺はニヤリと笑みを浮かべると、転移魔術で赴いてやった。

拓哉「さて、高千穂班の双子。テメェら他の班を偵察するのは無粋ってもんだぜ？つーことで眠ってろ」

二人の後頭部に手刀を当てると、二人は気絶してしまった。俺はおもむろにカメラを拾うと、レンズに向かってこう言ってやった。

拓哉「おい、高千穂麗。テメェ、モニタ越しに見てるんだろ？相手班の特訓を盗み見るのは無粋ってもんだ。次やったら、コロス……」

そう言ってカメラ、パソコンをぶっ壊した。モニタ越しに呪う術式を使わなかっただけ感謝しろよ。俺は術式を解除し、一人に戻った。

To Be Continued!

特別編　とある日の四対四戦（カルテット）　本番編

拓哉「さてと、四対四戦（カルテット）『毒の一撃（プワゾン）』を開始する。お前らの管理役だった小夜鳴は緊急でできなくなったから俺が管理する。間宮班には『蜂』高千穂班には『蜘蛛』のフラッグを、敵の『目』のフラッグに接触させれば勝利だ」

淡々と説明する俺。いよいよ間宮班の特訓の成果が見れるってもんだ。

拓哉「フラッグの隠匿、班員間での受け渡し、敵からの奪取はすべて許可されている。また、エリア内にあるものは何を利用してもいいぞ。使用弾薬は非殺傷弾（ゴムスタン）。ただし、頭に当てれば死ぬ可能性がある。もしルールを敗れば即俺に情報が回るから、黙っていればいいなんて考えるなよ」

もちろんである。このエリアには分身を２０、使い魔を１００ほど放っておいた。どこで何をしようと、俺が知ることはないと思ったら大間違いだ。

間宮はスッ、と手を差し出す。握手するつもりだろう。だが、あかり「お互い頑張ろう」

パシン、と音を立て、その手を払った。こいつ殺そうかな？

高千穂「対等なつもり？不愉快だわ」

拓哉「おい、高千穂、テメェら失格にするぞ？さ、間宮班は南端へ移動しろ。高千穂班は北端へ。１０分後には開始するからそのつもりで」

高千穂班は北端へ向かう。俺は間宮に近づいてこう言ってやった。
拓哉「間宮班、理子と俺の特訓を忘れんな。あんなクズに負けたら承知しねぇぞ？」
あかり「はい！」
ライカ「ああ！」
志乃「もちろんです！」
麒麟「はいですの！」

大きく返事をすると、間宮たちは南端へ向かった。
拓哉「さて、俺も仕事するか。使い魔１～１０は北側をマーク。１１～２０は南側。そのほかは中央をマークしろ。分身はできるだけバラバラに行動しろ」

使い魔と分身の配置を決めると、俺も人混みにまぎれた。

間宮ｓｉｄｅ

志乃「奥へ行くにはこの先の通りを通るしかありません。待ち伏せに注意してください」
あかり「うん」

いつもの町なのに不気味に見える……
直後、あたしの脹脛に、パァン！！という衝撃が走った。
あかり「みぎゃっ！」

どさりと倒れるあたし。愛沢姉妹のようだ。

志乃「あかりさん！」

愛沢姉妹の片割れはあたしの蜂のフラッグを追って捨ててしまう。

夜夜「トドメよ！」

湯湯「うん！」

あかり（しまった！…！）

あたしは衝撃に耐えるべく歯を食いしばったが、来るべき衝撃がこない。あたしは目を開けると志乃ちゃんが愛沢姉妹を取り押さえてくれたようだった。

志乃「あかりさん！」

志乃ちゃんはあたしに蜂のフラッグを投げ渡してくれた。

志乃「ここは私に任せて先へ！」

あかり「でも……」

それでは志乃ちゃんが動けなくなる。だけど志乃ちゃんは心配しないでと言わんばかりにあたしに向き直り、

志乃「勝ちましょう！」

――――と言ってくれた。あたしはコクッと頷くと、先へ向かった。

side out

ライカｓｉｄｅ

麒麟「……愛沢姉妹の動きは遊撃的でしたわ」

アタシたちは目のフラッグの守備をしている。愛沢姉妹が遊撃的な動きをしたため、アタシたち守備は警戒を強めた。

ライカ「守備に最低一人は必要だから、あと一人攻撃手がいるな」

？？？「左様。それが某（それがし）にござる」

ライカ「なっ（風魔陽菜！！）」

よりによって攻撃手は風魔かよ。考えている隙にあたしの蜂のフラッグは取られてしまった。

麒麟「お姉様！」

ライカ（！？これだから諜報科（レザド）は戦（や）りにくいぜ！）

風魔は苦無（クナイ）を構え、麒麟を狙った。

ライカ（麒麟！！）

アタシは地面を蹴る。その反動で思い切り遠心力をつけて回転し、脳天から蹴りつけた。

陽菜「ッ……！」

ライカ「戦妹（いもうと）は戦姉（あね）が守る！！」

陽菜「島殿、お手が汚れている様子。フラッグは近くに埋めてござるな？」

ライカ「目がいいな。でも、目はアタシと合わせろ！！」

アタシは隠し持っていたトンファを取り出し、構えた。

陽菜「目は、潰すものでござるよ！！」

風魔はよりによって煙玉による目潰しをしてきやがった。何も見えないうち、背後から苦無（クナイ）で攻撃してきたところを、なんとかトンファで受けきる。

麒麟「お姉様！！」

side out

間宮side

あたしは工事現場目指して走る、走る、走る。工事現場につくと、砂利山の天辺に刺さる目のフラッグが見えた。

高千穂「お前が来たのね、これも因縁かしら」

あかり（高千穂麗……！）

高千穂「私（わたくし）ね、神崎アリア先輩に戦姉妹（アミカ）契約をお願いしてたの」

あかり「！？」

これは土屋先輩が言ってた……！

高千穂「でも契約試験で躓いちゃって、そのあといくら契約金を提示してもダメだった」

あかり（これは挑発に使える……）

高千穂「でも、今はアリア先輩と契約しなくてよかったと思ってるわ。お前を戦妹（アミカ）にするなんて、錯乱されたとしか思えないもの」

あかり「ふふふ……」

あたしは本当におかしく思って、笑ってしまった。

高千穂「ッ……！？何がおかしいの」

あかり「馬鹿だね、あんた。あたしはちゃんと試験に合格して契約した。試験に躓いたあんたが悪いだけじゃない。その罪を他人に擦りつけるとか、たかが知れてる。土屋先輩に聞いたとおり、ただの雑魚だね」

高千穂「なんですって！？」

予想通り高千穂は挑発に乗って銃を出した。土屋先輩に聞いたとおり、銃はスーパーレッドホーク。構えたと同時に動き出せば、よけることは簡単だって言ってた。

ドォン！という銃声と共に発砲する。あたしはそれを土屋先輩に聞いたとおりによけた。

高千穂「なっ！？よけられた！？」

あかり「銃弾を避ける訓練なんて、土屋先輩に嫌というほどさせられたからね。でも、この程度じゃアリア先輩や土屋先輩には及ばない！」

高千穂が乱射してくるけど、あたしはいとも簡単によける。そして……

あかり（このバイク、リボンが付いてる……？　……っ、そういうことか）

あたしは解除（バンプ）キーを取り出し、解除（バンプ）に入った。

高千穂「退（ひ）いたのはミスよ、間宮あかり。非殺傷弾（ゴムスタン）でも銃は有効射

程距離がものを言う。バイクごと吹っ飛ばしてやろうかしら。壊しても賠償すればいいものね」

解除！なんとか間に合い、バイクのキーを解除した。

あかり（峰先輩すいません。１分だけ借ります！！）

高千穂「なっ……！！」

高千穂は案の定、頭を狙って発砲した。それは予想通りなので、頭を振ってよける。

高千穂「かわされた！！」

あかり「あたしたちは、負けない！！」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ライカｓｉｄｅ

ライカ「やるな、お前」

陽菜「そこもとも……」

アタシは風魔に相対している。そこで不意に、麒麟の無線機から『あたしたちは、負けない！！』というあかりの声が聞こえてくる。

麒麟「整いました！」

ライカ「え？」

麒麟はアタシに抱きつくと、作を飛び越えて飛び降りた。通りかかったトラックの荷台に着地する。

ライカ「な……、なんだよ！！『目』のフラッグがやられちゃうだろ！！」
麒麟「敵を欺くにはまず味方から、ですわ？　埋めたのは『蜂』のフラッグ。目のフラッグは最初から土屋先輩に渡してますの」
ライカ「土屋先輩って……。それルール違反じゃないのか！」
麒麟「土屋先輩は、『エリア内の人を利用してはいけない』なんていうルールはないって言われましたの」
ライカ「そういえば……」
麒麟「私（わたくし）、蜂って嫌いですの」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

間宮ｓｉｄｅ

あたしはバイクから飛び降りる。バイクには攻撃フラッグが結びつけてあり、それが通過すると目のフラッグにあたるという仕組みだ。それを見て高千穂は驚愕し、タイヤを狙って銃を構える。

高千穂「あっ！？」
志乃「あなたに教えてあげます。お友達はお金じゃ買えない！」

志乃ちゃんが刀で銃を攻撃し、照準を狂わせる。

あかり「おねがい、届いて！」

バイクが少しずつ近づいている。あと数センチ……！

あかり「いっけぇーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！」

パァン！その音と同時、相手の目のフラッグは跳ね上がった。

高千穂「そんな……」

高千穂は足を踏み外し、さっきまで志乃ちゃんが入っていたドカンにお尻からはまる。

高千穂「キャッ！！ぬっ、抜けないっちゃ！！」

高千穂はドカンから抜けなくなり、その頭にフラッグがあたった。見事なデジャビュだった。

side out

俺は工事現場に赴く。間宮班の勝利の報告を受け、そのチェックのためだ。

拓哉「よくやったな、間宮、佐々木、火野、島」

あかり「はい！」

志乃「はい」

火野「あぁ！」

麒麟「はいですの」

俺はドカンから抜けなくなっている高千穂に近づく。

拓哉「ったく、油断したことがお前らの敗因だ。ほら」

俺は高千穂の手を取り、ドカンから引っ張り上げる。

高千穂「あなたは、何者ですの……？」

拓哉「土屋・C・拓哉。名前くらい聞いたことあんだろ？お前だっ

て強襲科（アサルト）だし」
高千穂「あのＳランク武偵の！？」
拓哉「そういうこと。ま、これに懲りたら他人を見下すのはやめておけよ」
高千穂「……／／／」

俺はそう言うと、間宮たちを連れて打ち上げに向かった。高千穂が俺に向けてきた熱っぽい視線は見なかったことにしよう。

アリア「では間宮班の勝利に、カンパーイ！」
理子「おめでとー！」
拓哉「ま、よくやったな」
あかり「土屋先輩のおかげです。銃弾を避ける訓練のおかげで勝てました」
ののか「銃弾を避けるって……」

間宮妹は銃弾を避けるという言葉に引いていた。まぁ、一般人（パンピー）は引くよな、そんなこと聞いたら。

拓哉「あぁ、こんなめでたい席に酒がないのが残念だ。ビール飲みてぇ」
あかり「飲酒は２０になってからですよ」
拓哉「イギリスじゃ１６歳でビールを飲むのが認められてるのに、日本は不自由だわ……。イギリスの本宅に帰りてぇ。じいさんたちと酒飲みてぇ」

支払いは俺持ちということになり、打ち上げは幕を閉じた。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

歓迎会準備（前書き）

1，ライカ　0票
2，フェイリス　3票
3，優　0票
4，理子　6票

ということでヒロインは理子に決定しました

あまり書く時間がなかったので短いですが、ご了承ください

歓迎会準備

拓哉「もう４時半か……。キンジ、ライカはちょっと残っててくれ。他の奴らは先に屋敷に戻っててくれるか？」
キンジ「なんだ？」
拓哉「ここでは話せねぇ。アリアたちが居なくなってからだ」
ライカ「魔術関係のことっすね」
拓哉「ああ」

魔術は隠匿はしなくていいが、深いところまで知るとイギリス国家から消される、ということだ。

拓哉「ほら、今日の２０：３０から歓迎会があるから、そのことについて説明しとかないとな」
キンジ「えっと、近くのホテルだっけ？」
拓哉「ああ。もう俺は準備しに行くが、お前らは屋敷に戻ってていいぞ。アーロンとクレールが迎えに来ると思うし」
ライカ「準備ですか。手伝いとかは」
拓哉「お前らが主役だから、しなくていいさ。じゃ、行ってくる」
キンジ「おう」
ライカ「また後で」
拓哉「ああ」

俺はホテルへ向かう。ホテルには、幹部たちが揃っていた。

エド「拓哉さん、お疲れです」
拓哉「おう」

コイツはエドワード・上野・ウエストウッド。黄金の夜明けをア
じいさん

レイスターと一緒に立ち上げたウィリアム・ウエストウッドの曾孫で、もちろん幹部の一人だ。
魔術は基本なんでも出来る、オールラウンダーな奴である。

拓哉「準備は今どんなもんだ？」
エリ「あと１時間もあれば大丈夫かと」
拓哉「そうか。じゃあ厨房の方を見てくるよ」

コイツはエリック・アレキサンダー。Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏの征服王イスカンダルでおなじみ、アレクサンドロス大王の子孫だ。かなり信頼できるので、幹部を任されている。
そして俺は厨房へ向かう。中では数人が料理をしていた。

拓哉「料理の方はどうだ？」
フェ「あっ、拓哉。大丈夫よ」
拓哉「そうか。じゃあ、頼むぞ」
フェ「ええ」

厨房を後にし、他のところを見て回る。途中、中世の魔術師・錬金術師と、近代の科学者の間の存在である、ジャンバッティスタ・デッラ・ポルタの子孫で、デッラ・ポルタ１８世である、カルラ・デッラ・ポルタに会った。

拓哉「カルラ、どうした？」
カルラ「あっ、拓哉さん。久しぶり」
拓哉「久しぶり」
カルラ「私は特に何もしてないんだけど、強いて言うなら邪魔にならないようにどいてるだけかな」
拓哉「そうか。邪魔はしないようにな」
カルラ「うん」

こんな感じの人間だが、魔術を使うと人格が変わる上に魔力量も侮れない。
得意とするのは、現代の科学と中世の魔術を組み合わせて戦うことだ。格闘も得意で、ＣＱＣ、バーリ・トゥード、ソバット、カポエイラなんでもござれだ。

拓哉「じゃあ俺寝るから、始まる３０分前になったら起こしてくれるか？」
カルラ「分かった。おやすみ」
拓哉「おやすみ」

こうして俺は眠りについた。しばらく目を閉じているとすぐに意識は闇に落ちていく。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

歓迎会準備（後書き）

今公開されている黄金の夜明け上層部
（※並び順は信頼度）
リーダー
土屋・拓哉・クロウリー５世
副リーダー
フェイリス・ミダース
幹部
１，エリック・アレキサンダー　Ｎｅｗ
２，？？？
３，アーロン・モーガン
４，？？？
５，クレール・ショコヨトル
６，？？？
７，？？？
８，カルラ・デッラ・ポルタ　Ｎｅｗ
９，？？？
１０，エドワード・上野・ウエストウッド　Ｎｅｗ

歓迎会と突然の乱入者

カルラ「拓哉さん。起きて」
拓哉「んぅ……。あぁ、もう時間か？」
カルラ「はい。アーロンさんとクレールさんがキンジさんとライカさんのお迎えに向かいました」
拓哉「そうか。じゃ、俺たちもそろそろホールに向かうとしようか」
カルラ「はい」

俺たちはホテルのホールに向かう。そこにはたくさんの料理が置いてあり、様々なお酒もある。

フェ「あ、拓哉。もう少しで歓迎会が始まるわよ。マーガレットは別室にいるわ。アーロンたちにキンジ君を連れてきたときに一緒に連れてくるように言っておいた」
拓哉「そうか。みんなも準備はいいか？」
幹部『はい』
拓哉「そうか。そろそろだぞ」

ガチャリ。ホールのドアが開く。そこに入ってきたのはキンジたちだった。

拓哉「よぉ、キンジ。今より、新メンバー歓迎会を始めるぜぇ！」
幹部『うおぉぉぉ！！』
キンジ「うぉっ！スゲェ……」
ライカ「すごいっすね」

キンジとライカは驚いている。そりゃあ、幹部のみなさんの叫びを聞いたしな。

拓哉「まずは乾杯と行こうか。グラスを持て」

みんながグラスを持ったので、それぞれにビールを注いでいく。

拓哉「ビール、みんな持ったか？それじゃ、新メンバー追加を歓迎して、乾杯！」

幹部『カンパーイ！！！！』

キン，ライ，マリ「「「乾杯！」」」

乾杯を終え、みんなは料理を取り、食べ始める。

拓哉「ま、自己紹介と行こうか。キンジ」

キンジ「ああ。俺は遠山キンジです。拓哉の友人です。皆さんの足を引っ張らないように頑張りたいと思います！」

幹部たちは拍手をする。次はライカだ。

拓哉「次、ライカ」

ライカ「はい。アタシは火野ライカです。拓哉先輩の後輩です。皆さんに少しでも近づけるように頑張りたいと思います！」

拓哉「最後だ。マーガレット・マリー」

マリー「マーガレット・マリーだ。元々は魔女宗の人間だったが、拓哉に拾われた。私も頑張っていこうと思う」

幹部たちも拍手をする。次は俺たちの番だが、俺は最後でいいだろう。

拓哉「ほら、お前たちも自己紹介だ」

幹部たちに自己紹介を促す。

エリ「僕は、エリック・アレキサンダー。黄金の夜明けの幹部を任されているものです。キンジ君、ライカさん、マーガレットさん、よろしくお願いします」

キン，ライ「「よろしくお願いします」」

マリー「よろしく頼む」

拓哉「次だ」

雄也「ああ」

次に出てきたのは沖野雄也。日本の魔術師で、実家は神社。そこの神主の息子さんだそうだ。その神社は代々魔術を使う家系で、親父さんの魔力は相当なものだった。

雄也「沖野雄也。実家は神社で、代々魔術師の家系だ。遠山、火野、マリー、よろしく頼むぜ」

拓哉「つぎ、アーロンな」

アー「僕の自己紹介は必要ないと思いますが、一応しておきますね。アーロン・モーガンです。これからもよろしく」

拓哉「次はエイミー。頼んだ」

エイ「はい」

次に俺が指名したのは、エイミー・ヴェリス・スターレン。武偵高の特殊操作研究科（CVR）でもやっていけそうな美しい顔立ちに、まさにボンッ・キュッ・ボンッなスタイル、さらに素晴らしい魔術師と三拍子揃っている完璧な女性だ。

キンジを見ると、ヒスりそうになっていたみたいだ。

エイ「エイミー・ヴェリス・スターレンです。任務で一緒になったらまたよろしくお願いします」

キンジ「は、はい／／／」
ライカ「よろしくお願いします」
マリー「よろしく頼む」
拓哉「よし。次、クレール」
クレ「自己紹介は必要ないと思うけど、クレール・ショコヨトルよ。これからもよろしくね」

クレールの自己紹介も終わり、次に出てきたのは、新野ジュリオだ。日本人とイギリス人のハーフで、無口な奴だ。

ジュ「……新野ジュリオ。……日本とイギリスのハーフ。……よろしく」
拓哉「もう少し喋っても良かったんじゃ……。次は銀髪、よろしく」
銀髪「分かった」

銀髪がステージに上がる。あ、もちろん銀髪は本名じゃないよ。コードネームのようなものだよ。

銀髪「僕は銀髪。本名は教えられない。だから銀髪と呼んで欲しい。よろしく」

僕が一人称だが、この人は女性だ。いわゆる僕っ娘というやつだな。髪は腰まで伸びる銀髪で、スタイルはペッタンコなところを除けば素晴らしい。本人はペッタンコを気にしていないそうだが。

拓哉「カルラ、次はお前だぞ」
カルラ「うん。私はカルラ。カルラ・デッラ・ポルタよ。よろしくね」

カルラは年齢21にしていわゆる子供体型で、エイミーとは正反

対だ。本人は気にしていないそうです。
拓哉「次。ヴィリエ」
ヴィ「わかったわ」

次はヴィリエ・キャスト。右目が碧眼で左目が紅眼のオッドアイに金髪の少女で、同い年だ。

ヴィ「ヴィリエ・キャストよ。オッドアイだけど、あまり気にしないで欲しいわ。遠山君や拓哉と同い年よ」
拓哉「よし、最後。エド」
エド「ああ。エドワード・上野・ウエストウッドだ。エドって読んでくれ。よろしく頼む」

これで幹部十人の自己紹介は終わり。後はフェイリスと俺の自己紹介だ。

フェ「次は私ね。フェイリス・ミダース、副リーダーよ。よろしくね」
拓哉「最後は俺だな。俺はこいつらを纏めるリーダー、土屋・拓哉・クロウリー5世だ。俺たち、黄金の夜明けは、お前たちを歓迎しよう。今より君たちは正式に黄金の夜明けのメンバーとなった」

幹部たちも拍手をする。これでキンジたちも黄金の夜明けの一員だ。
俺たちは1時間ほど騒いでいると、突然の乱入者が来た。
諜報員「失礼します！拓哉様、魔術結社『金翼の生誕』が拓哉様を狙って動き始めました！」
拓哉「『金翼の生誕』か。会議室に正規メンバーAチームを集めろ。

キンジ、ライカ、マーガレットは初任務だ。Ａチームと動いてもらう」

キンジ「分かった」

拓哉「みんな、会議室に迎え」

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！

歓迎会と突然の乱入者（後書き）

今公開されている黄金の夜明け上層部
（※並び順は信頼度）
リーダー
土屋・拓哉・クロウリー５世
副リーダー
フェイリス・ミダース
幹部
１，エリック・アレキサンダー
２，沖野雄也　Ｎｅｗ
３，アーロン・モーガン
４，エイミー・ヴェリス・スターレン　Ｎｅｗ
５，クレール・ショコヨトル
６，新野ジュリオ　Ｎｅｗ
７，銀髪　Ｎｅｗ
８，カルラ・デッラ・ポルタ
９，ヴィリエ・キャスト　Ｎｅｗ
１０，エドワード・上野・ウエストウッド

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8617v/

緋弾と世紀の大魔術師

2012年1月14日15時46分発行